

下津令遺跡2

(西尾崎2・3地区、向条谷地区、中ヶ原地区)

2015

公益財団法人山口県ひとづくり財團
山口県埋蔵文化財センター

防府市教育委員会

しも つ りょう い せき
下 津 令 遺 跡 2

にし お さき むかじょうだに なか が はら
(西尾崎2・3地区、向条谷地区、中ヶ原地区)

2015

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
防府市教育委員会

序

本書は防府市大字台道地内の農地整備事業の実施に先立ち、同地内に所在する下津令遺跡において、公益財團法人山口県ひとづくり財團山口県埋蔵文化財センターが山口県山口農林事務所から委託を受け、防府市教育委員会と共同で実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

歴史的財産である遺跡の保護については、基本的には現状保存が望ましいところですが、開発事業等に伴いやむを得ず消失することになる部分については、事前に発掘調査を実施し関係機関と調整を図りながら記録保存することとしております。

このたびの発掘調査は、平成25年度下津令遺跡発掘調査（沖ノ下1地区、西尾崎1地区）に引き続き、西尾崎2・3地区、向条谷地区、中ヶ原地区の4か所で実施したものですが、調査総面積は約11,500m²と広範囲にわたる中、それぞれの地区から過去の人々の生活や文化等を知る上で、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。古墳時代から室町時代にかけての集落に関する遺構とともに、弥生時代から室町時代までの幅広い年代の遺物が出土し、この地で脈々と歴史が受け継がれてきた様子がうかがえます。

この発掘調査をまとめた本書が、文化財愛護への理解を深めるとともに、教育及び文化の振興並びに学術研究の資料として広く活用されることはもとより、本書を通じ、ふるさとの歴史や文化を改めて知っていただくことで、郷土に対する愛着をさらにもつ契機となり、活力とうるおいに満ちた郷土の創造と発展に寄与することを心から祈念する次第です。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び報告書の作成に当たり、御指導及び御協力をいただきました関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成27年3月

公益財團法人山口県ひとづくり財團
理事長 松永貞昭

序

本書は、防府市大字台道地内での農地整備事業に伴う下津令遺跡の発掘調査の報告です。調査は公益財團法人山口県ひとづくり財團山口県埋蔵文化財センターと防府市教育委員会とで実施いたしました。

防府市は、原始古代から近世近代にわたる多くの歴史的遺産に恵まれており、特に古代律令体制時には周防国の国府が置かれ、「周防国衙跡」として史跡指定され遺構の一部が保存されております。

この度の調査では、向条谷地区と中ヶ原地区から古墳時代の住居などの遺構が確認されました。防府市域においては古墳時代の集落遺跡は少なく、当時のムラの状況を知る資料として重要です。

また西尾崎2地区において古代の建物跡、製塙土器、鍛冶関係の遺構などが確認されたことは、周防国府と山口市にある周防鋳銭司のほぼ中間に位置するこの遺跡の性格を考える上で示唆に富むものと考えられます。

多くの成果を得たこの発掘調査の実施にあたっては、文化庁、山口県教育委員会からご指導を、また地元下津令地区の皆様方からは多大なご協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成27年3月

防府市教育委員会

教育長 杉山一茂

例 言

- 1 本書は、平成26年度に実施した下津令遺跡（西尾崎2・3地区、向条谷地区、中ヶ原地区）（山口県防府市大字台道地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県山口農林事務所の委託〔契約名：農地整備事業（経営体育成型）下津令地区 埋蔵文化財発掘調査業務〕を受け、文化庁国庫補助を受けた防府市教育委員会とともに実施した。
- 3 調査組織は、次のとおりである。

調査主体 公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター

防府市教育委員会

調査担当 文化財専門員 光 永 辰 男

文化財専門員 水 津 亜希子

文化財専門員 小 河 泰 史

文化財専門員 西 尾 健 司

文化財専門員 櫻 昭 博

調 査 員 山 田 圭 子

調 査 員 臨 山 佳 奈

埋蔵文化財係長 杉 原 和 恵（防府市教育委員会）

- 4 本書の第1図は、山口県山口農林事務所提供的地図を元に作成した。第2図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「防府」「小郡」を複製使用した。
- 5 本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北、標高は海拔高度（m）で示している。
- 6 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 8 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S I : 竪穴建物	S B : 掘立柱建物	S K : 土坑	S L : 炉	S E : 井戸
S D : 溝	S P : 柱穴	S X : 性格不明遺構		
- 9 出土遺物実測図について、断面黒塗は須恵器を表す。
- 10 報告書作成の過程で、磁器については徳留大輔氏・市来真澄氏（山口県立萩美術館・浦上記念館）、石器・石製品の石材については亀谷敦氏（山口県立山口博物館）、SK512出土の魚骨の魚種については沖田絵麻氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）に御教示をいただいた。
- 11 資料の鑑定・分析に関して、放射性炭素年代測定（AMS測定）ならびに金属学的分析を業者に委託し、その成果を第VI章に掲載した。
- 12 本書の作成・執筆は、光永・水津・小河・西尾・櫻・山田が共同で行い、編集は光永が行った。

本文目次

I 調査に至る経緯と調査の概要	1
II 遺跡の位置と環境	3
III 西尾崎2・3地区調査の成果	5
1 遺構	5
2 遺物	19
IV 向条谷地区調査の成果	25
1 遺構	25
2 遺物	41
V 中ヶ原地区調査の成果	59
1 遺構	59
2 遺物	81
VI 自然科学分析	91
1 下津令遺跡における放射性炭素年代測定	91
2 下津令遺跡出土鉱滓の分析調査	94
VII 総括	101

挿図目次

第1図 遺跡周辺図	1	第30図 出土遺物実測図(2)	43
第2図 下津令遺跡の位置と周辺の主な遺跡	3	第31図 出土遺物実測図(3)	44
西尾崎2・3地区			
第3図 西尾崎2地区遺構配置図	6	第32図 出土遺物実測図(4)	46
第4図 西尾崎3地区遺構配置図	7	第33図 出土遺物実測図(5)	47
第5図 西尾崎3地区東壁土層断面図	8	第34図 出土遺物実測図(6)	48
第6図 SB101・103実測図	9	第35図 出土遺物実測図(7)	50
第7図 SB104・201実測図	10	第36図 出土遺物実測図(8)	51
第8図 SB203実測図	11	第37図 出土遺物実測図(9)	52
第9図 SK102・105実測図	12	第38図 出土遺物実測図(10)	53
中ヶ原地区			
第10図 SL101・102・103・SD104実測図	13	第39図 中ヶ原地区北部遺構配置図	60・61
第11図 SP1001(SB104)・1007・1008 ·1009実測図	15	第40図 中ヶ原地区中央部遺構配置図	62・63
第12図 SP1011・1016・1017・1018実測図	16	第41図 中ヶ原地区南部遺構配置図	64・65
第13図 SP1026・1027(SB101)、2001・2002 ·2005(SB201)実測図	17	第42図 南部谷状地形土層断面実測図	66
第14図 出土遺物実測図(1)	20	第43図 SI601・SK607実測図	67
第15図 出土遺物実測図(2)	21	第44図 SI602・603実測図	68
第16図 出土遺物実測図(3)	22	第45図 SB701・702・703実測図	69
向条谷地区			
第17図 遺物包含層土層断面実測図	25	第46図 SK501・503・506実測図	70
第18図 向条谷地区遺構配置図	26・27	第47図 SK505・509・510・511実測図	71
第19図 SI401実測図	28	第48図 SK514・701・SL501実測図	72
第20図 SB301・302実測図	29	第49図 SX701実測図	74
第21図 SB303・401実測図	30	第50図 SX703実測図	75
第22図 SB402・403実測図	31	第51図 SD701・704実測図	76
第23図 SB404・405実測図	32	第52図 SP6003・7001・7035(SB703) ·7047実測図	77
第24図 SK308・309・SL301・401実測図	33	第53図 SP7052・7082(SB701)実測図	78
第25図 SE401・SD408実測図	34	第54図 谷状地形遺物包含層 土器集中部実測図	79
第26図 SD401実測図	36・37	第55図 出土遺物実測図(1)	81
第27図 SP3001(SB302)・3016・3018 ·3025(SB303)・3049・4002実測図	38	第56図 出土遺物実測図(2)	82
第28図 SP4061(SB402)・4064・4065・4068(SB403) ·4079・4083(SB404)実測図	39	第57図 出土遺物実測図(3)	83
第29図 出土遺物実測図(1)	42	第58図 出土遺物実測図(4)	84
		第59図 出土遺物実測図(5)	86
		第60図 出土遺物実測図(6)	87
		第61図 出土遺物実測図(7)	88

表目次

第1表 西尾崎2・3地区掘立柱建物一覧表	18
第2表 西尾崎2・3地区土坑一覧表	18
第3表 西尾崎2・3地区溝一覧表	18
第4表 西尾崎2・3地区出土遺物観察一覧表	23・24
第5表 向条谷地区掘立柱建物一覧表	40
第6表 向条谷地区土坑一覧表	40
第7表 向条谷地区溝一覧表	40
第8表 向条谷地区出土遺物観察一覧表	54～58
第9表 中ヶ原地区掘立柱建物一覧表	80
第10表 中ヶ原地区土坑一覧表	80
第11表 中ヶ原地区溝一覧表	80
第12表 中ヶ原地区出土遺物観察一覧表	89・90
第13表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	92
第14表 供試材の履歴と調査項目	100
第15表 供試材の化学組成	100
第16表 出土遺物の調査結果のまとめ	100

図版目次

西尾崎2・3地区		SP2005(SB201)遺物出土状況
図版1	平成26年度調査区全景(合成写真)	図版9 出土遺物(1)
	西尾崎2・3地区全景	図版10 出土遺物(2)
図版2	西尾崎3地区東壁土層断面(西から)	図版11 出土遺物(3)
	SB101完掘状況(西から)	図版12 出土遺物(4)
	SB103完掘状況(西から)	図版13 出土遺物(5)
図版3	SB104完掘状況(西から)	図版14 出土遺物(6)
	SB201完掘状況(北から)	向条谷地区
図版4	SB203完掘状況(西から)	図版15 向条谷地区全景
	SK105遺物出土状況(北から)	図版16 SI401遺物出土状況(南から)
図版5	SK102遺物出土状況(南から)	SI401完掘状況(東から)
	SK102完掘状況(南から)	図版17 SB302完掘状況(南から)
図版6	SL101・102・103検出状況(西から)	SB303完掘状況(南から)
	SL101土層断面(東から)	図版18 SB401完掘状況(東から)
	SL102検出状況(南から)	SB402完掘状況(南から)
	SL103完掘状況(南から)	SB403完掘状況(西から)
	SD104土層断面(b-b')	SB405完掘状況(北から)
	SD104土層断面(c-c')(西から)	図版19 SK308完掘状況(東から)
図版7	SP1001(SB104)遺物出土状況	SK309遺物出土状況(東から)
	SP1007遺物出土状況	SL301土層断面(西から)
	SP1008遺物出土状況	SD408遺物出土状況(北から)
	SP1009遺物出土状況	SL401土層断面(南から)
	SP1011遺物出土状況	図版20 SD401全景(北から)
	SP1016遺物出土状況	SD401土器i出土状況(東から)
	SP1017遺物出土状況	SD401土器j出土状況(東から)
	SP1026(SB101)遺物出土状況	SD401土層断面(d-d')(南から)
図版8	SP1018遺物出土状況	SD401土層断面(f-f')(南から)
	SP2001(SB201)遺物出土状況	図版21 SD401土器k・l出土状況(東から)
	SP2002(SB201)遺物出土状況	SE401遺物出土状況(東から)

図版22	SP3001(SB302)遺物出土状況	谷状地形遺物包含層土器集中部(北から)
	SP3016遺物出土状況	図版44 SI601土層断面・遺物出土状況(西から)
	SP3018遺物出土状況	SI601遺物出土状況(北から)
	SP3025(SB303)遺物出土状況	図版45 SI602・603完掘状況(北から)
	SP3049遺物出土状況	SB701完掘状況(南から)
	SP4061(SB402)遺物出土状況	図版46 SB702完掘状況(東から)
	SP4068(SB403)遺物出土状況	SB703完掘状況(北から)
	SP4083(SB404)遺物出土状況	SK501遺物出土状況(北から)
図版23	出土遺物(1)	SK503遺物出土状況(南から)
図版24	出土遺物(2)	SK506土層断面(西から)
図版25	出土遺物(3)	図版47 SK509遺物出土状況(西から)
図版26	出土遺物(4)	SK514遺物出土状況(北から)
図版27	出土遺物(5)	図版48 SK510完掘状況(北から)
図版28	出土遺物(6)	SK511完掘状況(西から)
図版29	出土遺物(7)	SK701遺物出土状況(西から)
図版30	出土遺物(8)	SX703完掘状況(東から)
図版31	出土遺物(9)	SX703A煙道断面(北から)
図版32	出土遺物(10)	図版49 SX701土層断面・遺物出土状況(北から)
図版33	出土遺物(11)	SL501炭出土状況(西から)
図版34	出土遺物(12)	SD701土層断面(北から)
図版35	出土遺物(13)	SP6003遺物出土状況
図版36	出土遺物(14)	SP7001遺物出土状況
図版37	出土遺物(15)	SP7035(SB703)遺物出土状況
図版38	出土遺物(16)	図版50 出土遺物(1)
図版39	出土遺物(17)	図版51 出土遺物(2)
図版40	出土遺物(18)	図版52 出土遺物(3)
中ヶ原地区		図版53 出土遺物(4)
図版41	中ヶ原地区全景	図版54 出土遺物(5)
図版42	谷状地形全景(南から)	図版55 出土遺物(6)
	谷状地形上段近景(東から)	図版56 出土遺物(7)
図版43	谷状地形下段・土層断面(東から)	

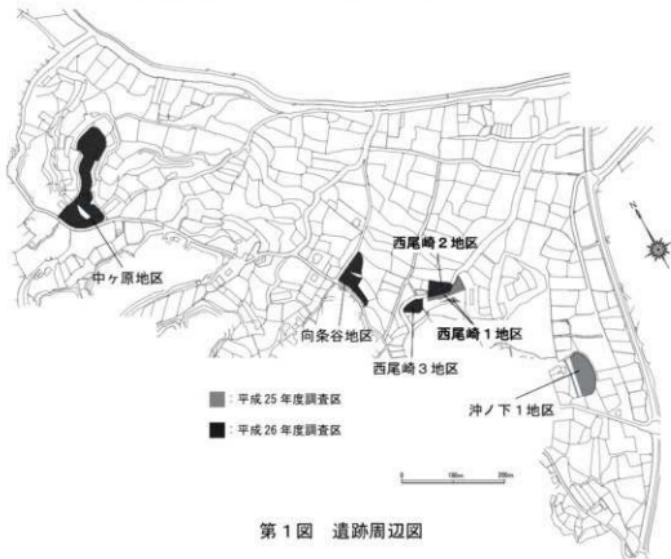
I 調査に至る経緯と調査の概要

山口県山口農林事務所は防府市大字台道における農業の競争力強化や、農村の活性化を図る目的で、農地整備事業（経営育成型）を進めている。山口県教育委員会は事業の実施に先立ち、対象地内の埋蔵文化財の有無を確認するため、平成22年に試掘調査を行った。その結果、土坑や柱穴等の遺構や土師器や瓦質土器等の遺物が見つかり、広範囲におよぶ集落跡が確認された。

試掘調査の結果を受けて、山口県教育委員会と事業主体である山口県山口農林事務所は遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事により遺構が削平される約29,000m²について、記録保存のための発掘調査を実施することになった。1年次の平成25年度にはそのうちの沖ノ下1地区（2,812m²）と西尾崎1地区（1,144m²）について、公益財団法人山口県ひとづくり財團山口県埋蔵文化財センターと防府市教育委員会が発掘調査を実施した。調査では古墳時代や中世を中心とする集落跡の様相が明らかとなり、この調査結果はすでに『下津令遺跡1』（山口県埋蔵文化財センター調査報告第86集）として刊行されている。

2年次に当たる平成26年度は1年次調査区の北西側に位置する西尾崎2地区および3地区（1,808m²）、向条谷地区（2,160m²）、中ヶ原地区（7,513m²）について、前年度に引き続き山口県山口農林事務所の委託を受けた山口県埋蔵文化財センターと文化庁国庫補助事業として防府市教育委員会が発掘調査を実施することになった。

現地調査を始めるに当たって、調査対象地区的現況確認や関連資料調査等を行う一方で、山口県山口農林事務所、大土地改良区等との打ち合わせを行い、近隣の小・中学校、警察署、消防署、自治会等に調査期間中における安全確保のための理解と協力を要請した。



第1図 遺跡周辺図

こうした事前の諸準備を経て、5月1日に重機による表土除去作業を中ヶ原地区から開始とともに、同日、発掘作業員説明会を実施し、作業内容の確認や安全管理等について周知徹底を図った。中ヶ原地区的表土除去作業は面積が広大であるばかりでなく、定められた廃土場までの運搬距離も長かったため約1か月を費やした。その間の5月8日には現地調査事務所を設置し、5月13日より表土除去作業と併行して、発掘作業員による遺構検出作業に入った。

6月中旬に遺構の実測図作成の基準となる国土座標軸を設置し、検出した遺構の分布状況を平板測量により記録した。遺構等の掘り込みは、遺物包含層、土坑、溝、柱穴の順に行うこととし、まず向条谷地区南側の広範囲にわたる遺物包含層を人力により除去したが、天候にも恵まれ、順調に作業を進めることができた。7月上旬、西尾崎2地区から始めた本格的な遺構の掘り込みは、7月初めの台風の接近や8月の連日の悪天候等により作業の進行にやや遅れが生じたが、8月半ばには西尾崎3地区、向条谷地区の調査がほぼ完了した。その間、必要に応じて、調査員が各遺構の実測図作成や記録写真撮影等を行うとともに、出土した遺物は、随時山口県埋蔵文化財センターに持ち帰り、洗浄、接合、復元等の整理作業を行った。

8月28日には西尾崎2・3地区、向条谷地区を中心とした空中写真撮影・空中写真測量を、8月30日には現地説明会を実施した。説明会では西尾崎2・3地区、向条谷地区とともに、中ヶ原地区的それまでの調査成果も合わせて公開し、地元住民を中心に約70人の見学者が遺跡を訪れた。

8月下旬から進めていた中ヶ原地区的遺構の掘り込みは、南側の谷状地形内で遺物包含層や客土の堆積が当初の見込みより広がることが判明し、再度、重機による土砂除去作業を行った上で、掘り込みを続けた。中ヶ原地区の調査面積は広大であったが、後世の削平等により遺構密度が比較的希薄であったこともあり、10月半ばには発掘作業を終えた。10月17日には中ヶ原地区を中心とした空中写真撮影・空中写真測量を行い、10月23日をもって、最終的な図面の確認や安全確保のための簡易な埋め戻し等を終え、現地調査を無事終了した。

その後、かねてから進めていた記録類の整理に本格的に着手し、出土遺物の実測図作成および写真撮影を行った後、挿図・写真図版の作成、原稿執筆等の作業を続け、この報告書を刊行するに至った。



重機による表土除去



遺構の掘り込み



現地説明会

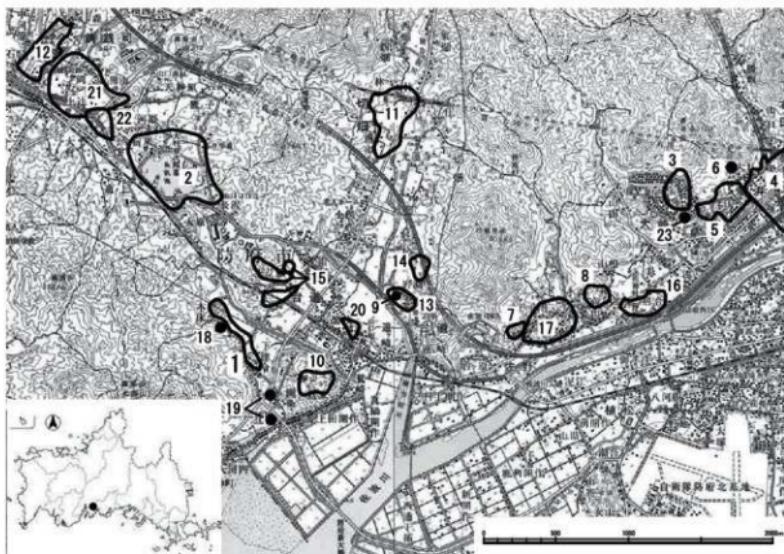
II 遺跡の位置と環境

下津令遺跡（第2図-1）は、防府市大字台道地内に所在する。南に大海湾を臨む大道地区は、防府平野の西側に位置し、東に楞嚴寺山、北に金山・花ヶ岳、西に龜尾山（大海山）と三方を山に囲まれている。周囲の山々は主に花崗岩質で、風化生成した砂土を河内・横曾根川が流下堆積し沖積平野を形成した。中世末の海岸線は「慶長国絵図控國周防国」（宇部市所蔵）をみると、大海湾が入り込み、遺跡の眼前まで海が迫っていたことがうかがえる。この頃の下津令は小綱を本郷とし、北は小保から南は大海にかけての総名で、現在の下津令より広範囲を指していたとされる。

歴史的には、大道地区周辺では、長沢池遺跡（同2）をはじめ、旧石器・縄文時代に遡って人々の痕跡を確認できるが、明確な構造は不明である。一方、大道地区内では、台道繁枝砂丘遺跡（同20）や本遺跡の河内川を挟んだ対岸に位置する上り熊遺跡（同15）からは縄文土器や土製品が出土している。

弥生時代の大道地区的様子は明確ではなかったが、今回の調査で弥生時代終末期の土坑が確認され、人々の生活の痕跡をわずかではあるが垣間見ることができた。

古墳時代前期には、防府市域内に古墳はほとんどみられないが、古墳時代後期以降、佐波川流域に次々に古墳や群集墳が築造される。国指定史跡で前方後円墳である大日古墳（同6）は、畿内との強い結びつきをうかがわせる。一方、佐野峠古墳群（同7）や向山古墳群（同8）などの群集墳、単独墳の岩淵古墳（同9）は、両袖式横穴式石室や竪穴式横口式石室の系譜をひく石室を有し、北部九州



1 下津令遺跡 2 長沢池遺跡 3 奥正権寺遺跡 4 下右田遺跡 5 大崎遺跡 6 大日古墳
9 岩淵古墳 10 萩山古墳群 11 切畑南遺跡 12 周防鈎鉄司遺跡 13 岩淵遺跡 14 原遺跡 15 上り熊遺跡
16 玉祖遺跡 17 佐野峠跡群 18 下山ノロ遺跡 19 且六百人塚・且二百人塚 20 台道繁枝砂丘遺跡 21 東禪寺・黒山遺跡
22 今宿遺跡 23 大崎岡古墳

第2図 下津令遺跡の位置と周辺の主要な遺跡

の影響を受けている。このように、古墳時代後期の防府は、北部九州と畿内の文化が入り混じった特異な地域といえよう。また、本調査区南東方向には柴山古墳群（同10）があり少なくとも12基の横穴式石室を有しており、大道地区における古墳時代後期的一大群集墳である。

古代になると、大道地区には、古代官道の中で最重要路線の山陽道が横断していたと考えられている。周防国府と周防鋳銭司（同12）とのほぼ中間に位置する立地にも恵まれ、地区内で大規模な集落跡が確認される。大道地区北部に位置する切畠南遺跡（同11）は、古代から中世の集落遺跡である。調査の結果、平安時代後半（11世紀）の銅精錬工房と考えられる建物や精錬炉が検出され、同遺跡が銅生産に関わった工人集落の可能性が高いとされる。遺跡北西部に位置する金山を『続日本紀』の「達理山」にあて、金山で産出した銅を切畠で加工し、周防鋳銭司に搬送したとする説もある。

中世中期以後になると、大内弘世の山口移鎮に伴い、南北を貫く山口道が整備された。海上交通では、大海湾が山口方面への運搬物資の荷揚げ港として、瀬戸内地域や東九州地域との交易拠点であった。このように、中世の下津令はますます交通の要所としての重要度を増していくことが想像できる。市も置かれており賑わっていたことであろう。下津令の市では、近辺に岩淵遺跡（同13）、原遺跡（同14）といった瓦質土器生産地や塩田を控え、それに対応した商品を取り扱っていたとされている。『防長風土注進案』には「室町時代には大内氏の所領となっていた下津令において塩の生産があり、足利義持の死に際し大内盛見が下津令30石地を仏事料として塩44俵3升を国清寺（現洞春寺）に寄進した」という證文がある。製塩所があったとされるが、今回の調査では、時代は遡るもの、美濃ヶ浜式製塩土器の脚部とみられる破片や煎熬に使用したと思われる古代の土器などが出土しており、早くから塩づくりが行われていたと考えられる。

下津令遺跡周辺には多くの中世の遺跡が発見されている。下津令遺跡のすぐ近くにある中世末から近世初め頃の下山ノ口遺跡（同18）からは、きわめて特異な形態である五輪塔が載った石積みの基壇と、火葬骨の入った壺を石で囲った墓が出土している。同時期の遺構や遺物も今回確認されていることから、当時の下津令遺跡の人々の墓地空間とも考えられる。また、川を隔てた上り熊遺跡からは、地下式横穴や倒置土器棺墓が出土している。さらに鍛冶炉跡も検出されており、切畠の精錬工人と何らかの関連性も想像できる。

この地の寺社については、平安時代に下津令宮の原に神社が創建され、中世になって繁枝神社に遷神されたとの記録が残る。また、今回の調査区の一つである向条谷地区は扇状地扇端部にあたり、その扇頂部に「瑞光寺」という地名が今も残るが寺の存在した時期や規模などは不明である。

引用・参考文献

- 防府市教育委員会『防府市史 上巻』1956 続防府市史刊行会『続防府市史』1960
山口県文書館『防長風土注進案』1964
山口市教育委員会『周防鋳銭司跡』1978 山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書 製塩』1984
防府市史編纂委員会『防府市史 史料I』2000 同『防府市史 通史I 原始・古代・中世』2004
防府市史編纂委員会『防府市史 資料II 考古資料・文化財編』2004
山口県埋蔵文化財センター『岩淵遺跡』2001 同『原遺跡』2001
防府市教育委員会『井上山経塚・下山ノ口遺跡発掘調査報告』2001
山口県埋蔵文化財センター『上り熊遺跡I』2008 同『上り熊遺跡II』2009 同『上り熊遺跡III』2010
山口県埋蔵文化財センター『下津令遺跡I』2014

III 西尾崎2・3地区調査の成果

1 遺構

西尾崎地区は南から北に伸びる丘陵の先端部に立地する。調査区は昨年度の調査区西尾崎1地区に隣接し、東側の2地区と、西側の3地区に分かれる。標高は、南側で約7.5m、北側で約6.0mと、地形は南から北へ向かって緩やかに傾斜する。

2・3地区のはば中間地点に当たる3地区東壁をもとに基本の層序を述べると、表土→耕作土→盤土→整地土→遺物包含層→地山である。遺物包含層の厚さは12～18cmで、中世の土師器片を含んでいることが確認された。近世の遺物はSD104から出土の寛永通寶1点のみであることから、近世初頭のある時期に耕作地として利用され始め、現在に至っているものと考えられる。

今回の調査では、柱穴を約320個検出し、掘立柱建物を7棟復元した。その他にも土坑18基、炉3基、溝5条、性格不明遺構5基を検出した。出土遺物から主な時期は、古代と中世と考えられる。

(1) 掘立柱建物

今回復元できた7棟の内訳は、2地区が4棟、3地区が3棟である。床面積が20m²未満の比較的小規模なものが3棟、30m²を超えるものが2棟であった。2地区的4棟は、棟方向は直交するが方向性は3°以内に全て収まる。先後関係は不明であるが、出土遺物から同時期の建物と考えられる。3地区的3棟については、棟方向や規模などの違いから2期存在するものと考えられる。

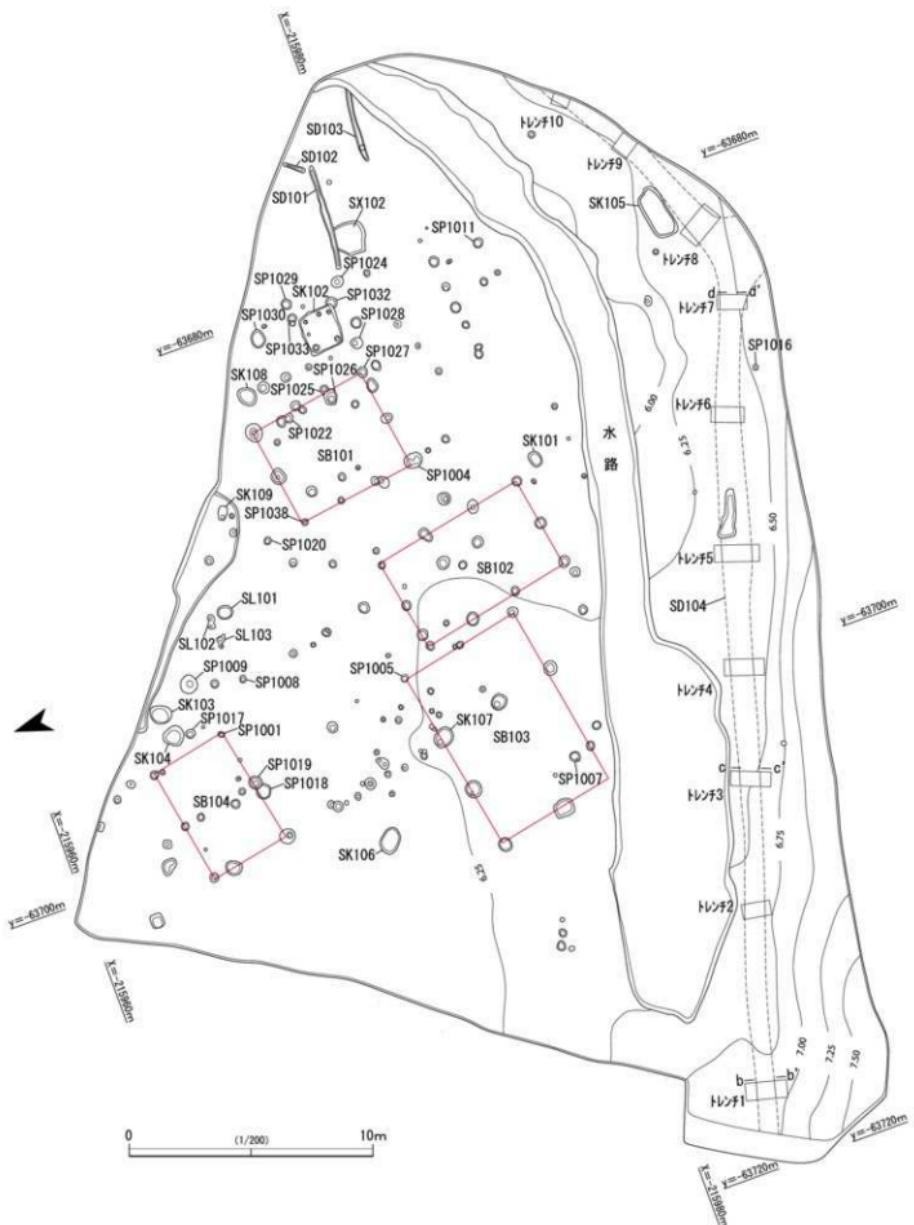
SB101（第6図 図版2） 調査区東側に位置する建物で、桁行3間（5.15m）×梁行2間（4.20m）、床面積21.63m²を測る。棟方向はN10°Wである。SP1004からは、須恵器の杯蓋（1）、杯身（2）、SP1038からは杯身（3）、SP1026からは杯身（4）、製塙土器（5・6）が出土した。出土遺物から8世紀中頃から後半の建物と考えられる。

SB103（第6図 図版2） 調査区中央付近に位置する建物で、桁行3間（7.98m）×梁行2間（5.20m）、床面積41.50m²を測る。今回の調査で最も規模の大きい掘立柱建物である。棟方向はN77°Eである。攪乱により南西隅の角柱が検出できなかった。SP1005からは須恵器の杯蓋（7）、杯身（8）、短頸壺（9）が出土した。出土遺物から8世紀中頃～後半の建物と考えられる。

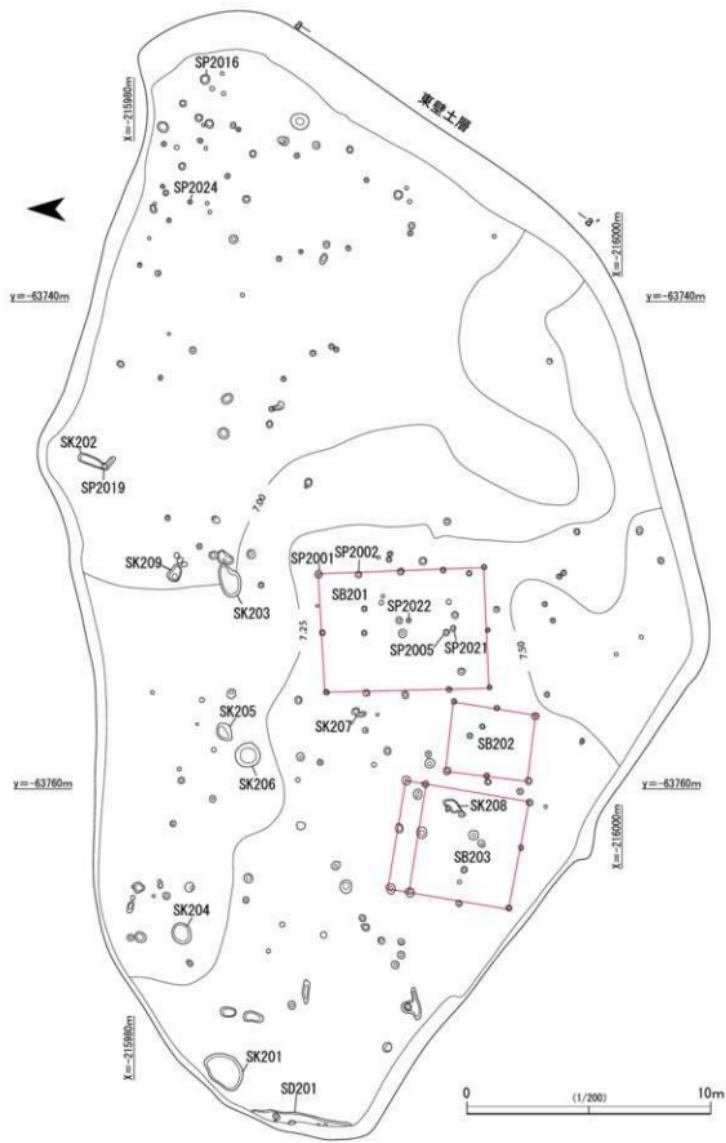
SB104（第7図 図版3） 調査区北端に位置する建物で、桁行2間（5.00m）×梁行1間（3.25m）、床面積16.25m²を測る。棟方向はN80°Eである。SP1001からは須恵器杯蓋（10）、SP1019からも杯蓋（11）が出土した。また他の構成柱穴から製塙土器片が出土している。棟方向はSB101と直交するが、方向性は一致する。出土遺物からもSB101と同時期の建物と考えられる。

SB201（第7図 図版3） 調査区中央に位置する総柱の建物で、桁行4間（6.82m）×梁行2間（4.95m）、床面積33.76m²を測る。棟方向はN1°Wとほぼ真北方向である。SP2001からは青磁皿（15）、SP2002からは土師器皿（12）、SP2005からは土師器椀（13）、杯（14）が出土した。また、他の構成柱穴からは土師器の鍋も出土している。出土遺物から14世紀の建物と考えられる。

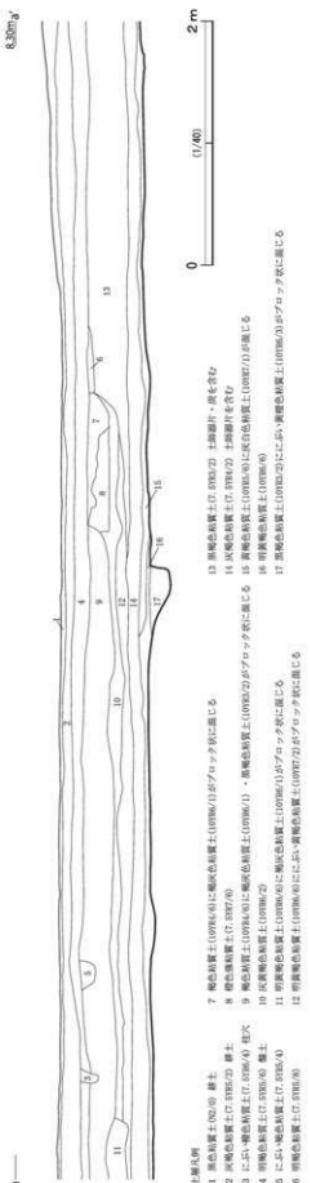
SB203（第8図 図版4） SB201の西側約4mに位置する建物で、桁行2間（4.40m）×梁行2間（4.15m）、床面積18.26m²を測り、北側には長さ80cmの廻を伴う。棟方向はN81°Wである。東側1mの位置には同じ方向性の小規模なSB202が存在しており、倉庫と考えられる。構成柱穴からは土師



第3図 西尾崎2地区遺構配置図



第4図 西尾崎3地区遺構配置図



西尾崎3地区東壁土層断面図
第5図

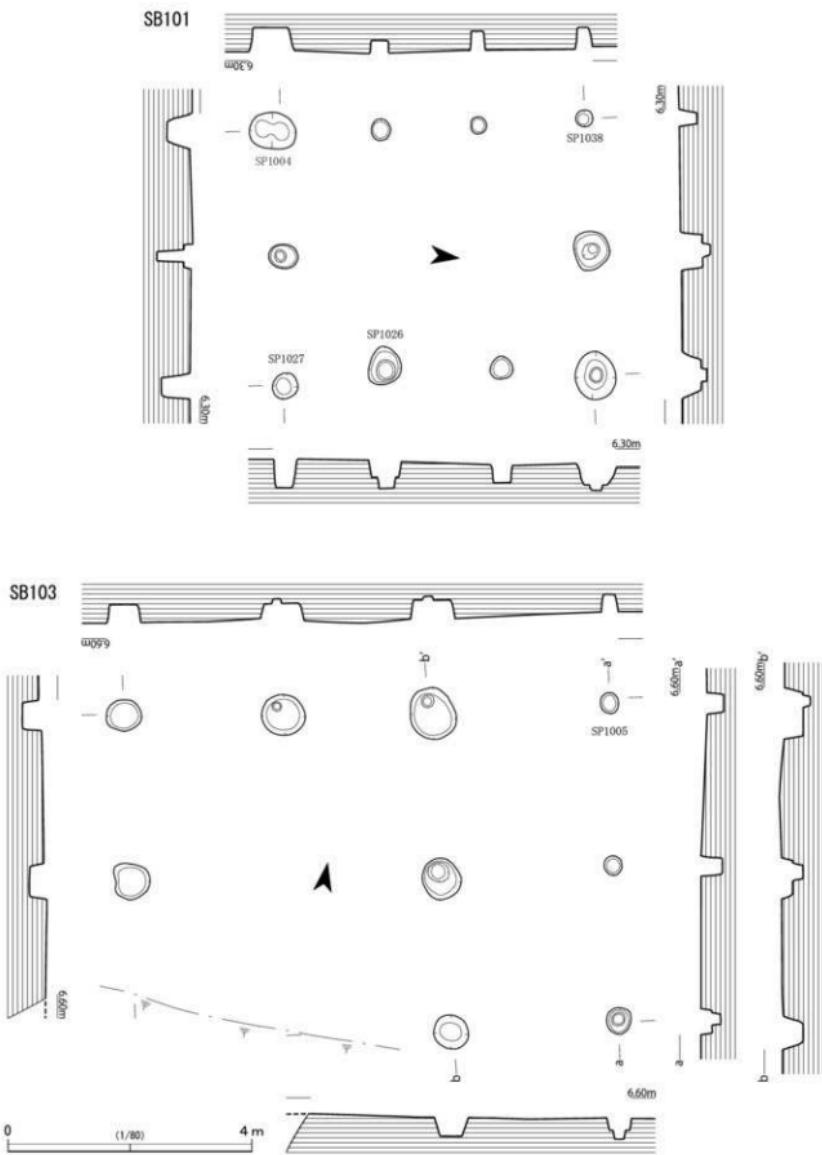
器甕や椀が出土しているが、少量小片のためSB201との先後関係は不明である。中世の建物と考えられる。

(2) 土坑

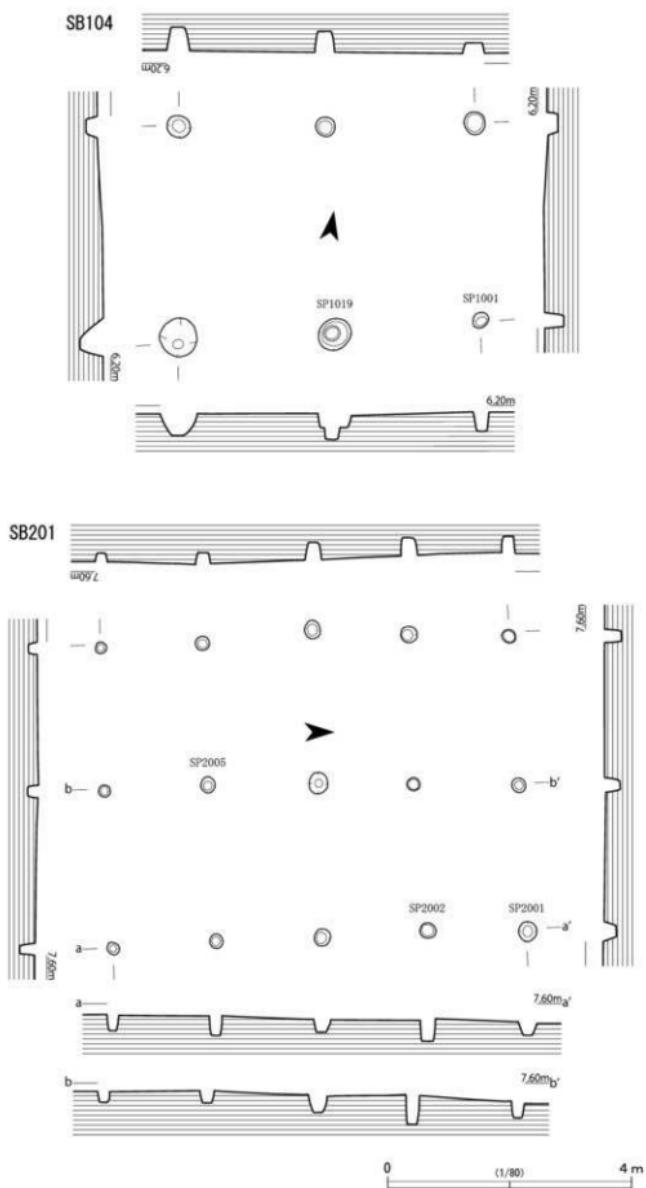
2地区と3地区それぞれ9基ずつの合計で18基の土坑が検出された。長軸で1.5mを超えるものが4基、1m未満のものが10基と、全体的に小規模である。また、深さも30cm未満のものが15基と大半を占め、強く削平を受けていることがうかがえる。遺物の出方は対照的で、2地区で遺物が出土しなかった土坑が1基に対し、3地区では遺物が出土した土坑がわずか1基しかなかった。

SK102（第9図 図版5）調査区東側に位置する竪穴の土坑で、平面形は長方形を呈する。規模は長軸164cm、短軸154cm、深さ19cmを測る。床面四隅に柱穴があり、床面からの深さは26~33cmとしっかりしている。土坑中央付近の埋土からは焼土や炭が出土し、火を使った行為がうかがえた。また、床面直上から煎熬用の製塩土器と思われる土器（19）が伏せた形で出土した。須恵器杯蓋（16）、杯身（17）、壺（18）、他にも土師器甕や鉢、須恵器大甕などの土器片が出土している。ただ、柱穴同士の間隔は70~90cmと短く、煎熬を目的とした施設とは考えにくく、何らかの祭祀をこの構造で行った可能性が高い。出土遺物から8世紀末から9世紀初頭と考えられる。

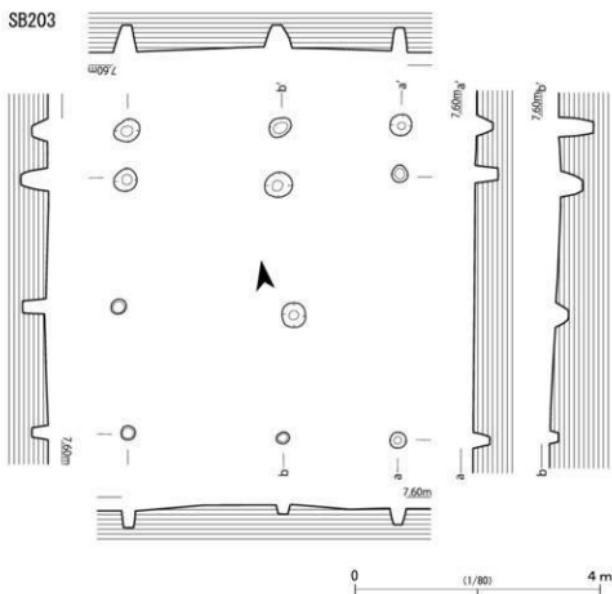
SK105（第9図 図版4）調査区南側に位置する土坑で、平面形は現状で長方形を呈する。規模は長軸221cm、短軸最大値108cm、深さ13cmを測る。南側はSD104に切られる。埋土中から須恵器杯身（21）、広口壺（22）、土師器甕（23）が出土している。出土遺物から古代の遺構と考えられる。



第6図 SB101・103 実測図



第7図 SB104・201 実測図



第8図 SB203 実測図

(3) 炉

炉と考えられる遺構は3基で、すべて2地区内で隣接する形で検出された。いずれも地床炉と考えられる。少量の鉛滓と瓦壁片のほかに遺物が出土せず、遺構の性格や年代など不明な点が多い。科学分析の結果、SL103は銅の精錬もしくは銅製品を製作した炉の可能性が指摘されている。

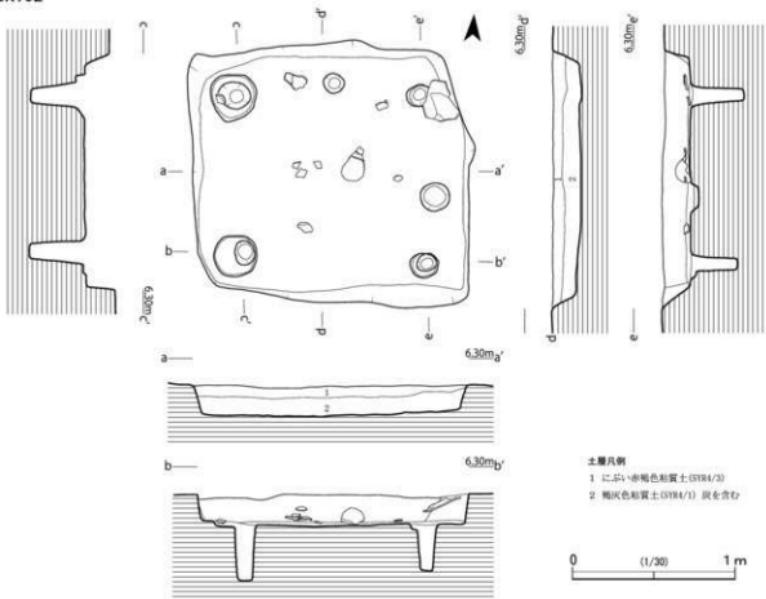
SL101（第10図 図版6） 平面形は梢円形で、長径43cm、短径32cm、深さ3cmの規模をもつ。炉床は固くしまり、その周囲は被熱のため10～25cmの範囲で炭や焼土、焼けしまりが認められた。

SL102・SL103（第10図 図版6） 2基は40cmの距離をおいて隣接する炉で、規模・構造・被熱状況などで共通点が多い。両者ともに炉床の底部が直径15～20cmの焼けしまりとして存在し、炉床の周囲には被熱による赤変が認められる。さらに、そのすぐ脇には平面梢円形で皿状のくぼみが存在する。SL102・SL103から炉壁片（25・26）が出土している。

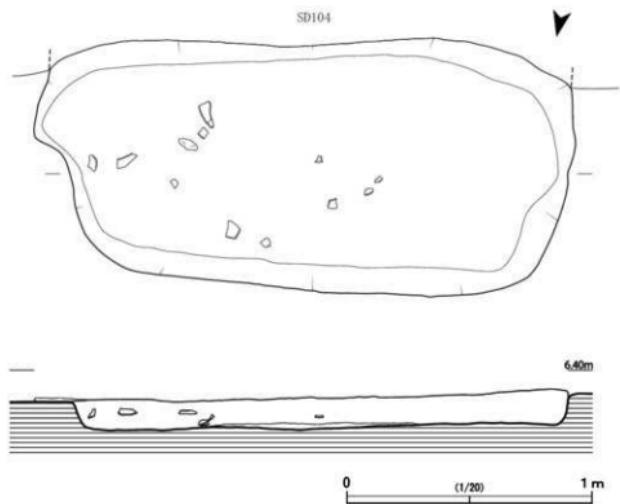
(4) 溝

2地区で4条、3地区で1条の溝が検出された。規模や方向性、年代など規則性は認められない。SD104（第10図 図版6） 調査区南端に位置し、西流する。途中南から溝が合流し、向きを北東方向に変える。確認長は46.10m、幅75～120cm、深さ73cm、標高差55cmである。埋土中から土師質土器鍋（27）、瓦質土器足鍋（28）、石臼（29）、鉄釘（30）、銅錢（31）が出土している。出土遺物から中世後半から近世初頭の遺構と考えられる。

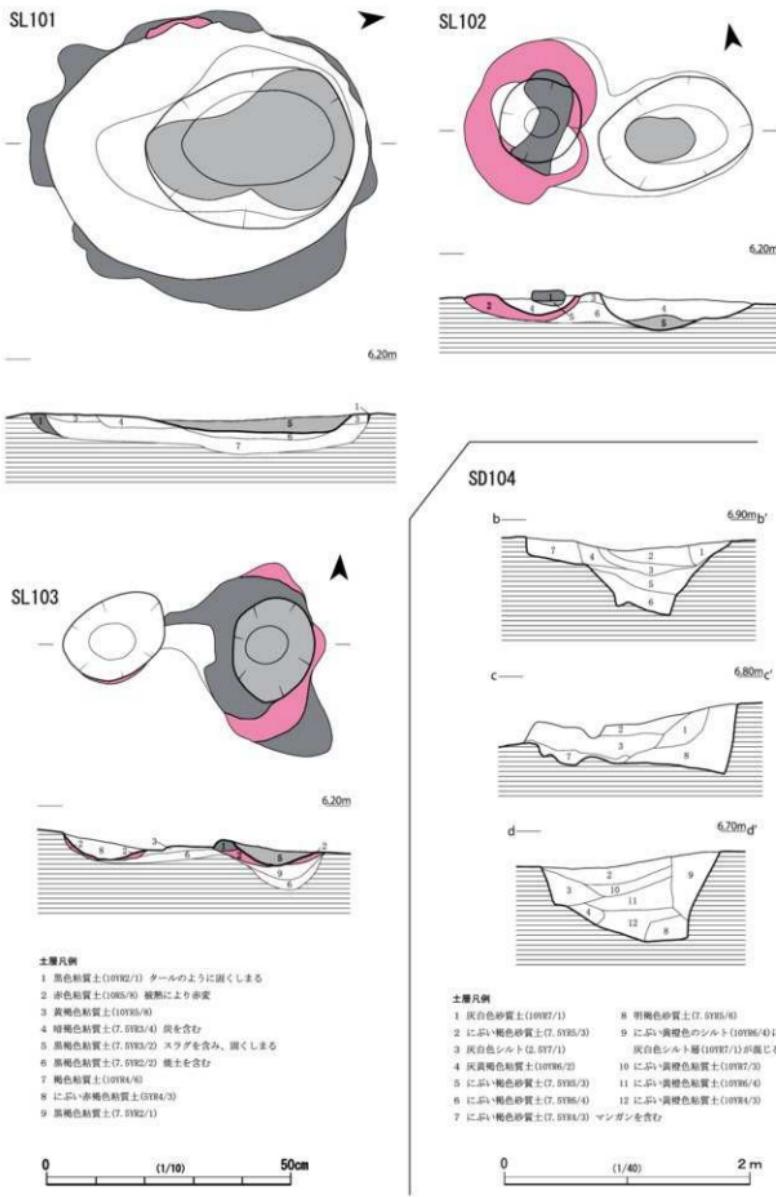
SK102



SK105



第9図 SK102・105実測図



第10図 SL101・102・103・SD104 実測図

(5) 柱穴

検出された柱穴は320個あまりで、63個の柱穴から遺物が出土した。耕地化の際に強く削平を受けたと思われる2地区南側や3地区は遺構が浅く遺物量も少ない。

SP1001（SB104）（第11図 図版7） 北側に位置し、SB104を構成する柱穴の一つである。規模は径20～22cm、深さ23cmを測る。検出面に近い位置で須恵器杯蓋（10）が出土した。出土遺物から8世紀後半～9世紀初頭の遺構と考えられる。

SP1007（第11図 図版7） 中央部に位置し、規模は径39～46cm、深さ9cmを測る。検出面に近い位置で須恵器杯蓋（38）が出土した。出土遺物から8世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

SP1008（第11図 図版7） 北側に位置し、規模は径22～24cm、深さ14cmを測る。検出面に近い位置で須恵器大甕、土師器甕の土器片が出土した。出土遺物から古代の遺構と考えられる。

SP1009（第11図 図版7） 北側に位置し、規模は径47～57cm、深さ46cmを測る。検出面に近い位置で須恵器杯身（39）が出土した。出土遺物から8世紀後半～9世紀初頭の遺構と考えられる。

SP1011（第12図 図版7） 東側に位置し、規模は径35～42cm、深さ33cmを測る。埋土上位で須恵器杯身（40）が出土した。出土遺物から古代の遺構と考えられる。

SP1016（第12図 図版7） 南側に位置し、規模は径24～25cm、深さ28cmを測る。埋土下位で土師器碗（42）、土鍤（41）、須恵器片が出土した。出土遺物から古代末の遺構と考えられる。

SP1017（第12図 図版7） 北側に位置し、規模は径28～37cm、深さ30cmを測る。埋土上位で土師器甕の土器片が出土した。出土遺物から古代の遺構と考えられる。

SP1018（第12図 図版8） 北側に位置し、規模は径55～56cm、深さ13cmを測る。埋土上位で須恵器杯蓋（43）、杯身（44・45）、土師器甕（46）が出土した。出土遺物から7世紀末～8世紀初頭の遺構と考えられる。

SP1026（SB101）（第13図 図版7） 東側に位置し、SB101を構成する柱穴の一つである。規模は径44～64cm、深さ27cmを測る。検出面に近い位置で六連式製塙土器（5・6）、須恵器杯身（4）が出土した。出土遺物から古代の遺構と考えられる。

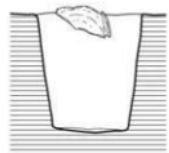
SP1027（SB101）（第13図） 東側に位置し、SB101を構成する柱穴の一つである。規模は径38～39cm、深さ47cmを測る。埋土下位で六連式製塙土器、須恵器甕、杯蓋などの土器片が出土した。出土遺物から古代の遺構と考えられる。

SP2001（SB201）（第13図 図版8） 中央付近に位置し、SB201を構成する柱穴の一つである。規模は径22cm、深さ23cmを測る。埋土最下位で青磁皿（15）が出土した。出土遺物から14世紀の遺構と考えられる。

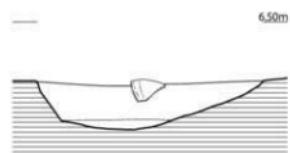
SP2002（SB201）（第13図 図版8） 中央付近に位置し、SB201を構成する柱穴の一つである。規模は径18～21cm、深さ38cmを測る。埋土最下位で土師器皿（12）が出土した。出土遺物から14世紀の遺構と考えられる。

SP2005（SB201）（第13図 図版8） 中央付近に位置し、SB201を構成する柱穴の一つである。規模は径24～26cm、深さ21cmを測る。埋土中位で土師器碗（13）、杯（14）が出土した。出土遺物から14世紀の遺構と考えられる。

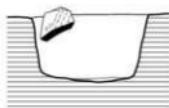
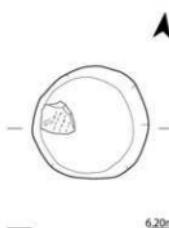
SP1001 (SB104)



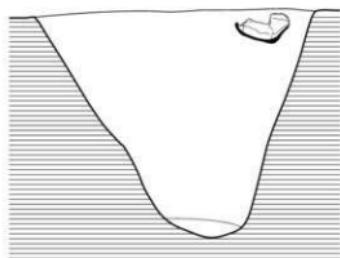
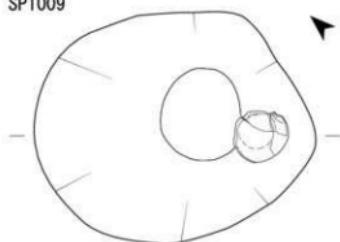
SP1007



SP1008



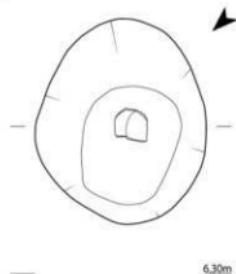
SP1009



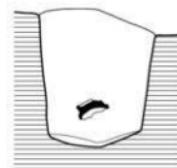
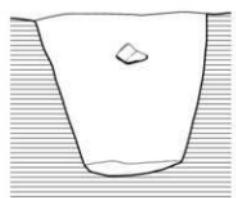
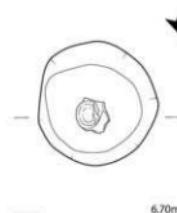
0 (1/10) 50cm

第 11 図 SP1001 (SB104) • 1007 • 1008 • 1009 実測図

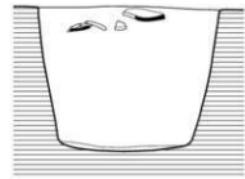
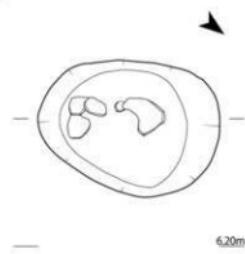
SP1011



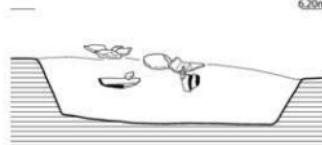
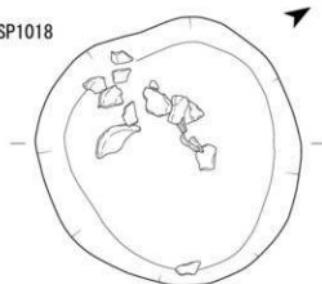
SP1016



SP1017



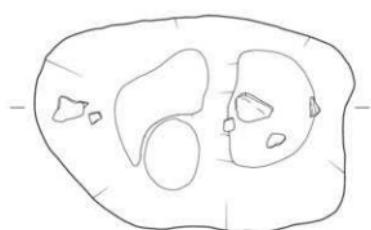
SP1018



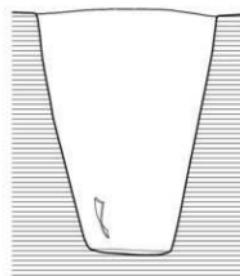
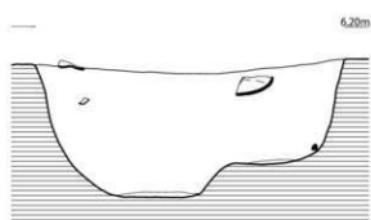
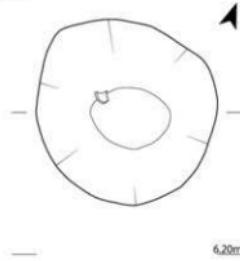
0 (1/10) 50cm

第12図 SP1011・1016・1017・1018 実測図

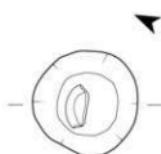
SP1026 (SB101)



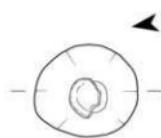
SP1027 (SB101)



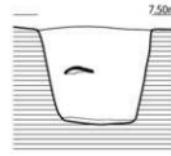
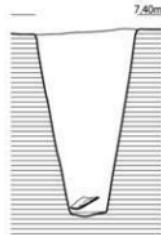
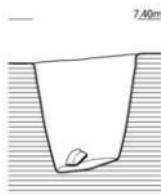
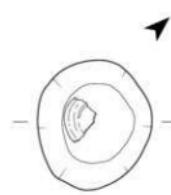
SP2001 (SB201)



SP2002 (SB201)



SP2005 (SB201)



0 (1/10) 50cm

第13図 SP1026・1027(SB101)、2001・2002・2005(SB201) 実測図

第1表 西尾崎2・3地区掘立柱建物一覧表

※：南東隅の柱穴から測れなかった場合

遺構番号	規模(間)	棟方向	柵行 建物の南東隅から (m)	梁行 建物の南東隅から (m)	床面積 (m ²)	間連柱穴	出土遺物	時代	備考
SB101	3×2	N10°W	5.15 (1.70+1.90+1.55)	4.20 (2.15+2.05)	21.63	SP1004, SP1026, SP1027, SP1038	土師器、製塙土器、 須恵器	8C中頃～ 後半	構成柱穴10個のうち7個 から遺物が出土する。
SB102	3×2	N12°W	6.51 (2.10+2.31+2.10)	3.85 (1.96+1.89)	25.06	-	-	不明	SB103とは方向性は一致 する。
SB103	3×2	N77°E	※7.98 (2.95+2.45+2.58)	5.20 (2.55+2.65)	41.50	SP1005	須恵器	8C中頃～ 後半	南西隅角柱、擾乱により検 出不能。
SB104	2×1	N80°E	5.00(2.45+2.55)	3.25	16.25	SP1001, SP1019	須恵器、土師器	8C中頃～ 後半	SB101と方向性は一致する。
SB201	4×2	N1°W	6.82 (1.70+1.73+1.74+ 1.65)	4.95 (2.61+2.34)	33.76	SP2001, SP2002, SP2005	青磁、土師器	14C	籠柱建物。棟方向ほぼ真北。
SB202	2×1	N10°E	3.35(1.55+1.80)	2.7	9.18	-	-	不明	SB203と棟方向ほぼ一致 する。
SB203	2×2	N81°W	4.40(1.88+2.52)	※4.15 (2.08+2.07)	18.26	-	土師器	中世	北側に長さ80cmの縦付き。

第2表 西尾崎2・3地区土坑一覧表

遺構番号	平面形	主軸方位	規模(cm)			出土遺物	時代	備考
			長さ	幅	深さ			
SK101	長方形	N77°E	66	50	12	-	-	-
SK102	長方形	N85°E	164	154	19	土師器、須恵器、 製塙土器	8C末～ 9C初頭	床面西隅に柱穴あり。
SK103	椭円形	N43°E	89	74	36	土師器、須恵器	古代	
SK104	椭円形	N11°E	86	84	27	土師器、須恵器	古代	
SK105	長方形	N80°E	221	最大108	13	土師器、須恵器	古代	
SK106	椭円形	N53°W	111	76	15	土師器	古代～中世	
SK107	椭円形	N24°W	89	71	31	土師器、須恵器	古代	
SK108	椭円形	N55°E	85	70	13	土師器、須恵器	中世	
SK109	長方形	N67°W	60	38	23	土師器、須恵器、 瓦質土器	中世	
SK201	椭円形	N27°E	175	123	7	-	-	-
SK202	不整形	-	153	34	13	-	-	-
SK203	椭円形	N69°E	141	84	21	-	-	-
SK204	椭円形	N65°E	89	76	21	-	-	-
SK205	椭円形	N52°E	81	60	45	-	-	-
SK206	円形	-	101	99	27	須恵器、土師器、 鉄製品	中世	
SK207	不整形	-	66	35	22	-	-	-
SK208	不整形	-	112	49	9	-	-	-
SK209	長方形	N59°W	73	50	28	-	-	炭、焼土出土。

第3表 西尾崎2・3地区溝一覧表

遺構番号	長さ(m)	幅(cm)	標高差(cm)	出土遺物	時代	備考
SD101	4.43	18~30	10	土師器	古代～中世	断面U字形。両端調査区内で収束。 SD102を切る。
SD102	0.95	13~18	4	須恵器	古代	断面U字形。SD101に隣接。両端調査区 内で収束。
SD103	3.10	20~27	8	-	不明	断面U字形。SD101と方向性一致。東端 挖堀により検出不能。
SD104	46.10	75~120	55	土師質土器、瓦質土器、 石製品、鉄製品、銅錢	中世後半～近 世初頭	断面U字形。調査区南端を東西に東流。 両端調査区外へ伸びる。
SD201	4.15	最大53	10	須恵器、青磁、土師器、 瓦質土器、鉄滓	古代～中世	断面形不明。調査区西端を南北に北流。 両端調査区外へ伸びる。

2 遺物

調査の結果、主に奈良時代から室町時代にかけての遺物が出土した。種類としては、土師器・須恵器・輸入磁器・土師質土器・瓦質土器・土製品・金属製品などがある。なお、各遺物の法量や調整、特徴については、遺物観察一覧表に掲載している。

(1) 挖立柱建物出土遺物（第14図 図版9）

1～6はSB101の構成柱穴出土の遺物である。1は須恵器杯蓋で、肩部と口縁部の間がくびれ、口縁端部は丸みをもつ。2～4は須恵器杯身で、腰部が横方向に小さく張り出す。5・6は六連式製塙土器で、5の内面に細かい布目压痕がみられ、6の内面に粗い布目压痕がみられる。7～9はSB103の構成柱穴出土の須恵器である。7は杯蓋で、肩部と口縁部の間が小さくくびれ、口縁端部は断面三角形を呈する。8は杯身で、高台がハの字形に踏ん張る。9は短頸壺で、口縁端部の内側に傾斜面をもつ。10・11はSB104の構成柱穴出土の須恵器杯蓋で、10は肩部と口縁部の間が浅くくびれ、口縁端部は断面三角形を呈する。11は肩部と口縁部の間にくびれがなく、端部はほぼ垂直に屈曲する。12～15はSB201の構成柱穴出土の遺物である。12は土師器皿で、底部と体部の境を強くなじ、体部は大きく大きく開く。13は土師器碗で、高台は小さく低い。14は土師器杯で、腰部は大きく張り出す。15は同安窯系の青磁皿で、ヘラ描きの略化花文と櫛描き点描文をもつ。

(2) 土坑出土遺物（第14図 図版10）

16～19はSK102出土の遺物である。16は須恵器杯蓋で、肩部と口縁部の間に浅く小さなくびれをもち、口縁端部はほぼ垂直に屈曲する。17は須恵器杯身で、高台は断面台形を呈し、体部は高台から連続して立ち上がる。18は須恵器壺の底部である。19は土師器鉢で、器壁は厚く外面全体にハケ目の後ナデを施す。内面に炭化物が付着し、煎熬用の製塙土器の可能性がある。20はSK104出土の須恵器杯身で、焼成は極めて悪く土師質に近い。21～23はSK105出土の遺物である。21は須恵器杯身、22は須恵器広口壺の口縁部、23は土師器壺で、外面にハケ目の後ナデを施し、内面に赤黒色と灰白色の付着物がみられる。24はSK109出土の瓦質土器鍋で器壁は薄く、比較的長い口縁部をもつ。

(3) 炉出土遺物（第14図 図版11）

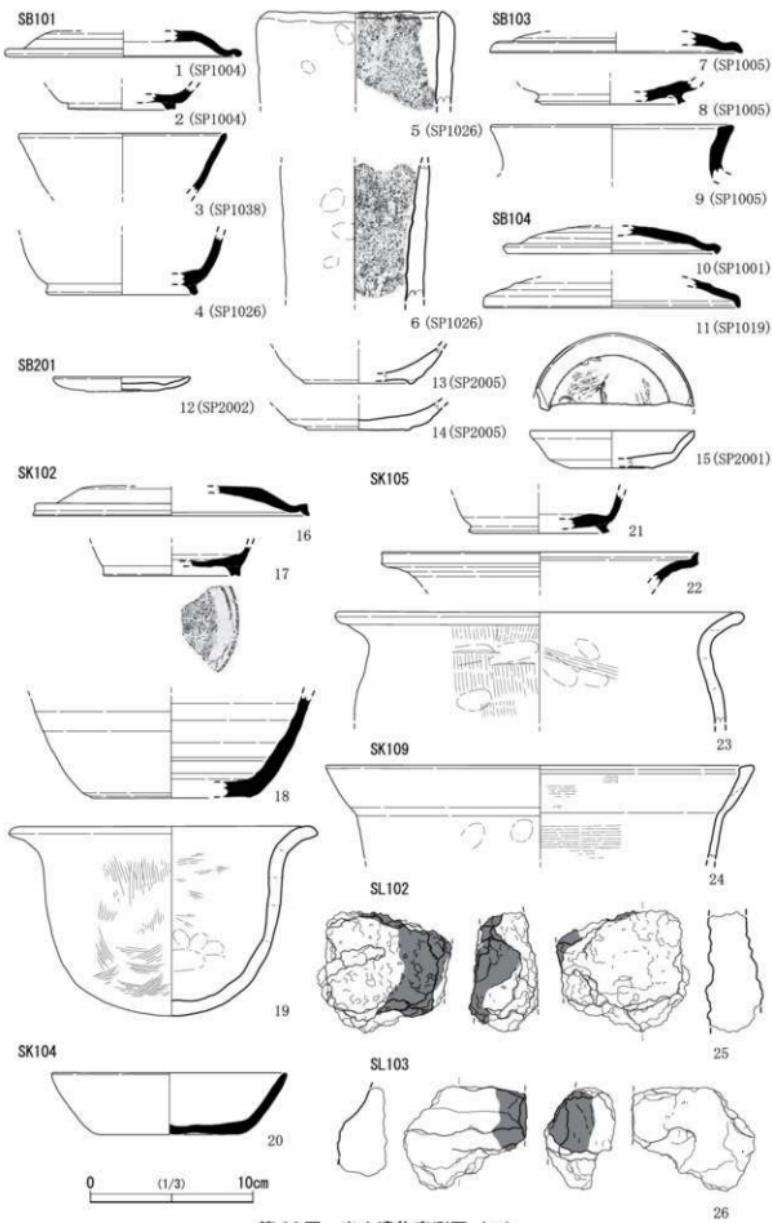
25はSL102出土の炉壁で、スサが焼け抜けた空洞がみられ、内面は固く焼け締まる。一部還元色を呈する。26はSL103出土の炉壁で、内面は固く焼け締まり、一部還元色を呈する。74（図版14）はSL103出土の楕円形鍛冶津である。分析結果から銅津の可能性が高い。

(4) 溝出土遺物（第15図 図版11）

27～31はSD104出土の遺物である。27は土師質土器鍋で、口縁は短く上端部をつまみ上げている。28は土師質土器足鍋の脚部である。29は上白で、石材は角閃石安山岩である。30は鉄釘で断面長方形を呈する。31は寛永通寶であるが鑄錢地は不明である。32～37はSD201出土の遺物である。32は土師器皿で、体部が直線的に立ち上がる。33は土師器碗または杯の体部で、外側をヘラでなでている。34は土師器碗で、高台は低く丸みをもつ。35は土師器杯で、内外面に丁寧なナデを施す。36は瓦質土器鍋で口縁は短く、体部内面にハケ目を施す。37は瓦質土器羽釜で、口縁端部は断面方形を呈する。

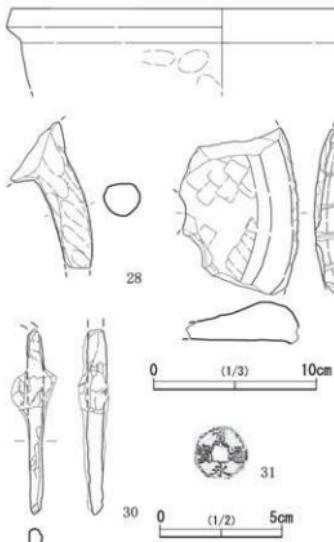
(5) 柱穴出土遺物（第16図 図版12・13・14）

38は須恵器杯蓋で、肩部と口縁部の間がくびれ、口縁端部は断面方形を呈する。39は須恵器杯身で、

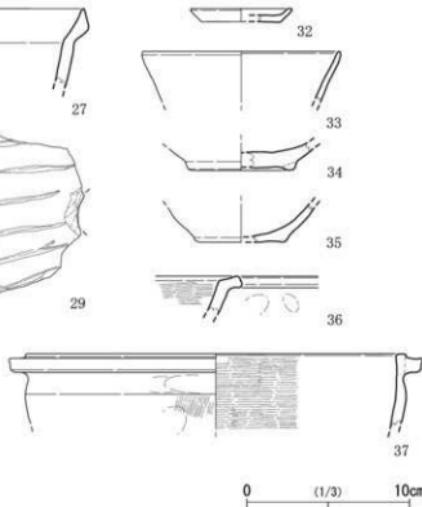


第14図 出土遺物実測図(1)

SD104



SD201

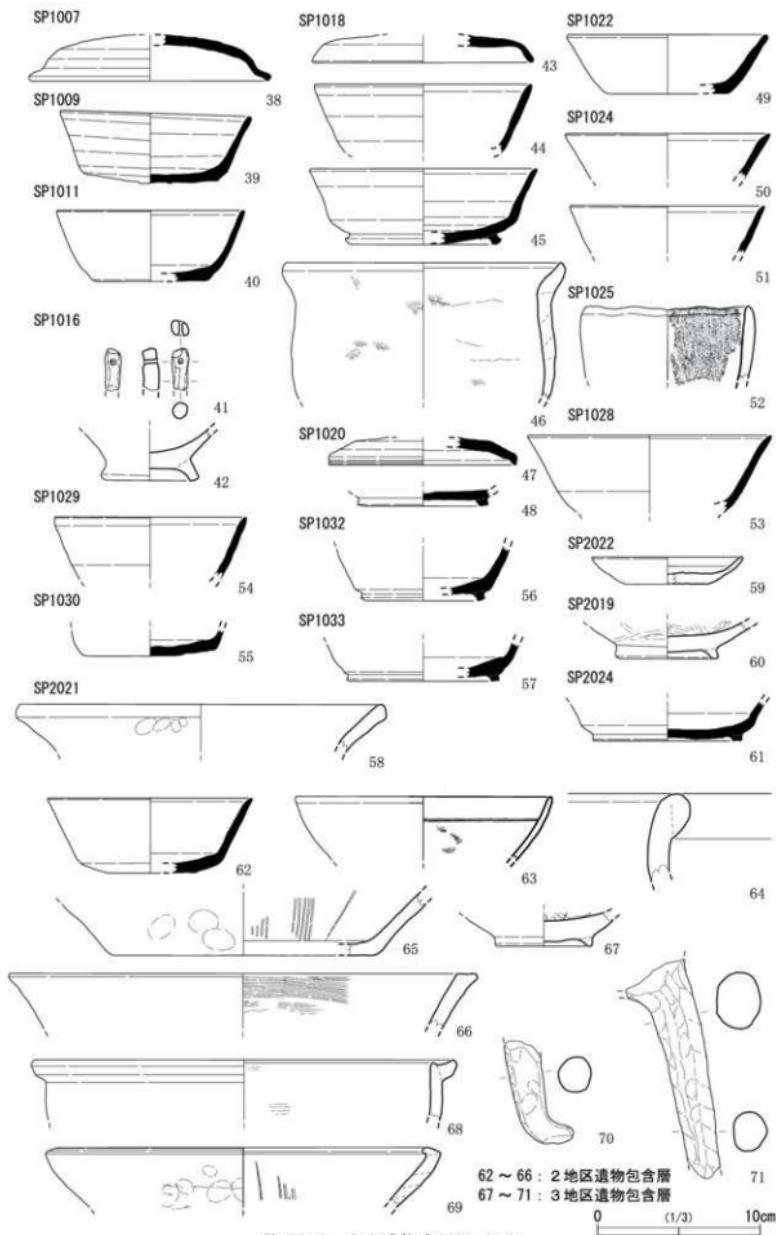


第15図 出土遺物実測図（2）

体部が外反して立ち上がり、口縁端部は丸みをもつ。40は須恵器杯身で、体部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁端部は尖りぎみである。41は棒状土錘である。42は土師器椀で、高台は断面長方形を呈し、やや内湾して踏ん張る。43は須恵器杯蓋で天井部は平坦で、口縁部は外方へ開く。皿の可能性もある。44・45は須恵器杯身で、45は腰部が張り出し、高台はハの字形に踏ん張る。46は土師器甕で口縁端部をつまみ上げている。内面に付着物がみられ、煎熬用の製塙土器の可能性もある。47・48は須恵器杯蓋と杯身である。49は須恵器杯身で、体部は外方に直線的に伸び、端部は丸みをもつ。50・51は須恵器杯身である。50は焼成が極めて悪く土師質に近い。52は六連式製塙土器で、内面に粗い布目圧痕がみられる。53～57は須恵器杯身である。58は土師質土器甕の口縁で、内外面に赤色顔料を塗付する。59は土師器皿で、体部はやや内湾しながら伸びる。60は土師器椀で、内外面にヘラミガキを施す。61は須恵器杯身である。72・73（図版14）は鍛錬鍛冶滓である。

(6) 遺物包含層出土遺物（第16図 図版14）

62は須恵器杯身で、体部が直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖りぎみである。63は同安窯系の青磁椀で、体部内面に点描文をもつ。64は備前焼系の甕で、口縁部の折り曲げ幅は広く、玉縁は断面円形を呈する。65は瓦質土器擂鉢で、5条1単位の描目をもつ。66は瓦質土器鍋で、口縁端部に水平な平坦面をもつ。67は土師器碗で、内面にヘラミガキを施している。68は土師質土器羽釜で、外面に赤色顔料を塗付している。69は土師質土器擂鉢で、口縁端部を内側に折り込んでいる。70は土師質土器、71は瓦質土器足鍋の脚部である。70は脚先端を外方へ大きく折り曲げている。



第16図 出土遺物実測図（3）

第4表 西尾崎2・3地区出土遺物觀察一覧表

種類	出土場所	種別	器形	法量(cm)			主な調整(内・外)	備考	
				目径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)			
14 9 1	SB101 (SP1004)	須恵器	杯蓋	(14.6)	16残	-	密	硬質 灰白色	回転ナデ 回転ナデヘラナデ
14 9 2	SB101 (SP1004)	須恵器	杯身	-	13残	(6.6)	密	硬質 灰白色	回転ナデ 回転ナデ
14 9 3	SB101 (SP1038)	須恵器	杯身	(12.8)	37残	-	密	硬質 灰白色	回転ナデ 回転ナデ
14 9 4	SB101 (SP1026)	須恵器	杯身	-	37残	(9.4)	密	軟質 灰白色	回転ナデ 回転ナデ
14 9 5	SB101 (SP1026)	土師器	輪埴土器	(12.8)	56残	-	やや粗	軟質 褐色	ナデ 指サエ接ナデ
14 9 6	SB101 (SP1026)	土師器	輪埴土器	-	85残	-	やや粗	軟質 褐色	ナデ 指サエ接ナデ
14 9 7	SB103 (SP1005)	須恵器	杯蓋	(15.6)	13残	-	やや粗	硬質 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ハラ切り後ナデ
14 9 8	SB103 (SP1005)	須恵器	杯身	-	15残	(9.2)	密	硬質 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ハラ切り後ナデ
14 9 9	SB103 (SP1005)	須恵器	短腹盃	(15.0)	33残	-	密	硬質 褐灰色	回転ナデ 回転ナデ
14 9 10	SB104 (SP1001)	須恵器	杯蓋	(13.0)	17残	-	密	やや軟質 青灰色	回転ナデ 回転ナデ、ハラ切り後ナデ
14 9 11	SB104 (SP1019)	須恵器	杯蓋	(15.7)	18残	-	密	硬質 青灰色	回転ナデ 回転ナデ
14 9 12	SB201 (SP2002)	土師器	皿	8.4	0.9	4.4	やや粗	硬質 にぶい褐色	回転ナデ 底部:回転糸切り
14 9 13	SB201 (SP2005)	土師器	碗	-	21残	(6.6)	密	硬質 にぶい褐色	明治灰陶 底部:回転糸切り後ナデ
14 9 14	SB205 (SP2005)	土師器	杯	-	16残	(6.4)	密	硬質 浅黄褐色	明治灰陶 底部:回転糸切り
14 9 15	SK201 (SP2001)	青磁	皿	(10.1)	23残	(5.0)	密	硬質 灰オーバー色	オフナデ後ヘラ描き文 回転ナデ後ヘラケズリ
14 10 16	SK102	須恵器	杯蓋	(17.0)	18残	-	密	硬質 白灰色	回転ナデ 陶窯灰
14 10 17	SK102	須恵器	杯身	-	18残	(8.4)	密	硬質 白灰色	回転ナデ 高台内にヘラ記号
14 10 18	SK102	須恵器	皿	-	6.5残	(9.8)	密	硬質 褐色	回転ナデ 底部:ヘラ切り
14 10 19	SK102	土師器	鉢	(19.0)	117残	-	密	硬質 明赤褐色	オフナデ 明赤褐色
14 10 20	SK104	須恵器	杯身	(14.5)	38	(9.2)	やや粗	軟質 浅黄色	オフナデ 底部:ヘラ切り後静止ナデ
14 10 21	SK105	須恵器	杯身	-	25残	(8.6)	密	硬質 浅黄色	オフナデ 底部:ヘラ切り後静止ナデ
14 10 22	SK105	須恵器	広口皿	(19.5)	2.1残	-	密	硬質 灰白色	回転ナデ ヘラナデ
14 10 23	SK105	土師器	皿	(25.2)	6.5残	-	粗	硬質 灰白色	オフナデ 底部:ヘラナデ
14 10 24	SK109	瓦質土器	鍋	(26.4)	5.7残	-	密	硬質 灰白色	オフナデ にぶい褐色
14 11 25	SL102	土製品	如磐	横幅8.3cm	1.8残	厚3.7mm	やや粗	やや軟質 にぶい褐色	政治印摩
14 11 26	SL103	土製品	如磐	横幅7.6cm	5.3残	厚4.3mm	密	やや軟質 にぶい褐色	政治印摩
15 11 27	SD104	土加賀土器	滿	(26.0)	49残	-	密	硬質 にぶい褐色	日本家様ナデ 指サエ、ハケ日後ナデ
15 11 28	SD104	土加賀土器	足開脚	-	9.0残	-	密	硬質 にぶい褐色	指サエ後ナデ 指サエ後ナデ
15 11 29	SD104	石製品	臼	-	28残	孔径(3.6) 重900	やや粗	硬質 にぶい褐色	角閃石安山岩
15 11 30	SD104	鉄製品	釘	0.3~0.9	7.6残	厚0.5~1.0 重72	密	硬質 にぶい褐色	日本家様ナデ 指サエ、ハケ日後ナデ
15 11 31	SD104	銅貨	寛永通寶	2.25	0.1	孔径0.6 重15	密	硬質 にぶい褐色	日本家様ナデ 指サエ後ナデ
15 11 32	SD201	土師器	皿	(6.2)	0.8	(4.8)	やや粗	硬質 にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ底部:回転糸切り後ナデ
15 11 33	SD201	土師器	椀	または 杯	(12.0)	31残	密	硬質 灰白色	回転ナデ 回転ヘラナデ
15 11 34	SD201	土師器	碗	-	17残	(6.6)	やや軟質 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
15 11 35	SD201	土師器	杯	-	23残	(5.6)	密	硬質 浅黄褐色	回転ナデ後上塗ナデ 底部:回転糸切り後ナデ
15 11 36	SD201	瓦質土器	滿	-	28残	-	やや粗	硬質 暗黄褐色	ハケ日後ナデ 指サエ後ナデ
15 11 37	SD201	瓦質土器	羽茎	(23.1)	46残	-	密	やや軟質 暗青褐色	指サエ後ナデ 暗青褐色
16 12 38	SP1007	須恵器	杯蓋	(14.6)	28残	-	密	硬質 青灰褐色	回転ナデ 昇部:回転ナデ後静止ナデ
16 12 39	SP1009	須恵器	杯身	11.8	4.3	8.3	密	硬質 明青灰褐色	回転ナデ 昇部:ハラ切り後静止ナデ
16 12 40	SP1011	須恵器	杯身	(13.6)	4.6	9.0	やや粗	軟質 にぶい黄褐色 にぶい褐色	回転ナデ 見込み:回転ナデ後静止ナデ 底部:ヘラ切り後静止ナデ

辨 認 版	No.	出土 場所	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調(内) 外)	主な調査(内) 外)	備 考	
					日浮 (復元値)	器高 (復元値)	底径 (復元値)						
16	12	41	SP1016	土製品	粘土器	直径 1.0	26残	丸径 0.2~0.4	密	やや軟質	にぶい褐色 にぶい褐色	表:端部丸く落とし ナデ 底:孔部ケズリ ナツ	
16	12	42	SP1016	土師器	碗	-	32残	6.0	やや粗	硬質	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナツ 回転ナツ 底部回転ナツ後静止ナツ	
16	12	43	SP1018	須恵器	杯蓋	(13.6)	17残	-	やや粗	硬質	灰褐色 灰褐色	回転ナツ 回転ナツ 天井部:ヘラ切り後回転ナツ	
16	12	44	SP1018	須恵器	杯身	(13.2)	42残	-	密	秋青	灰白色 灰白色	回転ナツ 回転ナツ	
16	12	45	SP1018	須恵器	杯身	(14.0)	47残	(9.6)	密	硬質	灰白色 灰黄色	回転ナツ 見込み:回転ナツ後静止ナツ 回転ナツ 底部:ヘラ切り後静止ナツ	
16	12	46	SP1018	土師器	甌	(17.0)	84残	-	粗	硬質	黒褐色 赤褐色	ハケ目接合寧なナツ ハケ目接合寧なナツ	施釉用の製陶土器か
16	12	47	SP1020	須恵器	杯蓋	(11.6)	22残	-	密	硬質	灰褐色 灰褐色	回転ナツ 天井部:回転ナツ後静止ナツ 回転ナツ 天井部:ヘラ切り後静止ナツ	
16	12	48	SP1020	須恵器	杯身	-	10残	(8.0)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナツ 後静止ナツ ヘラ切り後静止ナツ	
16	13	49	SP1022	須恵器	杯身	(12.4)	37残	(7.3)	やや粗	やや軟質	灰白色 灰白色	回転ナツ 回転ナツ 底部:ヘラ切り後静止ナツか	
16	13	50	SP1024	須恵器	杯身	(12.6)	28残	-	密	秋青	灰白色 灰白色	回転ナツ 回転ナツ	
16	13	51	SP1024	須恵器	杯身	(12.0)	29残	-	密	硬質	灰褐色 灰褐色	回転ナツ 回転ナツ	
16	13	52	SP1025	土師器	陶器土器	(10.0)	45残	-	やや粗	秋青	明赤褐色 明赤褐色	ナツ ナツ	内面に布紋り目痕。粗い布 目痕、六連式
16	13	53	SP1028	須恵器	杯身	(15.0)	48残	-	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナツ 回転ナツ	SP1014出土須恵器片と接合
16	13	54	SP1029	須恵器	杯身	(11.8)	39残	-	密	硬質	灰白色 灰色	回転ナツ 回転ナツ	
16	13	55	SP1030	須恵器	杯身	-	17残	8.0	やや粗	やや軟質	灰白色 灰白色	回転ナツ 見込み:回転ナツ後静止ナツ 回転ナツ 底部:ヘラ切り後未調整	
16	13	56	SP1032	須恵器	杯身	-	34残	(7.6)	やや粗	硬質	明オーリーパーク灰褐色	回転ナツ 見込み:回転ナツ後静止ナツ 回転ナツ 底部:ヘラ切り後静止ナツ	
16	13	57	SP1033	須恵器	杯身	-	24残	(9.4)	密	硬質	青灰褐色 青灰褐色	回転ナツ 見込み:回転ナツ後静止ナツ 回転ナツ 底部:ヘラ切り後静止ナツ	
16	13	58	SP2021	土師器	甌	(22.4)	29残	-	やや粗	硬質	浅黃色、褐色 浅黃色、褐色	横ナツ 指オサエ後ナツ	外外面に赤色顔料唐衣
16	14	59	SP2022	土師器	皿	(9.2)	17残	(5.1)	密	やや軟質	浅黃褐色 浅黃褐色	回転ナツ 回転ナツ 底部:回転系切り後ナツ	
16	14	60	SP2019	土師器	碗	-	22残	6.3	密	硬質	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナツ 回転ナツ ヘラミガキ	
16	14	61	SP2024	須恵器	杯身	-	24残	(9.2)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナツ 回転ナツ 底部:ヘラ切り後静止ナツ	
16	14	62	遺物包含層	須恵器	杯身	(12.6)	46残	(8.6)	密	やや軟質	灰白色 灰白色	回転ナツ 見込み:回転ナツ後静止ナツ 回転ナツ 底部:ヘラ切り後静止ナツ	
16	14	63	遺物包含層	青磁	碗	(15.8)	39残	-	密	硬質	灰オーリーパーク 灰白色	回転ナツヘラケズリ 点描文 指オサエヘラケズリ	同安窯系
16	14	64	遺物包含層	陶器	甌	-	54残	-	密	硬質	黄褐色 黄褐色	横ナツ後ヘラナツ 横ナツ後ヘラナツ	備前燒
16	14	65	遺物包含層	瓦質土器	擂鉢	-	39残	(16.0)	密	やや軟質	橙色 黄褐色	横ナツ後目施文 指オサエ後模ナツ	擂臼5条1單位
16	14	66	遺物包含層	瓦質土器	鍋	(28.8)	34残	-	やや粗	硬質	黄褐色 黑褐色	横ナツ後ナツ	
16	14	67	遺物包含層	土師器	碗	-	21残	(5.5)	密	硬質	淡黄色 淡黄色	回転ナツ後ヘラナツ、ヘラミガキ 回転ナツ 底部:回転系切り後静止ナツ	
16	14	68	遺物包含層	土師質 土器	羽釜	(23.2)	37残	-	密	硬質	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナツ後模ナツ	外面に赤色顔料唐衣
16	14	69	遺物包含層	土師質 土器	擂鉢	(24.2)	37残	-	粗	やや軟質	橙色 黄褐色	横ナツ後目施文 指オサエ後ナツ	
16	14	70	遺物包含層	土師質 土器	足頭脚	-	63残	-	密	やや軟質	灰白色 灰白色	指オサエ後ナツ 指オサエ後ナツ	
16	14	71	遺物包含層	瓦質土器	足頭脚	-	135残	-	密	やや軟質	褐灰色 褐灰色	指オサエ後ナツ 指オサエ後ナツ	
14	72	SP1028		鐵滓	縦幅 52	横幅 6.8	厚 37	重 110.7					鍛錆鐵治津
14	73	SP2016		鐵滓	縦幅 59	横幅 5.9	厚 37	重 70.8					鍛錆鐵治津
14	74	SL103		鋼滓	縦幅 49	横幅 6.2	厚 38	重 87.0					

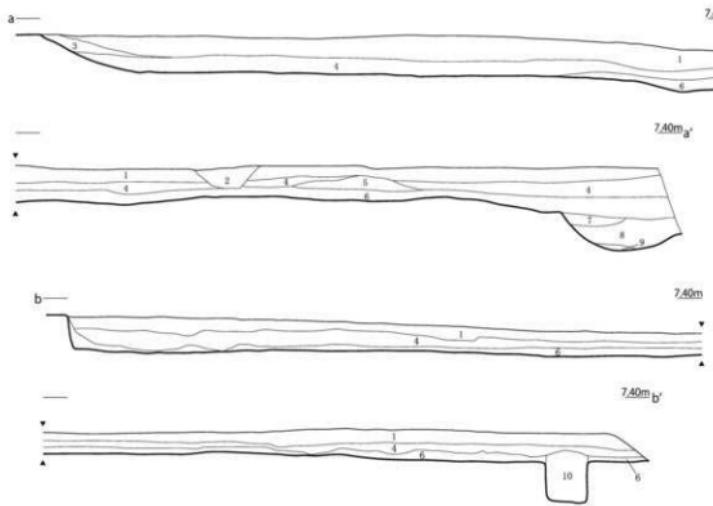
IV 向条谷地区調査の成果

1 遺構

向条谷地区は西尾崎地区の北西方向約100mの位置にあり、西から東に伸びる丘陵の先端部及び谷筋の辺縁部に立地する。標高は、西側で約7.3m、東側で約5.7mと、地形は西から東へ向かって緩やかに傾斜する。古代には海岸線が近くまで迫っていたと考えられる。調査区の東側では、一部で遺構の底から湧水が認められ、地山の土質が粘質からシルトや砂質に変化している場所も確認された。

調査区南側から中央付近にかけては、厚さ6～25cm程度の遺物包含層が2カ所確認され、古墳時代から中世の中頃までの遺物を多量に包含していた。包含層の土層は大きく2つに分けられた。また包含層の上から掘り込まれた遺構もあることから、一帯が当時湿地帯で徐々に遺物が堆積したのではなく、自然災害などにより大量の遺物が短期間に堆積した可能性がある。調査区内で近世の遺物が発見されておらず、中世後半に耕作地として利用され始め、現在に至ったと考えられる。

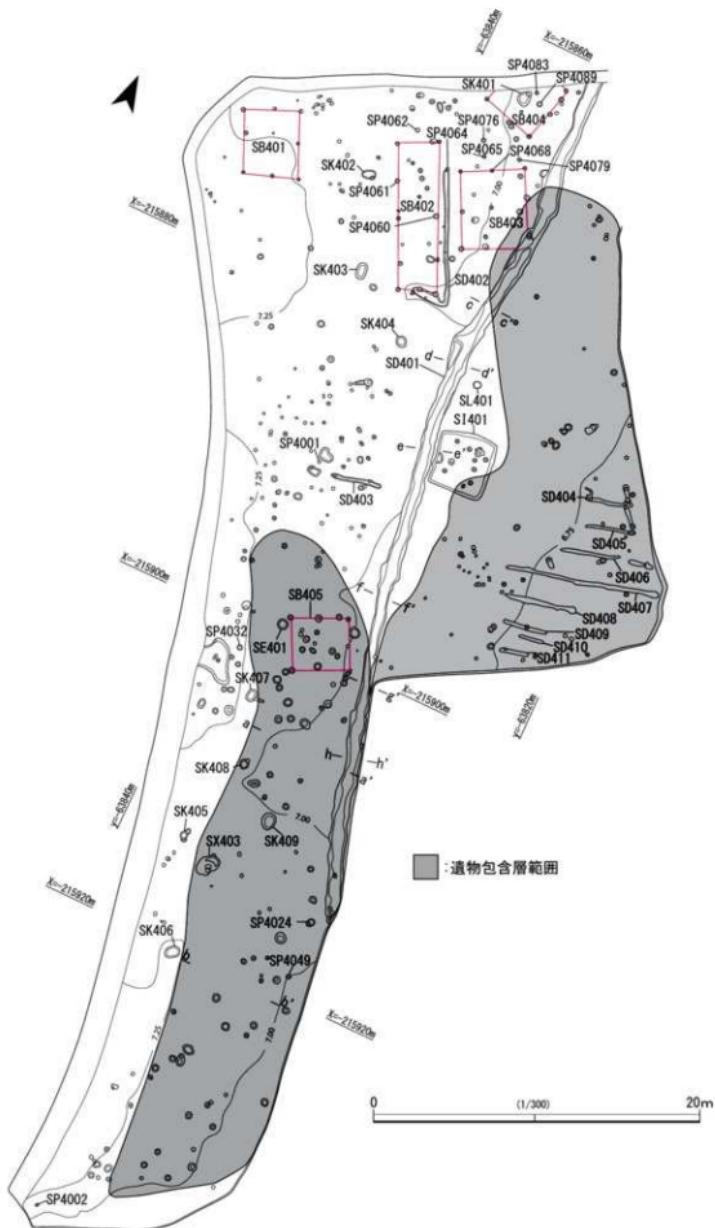
今回の調査では、柱穴を約620個検出し、掘立柱建物を10棟復元した。その他にも堅穴建物1棟、土坑19基、炉2基、井戸1基、溝20条、性格不明遺構3基を検出した。遺物包含層から多量の須恵器

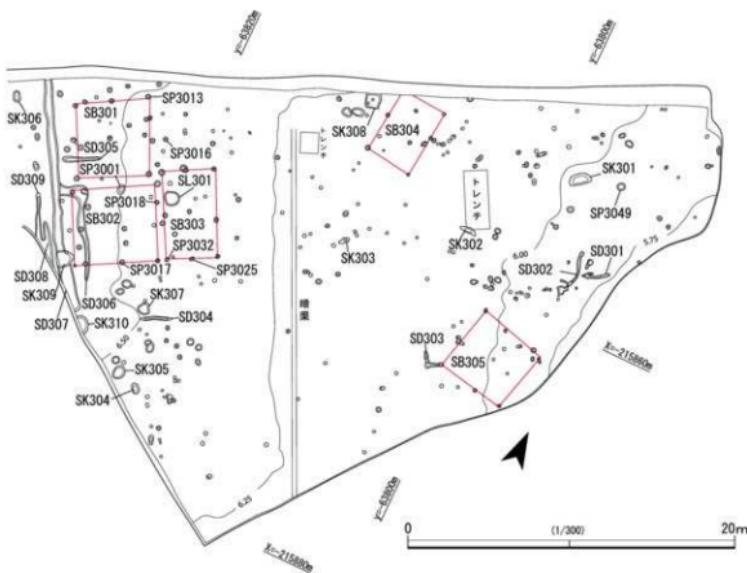


土層凡例

- 1 深黄褐色粘質土(10YR6/2) 土器を多量に、炭を少量含む
- 2 浅黄褐色粘質土(10YR6/1)に明黄褐色砂質土(10Y7/0)が混じる
- 3 黒灰色粘質土(7.5YR6/1) 炭を少額含む
- 4 にごい黄褐色粘質土(10Y8A/3)に黒色マングン鏡(7.5Y8A/6)が多量に混じり、土器をやや多く含む
- 5 にごい褐色粘質土(7.5Y8A/4)
- 6 明褐色粘質土(7.5Y8E/6)
- 7 褐色強粘質土(7.5Y8A/6)
- 8 黑褐色粘質土(7.5Y8D/1) 土器を多く含む
- 9 暗灰色粘質土(7.5Y8A/1)
- 10 黑灰色粘質土(7.5Y8A/1) 炭を少量含む

第17図 遺物包含層土層断面実測図





第18図 向条谷地区遺構配置図

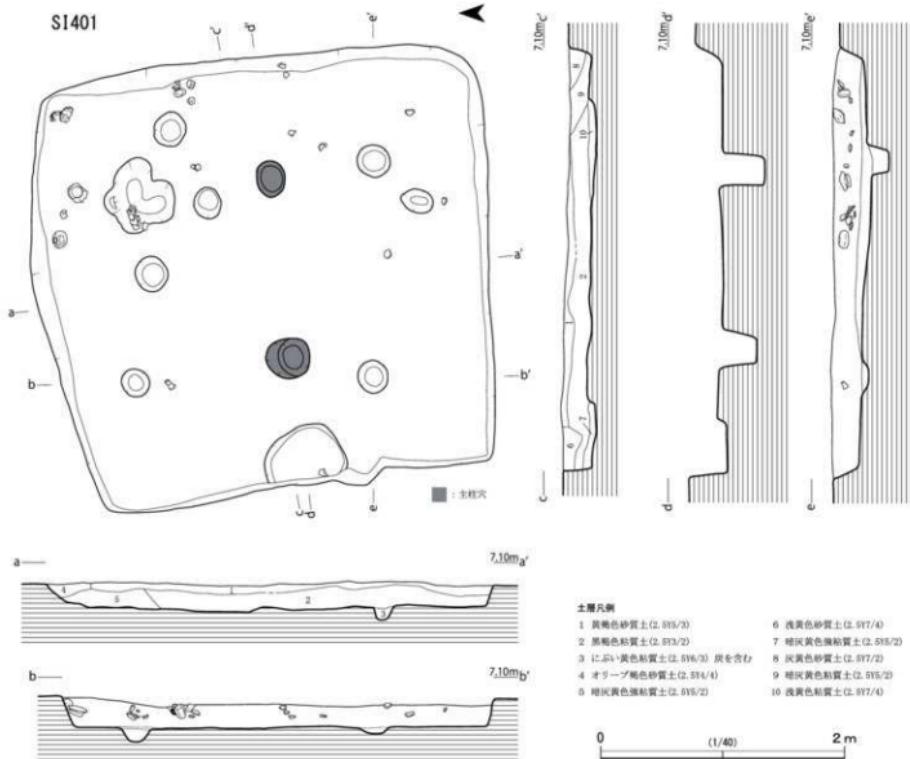
や瓦質土器が出土したのとは対照的に、遺物が出土した柱穴は144個にとどまった。これは、集落の中心が本調査区より西側の丘陵上に展開していたことを意味している。遺構の時期は古墳時代前半から中世末までである。その間、集落が断続的に営まれ続けたことが出土遺物からうかがえる。

(1) 壺穴建物

SI401（第19図 図版16） 調査区中央付近に位置するやや小規模な方形の壺穴建物である。東西に3.5m、南北に3.6m、床面積12.6m²を測る。主柱穴は2本で、床面からの深さは31・36cmである。残存壁高は東側が22cmで、部分的に貼り床の痕跡も認められた。出土遺物は、土器壺（1）、高杯（2）、甕（3・4）、磨石（5・6）などで、住居内の北東側に集中して出土した。埋土の一部に炭や焼土を含むことが確認されたが、カマドは検出されなかった。出土遺物から、5世紀前半の建物と考えられる。同様の時期・構造をもった建物が、昨年度の調査『下津令遺跡1』（2014）でも報告されている。放射性炭素年代測定で、5世紀前半から6世紀前半の遺構である可能性が指摘されている。

(2) 掘立柱建物

今回の調査で復元できた10棟のうち9棟は調査区の北側に集中しており、ある時期居住空間として利用されていたことがうかがえる。この10棟のうち、床面積が15m²未満のものが4棟、20m²を超えるものが3棟であった。ただし全てが、22m²以下であり比較的小規模な建物である。棟方向は4棟が一致し、1棟は直交する。2°以内のものも含めると6棟については同一の方向性といえる。



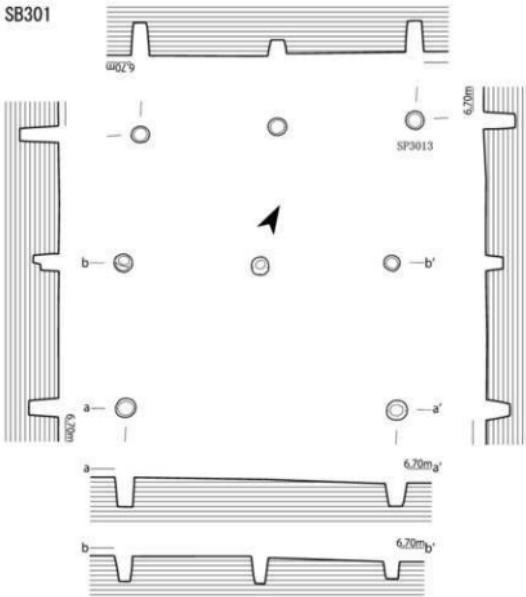
第19図 SI401 実測図

SB301（第20図） 調査区北側に位置する建物で、桁行2間（4.78m）×梁行2間（4.51m）、床面積21.56m²を測る。棟方向は、N26°Wである。SP3013からは木製品（7）が出土した。他の構成柱穴からも土師器椀や杯が出土している。出土遺物から中世前半の建物と考えられる。

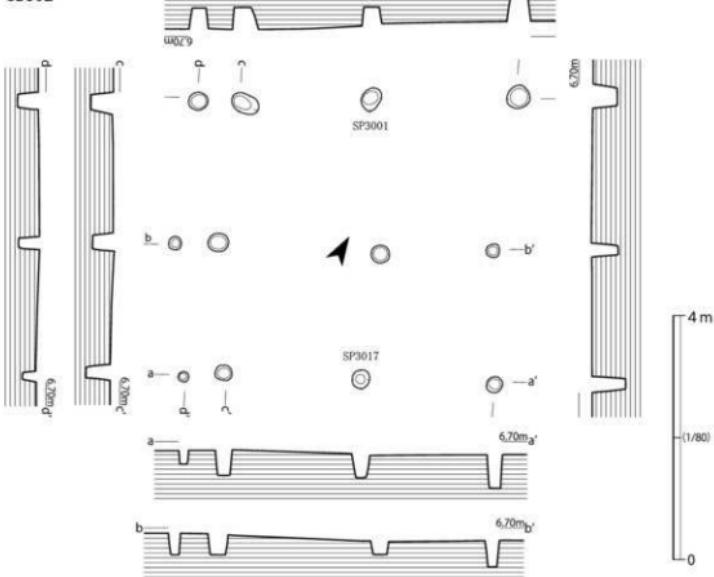
SB302（第20図 図版17） 調査区北側でSB301の南側に近接するように位置する建物で、桁行2間（4.70m）×梁行2間（4.47m）、床面積21.01m²を測る。棟方向はN26°Wで、SB301と棟方向が一致する。棟の西側には長さ70cmの廻が付いている。SP3001からは土師器椀（8）が、SP3017からは土師器椀（9）が出土した。他の構成柱穴からは、土師器皿や瓦質土器、青磁も出土している。出土遺物から古代末の建物と考えられる。

SB303（第21図 図版17） 調査区北側でSB302の東側に近接する建物で、桁行2間（5.39m）×梁行2間（3.16m）、床面積17.03m²を測る。棟方向はN26°Wで、SB301・302と棟方向が一致する。SP3032からは土師器椀（10・11）が、SP3025からは土師器椀または杯の口縁部（12）と土師質土器鍋（13）

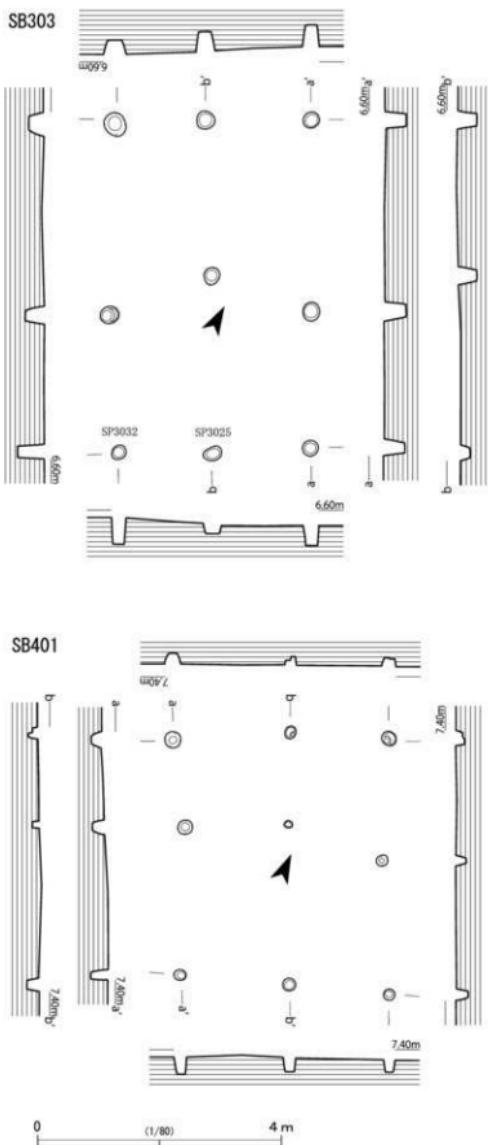
SB301



SB302



第20図 SB301・302実測図



第21図 SB303・401実測図

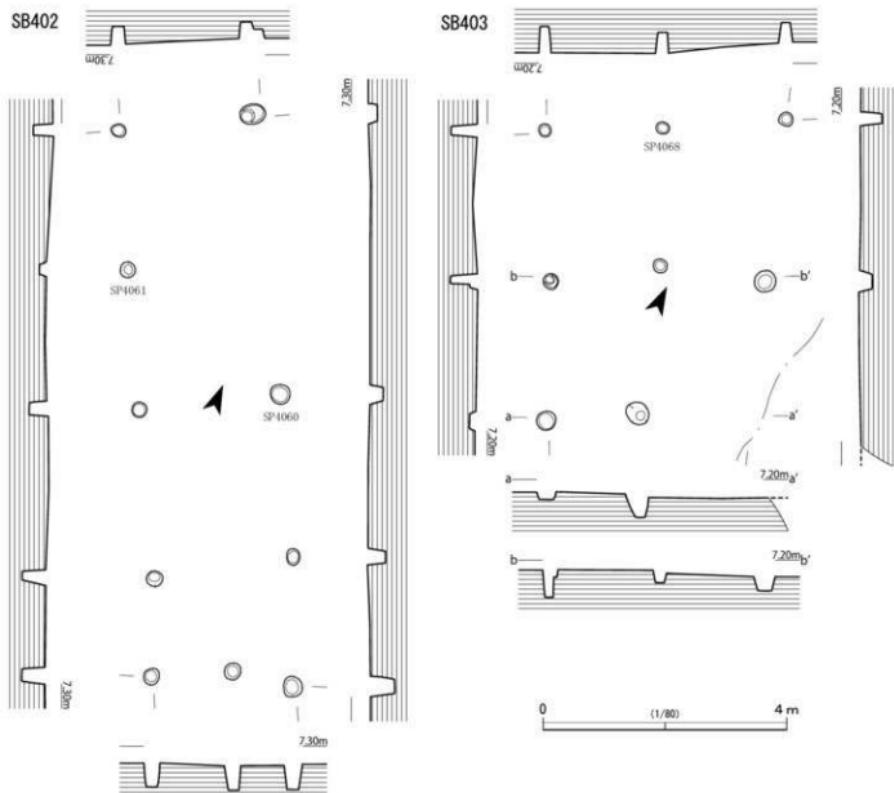
が出土した。出土遺物から古代末の建物と考えられる。

SB401 (第21図 図版18) 調査区の北西端に位置する建物で、桁行2間(4.15m)×梁行2間(3.45m)、床面積14.32m²を測る。棟方向はN22°Wで、柱穴からは土師器が出土した。中世の建物と考えられる。

SB402 (第22図 図版18) 調査区の北西部に位置する建物で、桁行4間(9.43m)×梁行1間(2.31m)、床面積21.78m²を測る。棟方向はN26°Wであり、建物の70cm東側に同一の方向性をもつ溝も検出されたが、関係は不明である。SP4060・SP4061からはともに土師器皿(14・15)が出土し、他の柱穴からも土師器碗や杯が出土している。出土遺物から中世の建物と考えられる。

SB403 (第22図 図版18) 調査区の北側でSB402の東側に近接するよう位置する建物で、桁行2間(4.79m)×梁行2間(3.98m)、床面積19.06m²を測る。棟方向はN24°Wで、SB402とはほぼ同じである。SP4068からは土師器碗が出土している。他の柱穴からは土師器甕や皿も出土している。南東隅の角柱は削平のため検出不能であったが、中世前半の建物と考えられる。

SB404 (第23図) 調査区の北部に位置する建物で、桁行2間(4.10m)×梁行2間(3.49m)、



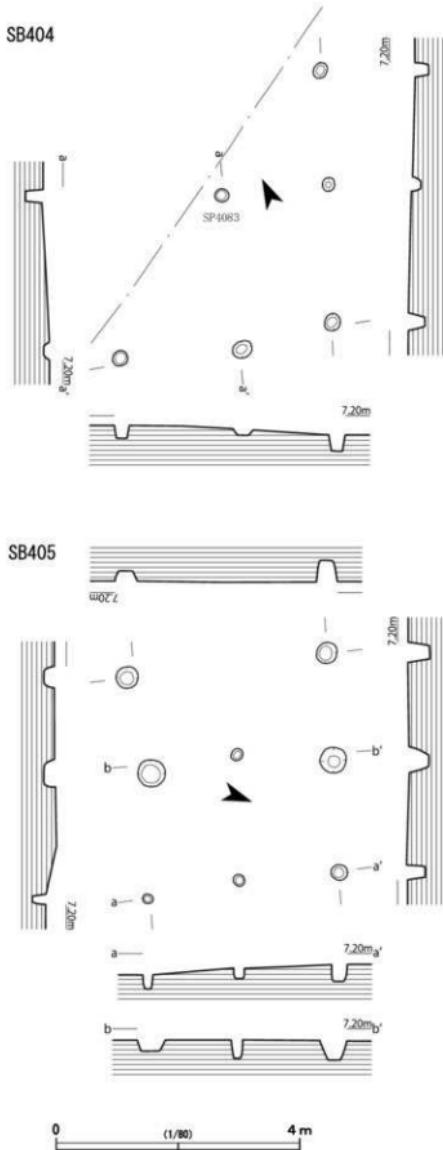
第22図 SB402・403実測図

床面積14.31m²を測る。棟方向はN22°Eで、一部調査区外に伸びる。SP4083から土師器杯(19)、他の柱穴からも土師器杯や椀が出土している。出土遺物から古代末から中世前半の建物と考えられる。SB405(第23図 図版18) 調査区の中央よりやや西側に位置する建物で、桁行2間(3.60m)×梁行2間(3.14m)、床面積11.30m²を測る。棟方向はN64°Eで、SB402と方向性は一致している。構成柱穴からは瓦質土器鍋の土器片が出土しており、中世の建物と考えられる。

(3) 土坑

本調査区から19基の土坑を検出した。長さで1.5mを超えるものは検出されず、1m未満が11基と全体的に小規模といえる。また、深さも30cm未満のものが16基と大半を占め、強く削平を受けていることがうかがえる。遺物の出土した土坑は7基と半数に満たなかった。

SK308(第24図 図版19) 調査区東側北端に位置する土坑で、遺構は一部調査区外へと伸びる。残存状況から、平面形は長方形を呈するものと考えられる。規模は長さ残96cm、幅89cm、深さ14cm



第23図 SB404・405 実測図

を測る。埋土中から焼土や炭が多量に出土した。中央付近の床面は被熱による赤変が確認されたが、焼けしまりは認められなかった。用途については不明である。埋土中から土師器杯の土器片が出土している。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

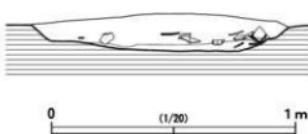
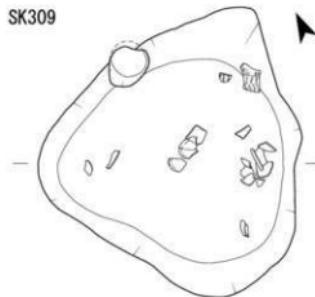
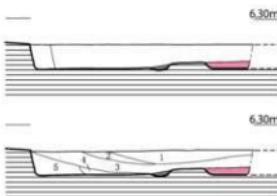
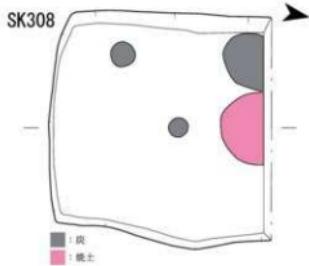
SK309（第24図 図版19）調査区中央に位置する土坑で、平面形は不整形である。規模は長さ110cm、幅102cm、深さ14cmを測り、SD307を切る。埋土中から瓦質土器捏鉢（25・26）、土師器皿（21）、楕（22・23）、杯（24）、土師質土器羽釜（27）が出土している。出土遺物から13世紀後半の遺構と考えられる。

（4）炉

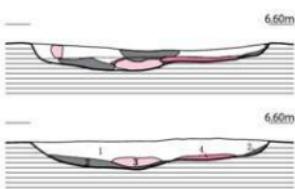
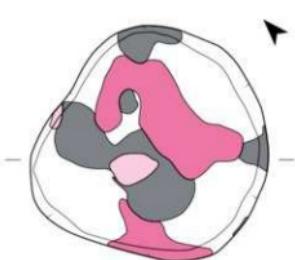
炉と考えられる遺構は2基で、どちらも調査区中央付近に位置する。出土遺物はない。

SL301（第24図 図版19）平面形は円形で、規模は直径96cm、深さ10cmを測る。炉内は固くしまり、被熱のための赤変や炭が広範囲に認められた。出土遺物はなく構造や規模、検出状況から木炭焼成坑と考えられる。放射性炭素年代測定で、7世紀後半から8世紀後半の可能性が指摘されている。

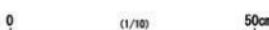
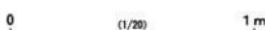
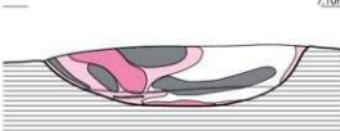
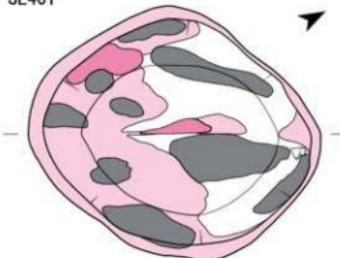
SL401（第24図 図版19）平面は楕円形で、規模は長径59cm、短径50cm、深さ13cmを測る。断面は緩やかな擂鉢状を呈する。炉内は全体が被熱により赤変し、一部に焼けしまりも認められた。遺物は出土せず、埋土には多量に炭を含んだ層が確認された。構造や規模、検出状況から木炭焼成坑と考えられる。放射性炭素年代測定で、8世紀後半から10世紀



SL301



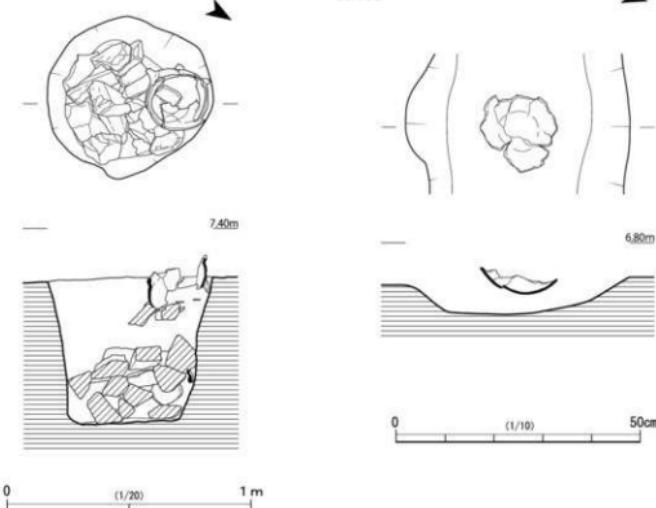
SL401



第24図 SK308・309・SL301・401 実測図

SE401

SD408



第25図 SE401・SD408 実測図

後半の可能性が指摘されている。

(5) 井戸

SE401（第25図 図版21） 調査区中央部西端に位置する素掘りの井戸で、平面形は直径67cmのはば円形を呈し、深さは61cmを測る。埋土は3層に分かれ、第3層は褐灰色粘質土と10～15cm四方の礫石33個と瓦質土器鍋が廃棄されていた。また第1層から土師器皿の土器片と、底部と脚部を打ち欠いた足鍋が出土した。足鍋は口縁を上方に据えた状態で出土し、井戸廃絶儀礼の可能性も考えられる。

(6) 溝

20条の溝が検出された。SD403からSD411はほぼ並行するように検出され、同地区最大規模のSD401と直交するが、遺物が出土せず、互いの関係性を確認するまでには至っていない。

SD401（第26図 図版20・21） 調査区の中央西寄りに位置し、緩やかに北流する。確認長は54.18m、幅77～140cm、標高差21cmである。埋土中から製塙土器と思われる土師器台脚部(35)、土師器皿(36)、壺(37～40)、須恵器杯蓋(41～53)、杯身(54～70)、須恵器壺(71・72)、須恵器高杯(73～75)、須恵器壺(76)、棒状土錐(77・78)、砥石(79)、鉄滓(229)が出土している。遺物が集中して出土する箇所があり、出土状況から廃棄されたものと考えられる。出土遺物から8世紀後半～9世紀初頭の遺構と考えられる。

SD408（第25図 図版19） SD401とはほぼ直交する形で西流する。確認長は4.52m、幅19～38cm、標高差は16cmである。埋土中から土師器壺の底部が出土しているが、詳細な年代は不明である。

(7) 柱穴

検出された柱穴は620個あまりで、約1/4にあたる144個の柱穴から遺物が出土した。残存状況に多少の違いはあるものの、調査区全域で平均的に検出された。

SP3001 (SB302) (第27図 図版22) 北側に位置し、SB302を構成する柱穴の一つである。南側にテラスを有し、規模は径34～36cm、深さ22cmを測る。埋土上位で土師器椀（8）が出土した。出土遺物から13世紀後半の遺構と考えられる。

SP3016 (第27図 図版22) 北側に位置し、規模は径26～27cm、深さ35cmを測る。埋土上位で土師器皿（87）、杯（88）、瓦質土器足鍋（89）が出土した。出土遺物から14世紀中頃の遺構と考えられる。

SP3018 (第27図 図版22) 北側に位置し、規模は径23～25cm、深さ38cmを測る。埋土上位で土師器甕（80）が出土した。出土遺物から5世紀代の遺構と考えられる。

SP3025 (SB303) (第27図 図版22) 北側に位置し、SB303を構成する柱穴の一つである。規模は径28cm、深さ12cmを測る。検出面に近い位置で土師器椀（12）、瓦質土器鍋（13）が出土した。出土遺物から古代末の遺構と考えられる。

SP3049 (第27図 図版22) 東側に位置し、規模は径51～54cm、深さ19cmを測る。埋土下位で上向きに据えられたように土師器高杯（81）が出土した。出土遺物から5世紀代の遺構と考えられる。

SP4002 (第27図 図版22) 南側に位置し、規模は径26～32cm、深さ4cmを測る。検出面付近で須恵器高杯（82）、三えトチン（83）が出土した。出土遺物から古代の遺構と考えられる。

SP4061 (SB402) (第28図 図版22) 北側に位置し、SB402を構成する柱穴の一つである。規模は径26～27cm、深さ11cmを測る。埋土中位で土師器皿（15～18）4枚が重なって出土した。出土遺物から12世紀前半～中頃に建物の廃絶儀礼を行ったものと考えられる。

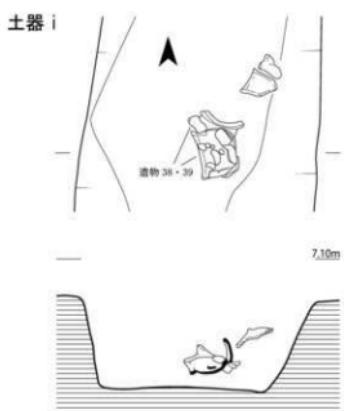
SP4064 (第28図) 北側に位置し、規模は径21～24cm、深さ31cmを測る。埋土中位で、土師器椀が出土した。出土遺物から中世前半の遺構と考えられる。

SP4065 (第28図) 北側に位置し、規模は径24～25cm、深さ34cmを測る。埋土中位で、土師器椀・杯の土器片が出土した。出土遺物から中世前半の遺構と考えられる。

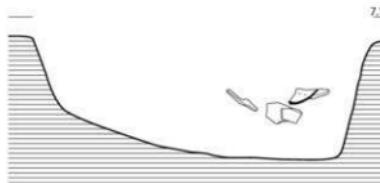
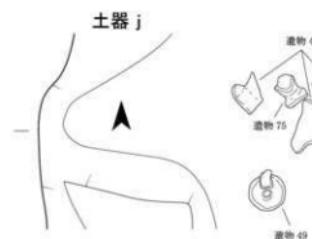
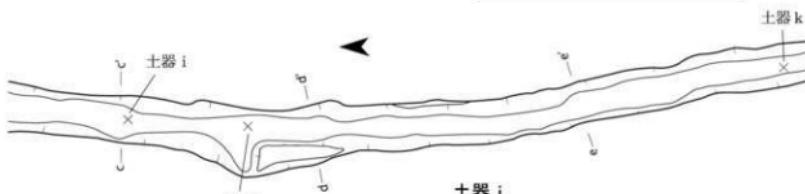
SP4068 (SB403) (第28図 図版22) 北側に位置し、SB403を構成する柱穴の一つである。規模は径20～22cm、深さ25cmを測る。埋土中位で土師器が出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

SP4079 (第28図 図版22) 北側に位置し、規模は径26～27cm、深さ20cmを測る。埋土中位から上位にかけて土師器片が出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

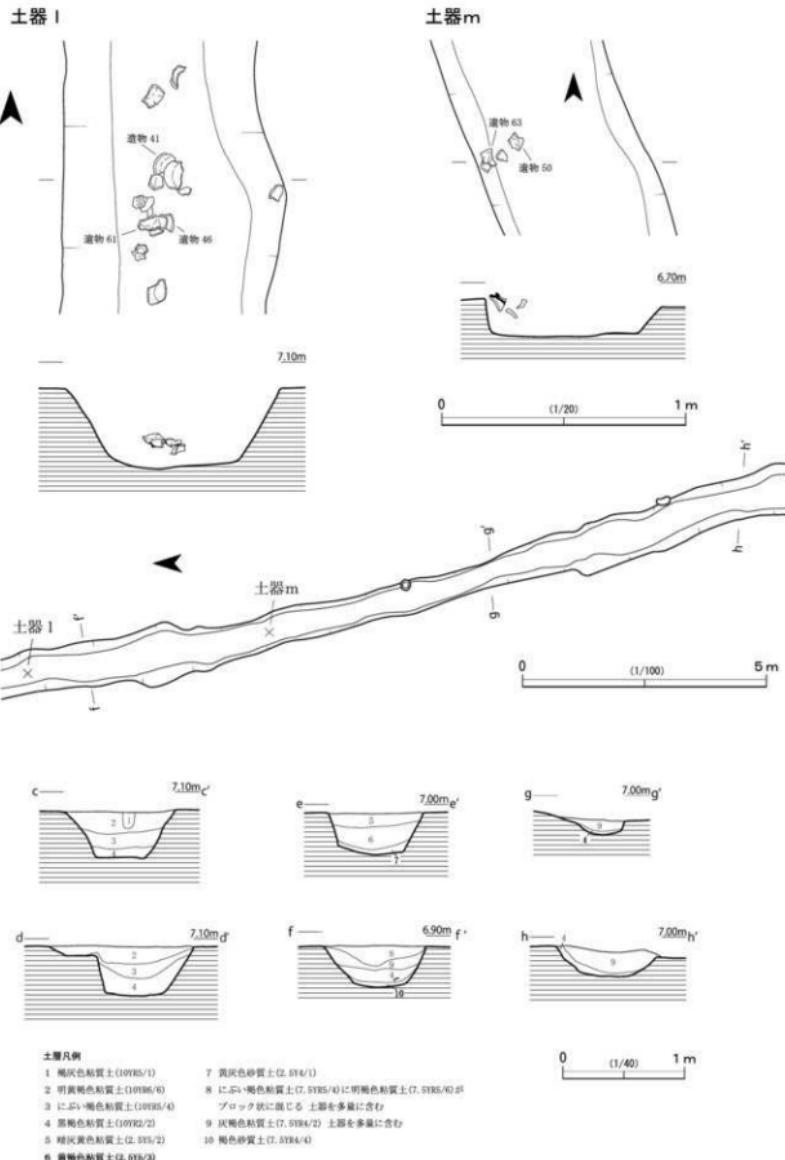
SP4083 (SB404) (第28図 図版22) 中央北端に位置し、SB404を構成する柱穴の一つである。規模は径22～23cm、深さ29cmを測る。埋土上位で土師器杯（19）が出土した。出土遺物から古代末の遺構と考えられる。



0 (1/20) 1 m

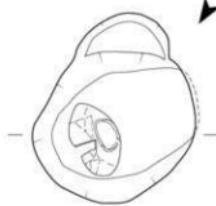


0 (1/20) 1 m



第 26 図 SD401 実測図

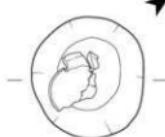
SP3001 (SB302)



SP3016

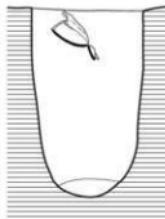
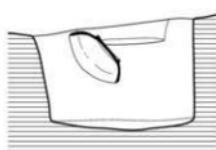


SP3018



6.60m

6.60m

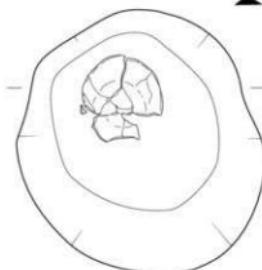


SP3025 (SB303)



6.50m

SP3049

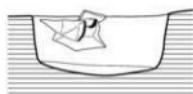


6.00m

SP4002



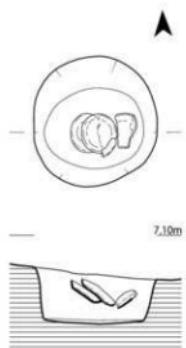
7.10m



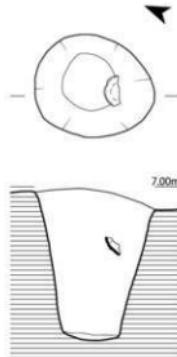
0 (1/10) 50cm

第 27 図 SP3001 (SB302) • 3016 • 3018 • 3025 (SB303) • 3049 • 4002 実測図

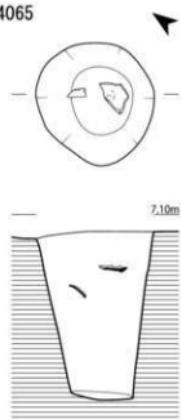
SP4061 (SB402)



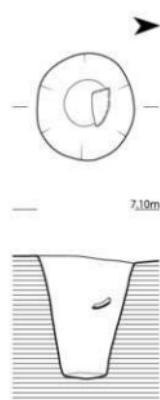
SP4064



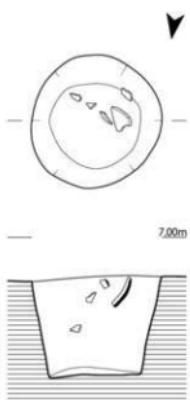
SP4065



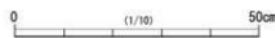
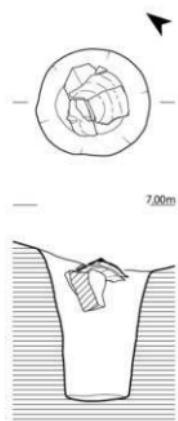
SP4068 (SB403)



SP4079



SP4083 (SB404)



第 28 図 SP4061(SB402)・4064・4065・4068(SB403)・4079・4083(SB404) 実測図

第5表 向条谷地区掘立柱建物一覧表

※：南東隅の柱穴から測れなかった場合

造構番号	規模(間)	棟方向	棟行 建物の南東隅から (m)	梁行 建物の南東隅から (m)	床面積 (m ²)	開通柱穴	出土遺物	時代	備考
SB301	2×2	N26°W	4.78 (2.44-2.34)	4.51 (2.26-2.25)	21.56	SP3013	土師器、木製品	中世前半	
SB302	2×2	N26°W	4.70 (2.19-2.51)	4.47 (2.21-2.26)	21.01	SP3001, SP3017	青磁、土師器、瓦質土器	古代末	西側に長さ70cmの廻付。
SB303	2×2	N26°W	5.39 (2.27-3.12)	3.16 (1.60-1.56)	17.03	SP3025, SP3032	土師器	古代末	
SB304	2×1	N7°E	4.34 (2.56-1.78)	2.98	12.93	-	土師器	中世	北西隅角柱、調査区外のため検出不能。
SB305	2×2	N15°E	8.43 (1.96-2.38)	4.34 (1.96-2.38)	18.84	-	-	不明	
SB401	2×2	N22°W	4.15 (2.20-1.95)	3.45 (1.67-1.78)	14.32	-	土師器	中世	北西隅角柱、調査区外のため検出不能。
SB402	4×1	N26°W	9.43 (2.15-2.68+ -)	2.31	21.78	SP4060, SP4061	土師器	中世	長屋、70cm裏裏に同一の方向性をもつ溝あり。
SB403	2×2	N24°W	8.47 (2.31-2.48)	3.98 (2.03-1.95)	19.06	SP4068	土師器	中世前半	南東隅角柱、削平のため検出不能。
SB404	2×2	N22°E	4.10 (2.22-1.88)	3.49 (1.52-1.97)	14.31	SP4083	土師器	古代末～中世前半	北西隅角柱、調査区外のため検出不能。
SB405	2×2	N64°E	3.60 (2.02-1.58)	3.14 (1.52-1.62)	11.30	-	瓦質土器	中世	SB301～303・402は方向性が一致する。

第6表 向条谷地区土坑一覧表

造構番号	平面形	主軸方位	規 模(cm)			出土遺物	時 代	備 考
			長 さ	幅	深 さ			
SK301	長方形	N53°E	138	57	22	-	-	炭出土。
SK302	楕円形	N86°W	106	35	39	-	-	
SK303	不整形	-	69	33	12	-	-	
SK304	長方形	N40°W	67	42	9	-	-	
SK305	楕円形	N14°E	88	70	19	-	-	
SK306	長方形	N26°W	69	43	13	-	-	
SK307	不整形	-	78	76	5	-	-	
SK308	長方形	N12°W	96+a	89	14	土師器	中世	既、出土多數出土。北壁調査区外に伸びる。
SK309	不整形	-	110	102	14	土師器、瓦質土器	13C後半	
SK310	不整形	-	最大120	最大50	6	土師器	中世	西端調査区外へ伸びる。
SK401	楕円形	N19°E	100	75	37	土師器、須恵器	古代末～中世	
SK402	楕円形	N70°E	85	54	13	-	-	
SK403	長方形	N6°W	103	62	21	-	-	
SK404	楕円形	N57°W	73	62	38	土師器、須恵器	古代末～中世	
SK405	不整形	-	90	45	23	-	-	
SK406	楕円形	N46°E	95	68	19	-	-	
SK407	長方形	N8°E	78	55	11	土師器、須恵器	15C	
SK408	楕円形	N1°E	60	54	11	-	-	炭少量出土。
SK409	楕円形	N2°W	100	88	7	土師器、須恵器	古墳	如壁片混じる。

第7表 向条谷地区溝一覧表

造構番号	長 さ (m)	幅 (cm)	標高差 (cm)	出土遺物	時 代	備 考
SD301	1.79	14~37	10	-	不明	U字断面形。両端調査区内で収束。
SD302	2.68	13~52	6	-	不明	U字断面形。両端調査区内で収束。SD301に接する。
SD303	1.92	18~42	2	-	不明	U字断面形。両端調査区内で収束。
SD304	2.05	12~18	4	土師器	-	U字断面形。両端調査区内で収束。
SD305	2.22	15~35	2	須恵器	-	U字断面形。両端調査区内で収束。
SD306	6.20	14~75	3	須恵器、土師器	-	U字断面形。SD305に接する。
SD307	14.22	41~84	3	須恵器、瓦器、青磁、土師器、瓦質土器、土製品、鉄滓	古代末～中世	U字断面形。両端調査区外へ伸びる。
SD308	2.74	26~38	10	-	不明	U字断面形。北端調査区内で収束。両端調査区外へ伸びる。途中SK309と接する。
SD309	2.85	16~48	5	土師器	中世	U字断面形。北端調査区内で収束。両端調査区外へ伸びる。SD308と方向性が一致する。
SD401	54.18	77~140	21	土師器、須恵器、石製品	8 C後半～9 C初頭	U字断面形。北端調査区内で収束。両端調査区外へ伸びる。SD403～SD411と直交する向きに緩やかに北流する。
SD402	10.35	22~55	7	土師器、須恵器、鉄滓	古代	U字断面形。両端調査区内で収束。
SD403	3.15	23~34	6	-	不明	
SD404	2.58	17~21	18	-	不明	
SD405	3.10	14~17	11	-	不明	
SD406	5.79	15~36	21	-	不明	U字断面形。両端調査区内で収束。SD403～SD411までは同じ方向性をもつ。SD410を除くと、SD404～SD411まで1.5m前後の等間隔で並ぶ。
SD407	9.53	15~28	29	-	不明	
SD408	4.52	19~38	16	土師器	不明	
SD409	2.77	19~24	10	-	不明	
SD410	1.54	17~20	12	土師器	古代	
SD411	1.80	22~24	2	土師器	古代	

2 遺物

調査の結果、主に古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代の遺物が出土した。遺物の種類としては、土師器・須恵器・輸入磁器・綠釉陶器・土師質土器・瓦質土器・土製品・石製品・金属製品・木製品などがある。堅穴建物・柱穴・土坑・井戸・溝に伴う遺物が比較的多く、良好な一括資料を得ることができた。また、遺物包含層から出土した遺物も多種多様である。なお、各遺物の法量や調整、特徴については、遺物観察一覧表に掲載している。

(1) 堅穴建物出土遺物（第29図 図版23）

1～6はSI401出土の遺物である。1は土師器長頸壺の体部で、内面中位から頸部にかけて粘土帯巻き上げ痕を明瞭に残している。2は高杯の脚部で、裾部がわずかに膨らみ、端部は外方に緩やかに屈曲する。3は土師器甕である。胎土は精良で、内外面ともに灰白色を呈する。4は土師器甕で、口縁は肩から直立し、端部に水平な平坦面をもつ。胎土は精良で、内外面ともに灰白色を呈する。搬入品の可能性が考えられる。5・6は磨石である。石材はともに凝灰岩と思われる。

(2) 掘立柱建物出土遺物（第29図 図版23・24）

7はSB301の構成柱穴出土の用途不明木製品で、下先端の一方を斜めに削り、上先端は横方向に削る。8・9はSB302の構成柱穴出土の遺物で、ともに土師器椀である。8は広い見込みから体部が緩やかに内湾して立ち上がる。9は体部が緩やかに内湾して立ち上がるが、中位で器壁が薄くなり、口縁端部内面で肥厚させている。10～13はSB303の構成柱穴出土の遺物で、10・11は土師器椀あるいは杯である。いずれも口縁部が外反する。12は土師器椀あるいは杯で体部にロクロ目を残し、口縁端部内面に傾斜面をもつ。13は土師質土器鍋で、体部中位の器壁は0.7cmであるが口縁部は1.1cmと厚い。14～18はSB402の構成柱穴出土の土師器皿で、14は器壁0.4cmの体部が短く立ち上がる。16は器壁が薄く、底部から腰が大きく張り出し、直線的に伸びる。口縁端部に小さな平坦面をもつ。19はSB404構成柱穴出土の土師器杯で、体部外面にロクロ目を残し、内面は見込みから緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。

(3) 土坑出土遺物（第30図 図版24）

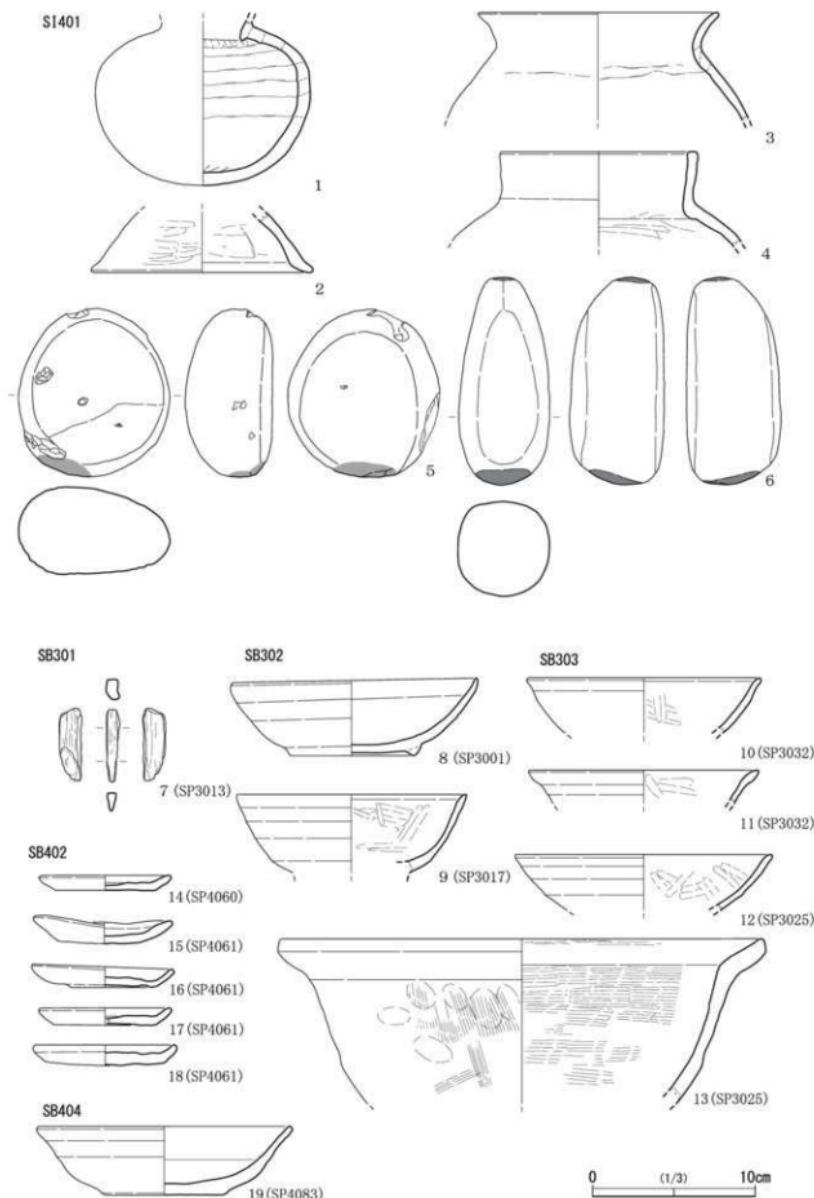
20はSK310出土の土師器皿で、底部から口縁部に向かって薄くなる。21～27はSK309出土遺物である。21は土師器皿で、底部から口縁部にかけて器壁がほぼ均一で、端部は丸みをもつ。22・23は土師器椀で、23は体部が緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部外面に傾斜面をもつ。24は土師器杯で、体部が緩やかに内湾して立ち上がり、口縁下位で器壁が薄く、端部で膨らむ。25・26は瓦質土器捏鉢である。27は土師質土器羽釜である。28・29はSK409出土の土師器甕である。28は体部がほぼ直行して立ち上がり、口縁端部は丸みをもつ。29は甕把手と体部で、把手は扁平で幅広である。

(4) 井戸出土遺物（第30図 図版25）

SE401出土の遺物である。30は瓦質土器足鍋で、口縁部が内湾し端部は内側につまみ出している。31は復元径43.8cmの鍋で、体部に強い指オサエとナデを施し、口縁端部は外方につまみ出している。

(5) 溝出土遺物（第31図 図版25）

32～34はSD307の出土遺物である。32は瓦器椀で、内面にヘラミガキを施し、小さく低い高台をもつ。33は扁球状の管状土錘で、体部に縱溝をもつ。34は瓦質土器捏鉢で、体部は器壁がほぼ均一で、



第29図 出土遺物実測図(1)

SK310



SK309



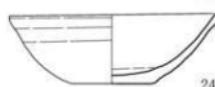
21



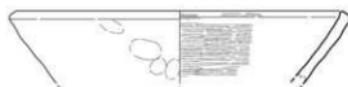
22



23



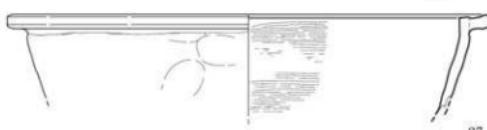
24



25

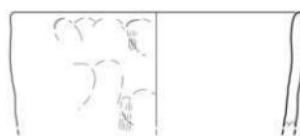


26

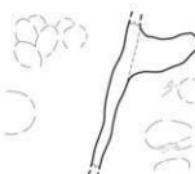


27

SK409

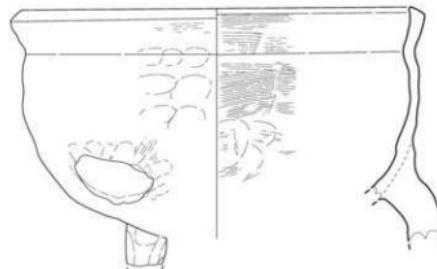


28

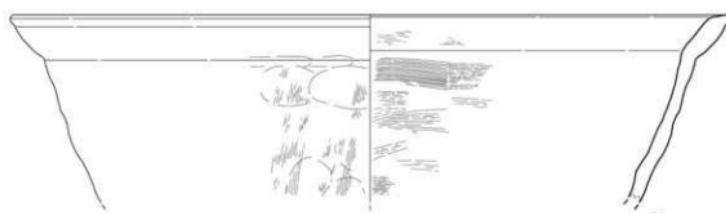


29

SE401



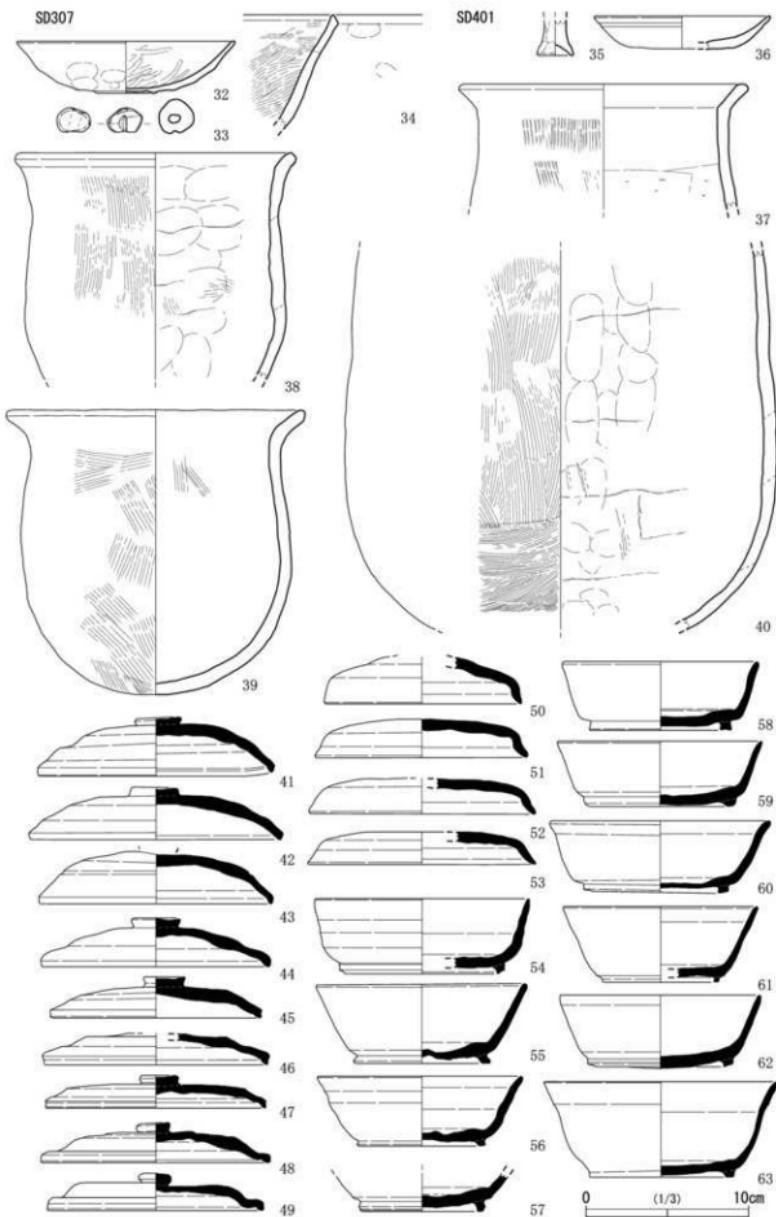
30



31

0 (1/3) 10cm

第30図 出土遺物実測図(2)



第31図 出土遺物実測図(3)

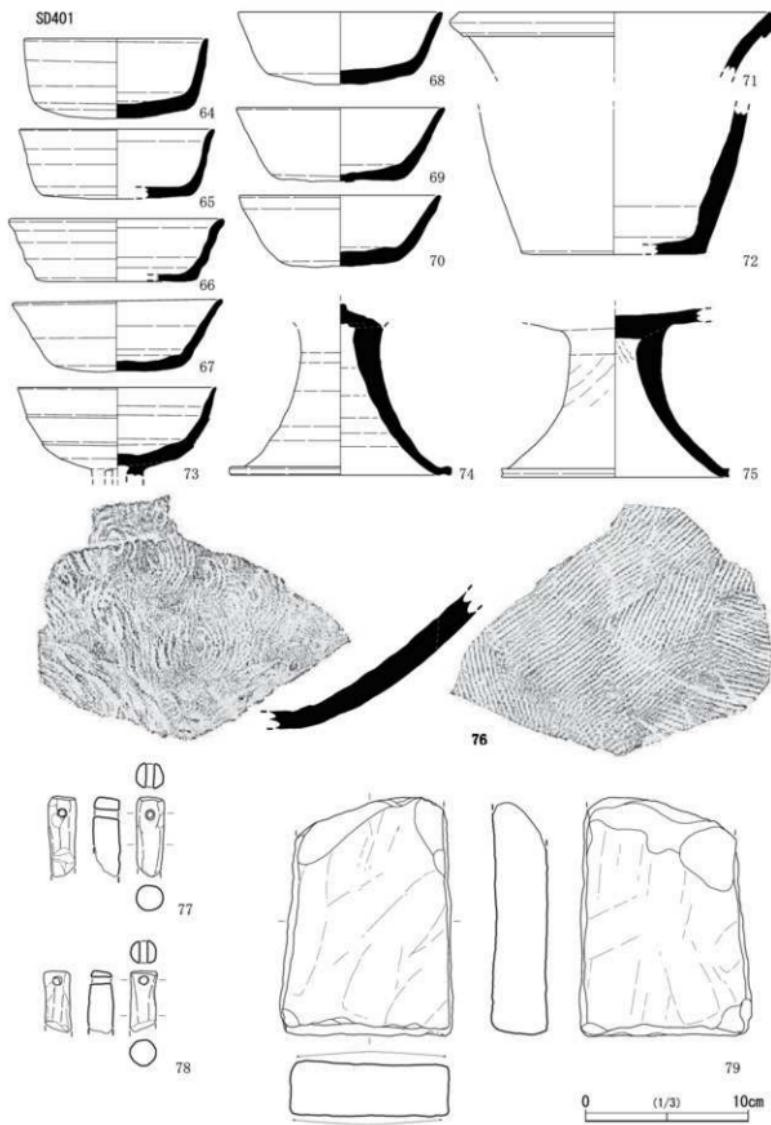
端部は上方につまみ上げている。35～79はSD401出土の遺物である。35は美濃ヶ浜式製塙土器の台脚部と思われる。36は土師器皿で、口縁部外面の下に幅0.3cmの浅い沈線が巡る。37～39は土師器甕で、煎熬用の製塙土器の可能性がある。37は口縁部内面の屈曲部に稜をもつが、38・39は稜をもたない。いずれも器壁が厚く、外面にハケ目を施す。40は土師器甕で、外面全体にハケ目を施し、内面は丁寧なナデを施している。41～53は須恵器杯蓋で、41～43は天井部が高くドーム状を呈し、緩やかに内湾して端部に至る。45～49は天井部が平坦で、肩部と口縁部の間にくびれをもつ。50～53は肩部から小さく外反して口縁部に至り、口縁部内面に傾斜面をもつ。51～53は天井部が平坦なため皿の可能性もある。54～70は須恵器杯身である。54～63は高台をもつ杯身で、64～70は高台の無い杯身である。71は須恵器広口壺の口縁部で、口縁端部をつまみ上げ、口縁外面下位に浅い沈線をもつ。72は須恵器壺で、体部の器壁が最大で1.3cmあり厚い。73は古墳時代後期の高杯杯部であるが、混入遺物である。体部外面に2条の稜線があげられ、脚部との接合部分に透かし孔の痕跡が2か所確認できる。74・75は高杯の脚部である。74は焼成不良で灰白色を呈し、裾端部は丸みを帯びている。75は裾端部の稜線が明瞭で、端部内面に沈線が巡る。76は大甕の底部で、内面に粘土帶巻き上げ痕と縱方向の火われ痕がみられる。77・78は棒状土錘である。77は横幅1.7cm、78は1.6cmと太い。79は荒砥用の砥石で、石材は凝灰岩と思われる。

(6) 柱穴出土遺物（第33図 図版28）

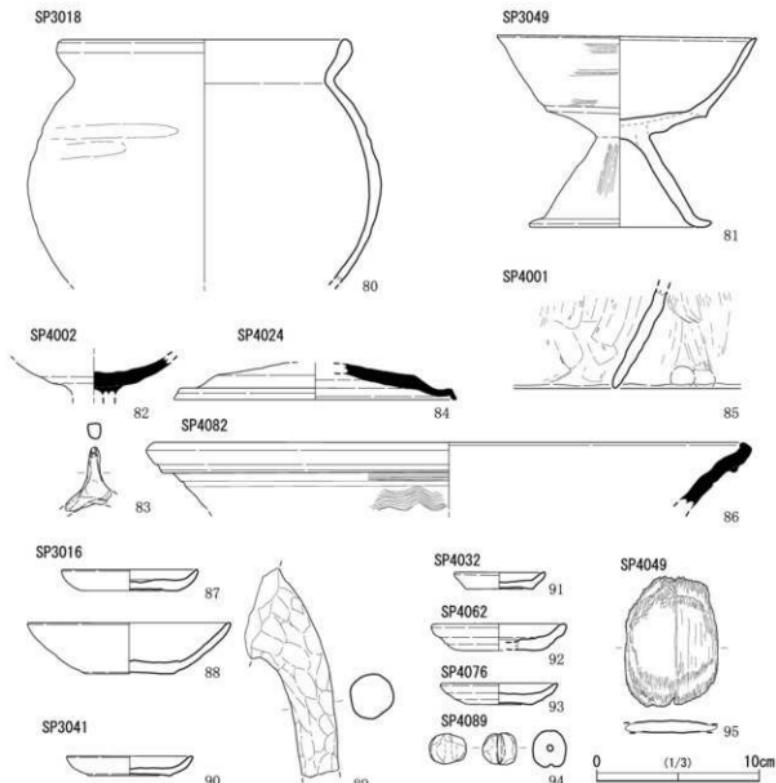
80は古墳時代中期の土師器甕で、球状に膨らむ体部をもち、頸部でくの字状に屈曲し口縁部に至る。体部に強い指ナデ痕が2条みられる。81は古墳時代中期の土師器高杯で杯部は深く、外面下位に明瞭な稜線をもつ。脚部は大きく開き、裾部は端部付近で接地面をもつ。82は須恵器高杯で、脚部との接合面で剥離している。83は三叉トチンで、中心部から端部までの長さは2.6cmである。84は須恵器杯蓋で、肩部と口縁部の間にくびれをもち、口縁部は下方に屈曲し、端部は尖る。85は土師器瓶で、内面はハケ目の後、ヘラケズリを施す。86は須恵器甕の口縁部で、外面に6条の直線文と9条1単位の波状文をもつ。87は土師器皿で体部は短く、わずかに内湾して立ち上がる。88は土師器杯で、見込みと体部の境を強くなじ、わずかに内湾しながら立ち上がる。89は瓦質土器の足綱脚部である。90は土師器皿で、底部から口縁部にかけてほぼ均一な器壁をもち、端部は丸みをもつ。91は土師器皿で、見込みに明瞭なロクロ目をもつ。体部外面は中位でわずかにくびれ、口縁端部は尖りぎみである。外面に赤色顔料が残る。92は土師器皿で器壁が厚く、口縁端部は肥厚して丸みをもつ。93は土師器皿で、内外面の一部に赤色顔料が残る。94は球状の管状土錘で、体部に縱溝をもつ。95は木製品で、板の厚さと縱直径の大きさから柄杓の底板と考えられる。229（図版40）は楕円形の鍛錬鍛治溝である。

(7) 遺物包含層出土遺物（第34図 図版30）

96～99は古墳時代後期の土師器である。96は高杯脚部で、中位で器壁が内外に膨らみ、裾部は外方に緩やかに屈曲する。97は土師器椀で、内面を放射状に強くなじ、外面は丁寧になでている。胎土は精良で、色調は浅黄橙色を呈し他の土器と異なる。98・99は土師器瓶の把手である。98は把手幅6.8cm、厚さ1.3cmである。99は把手幅5.3cm、厚さ0.8cmである。100～104は須恵器杯蓋である。100は口縁部内側に身受けのかえりをもつ。101・102は蓋の天井部分で、扁平な宝珠つまみをもつ。103は口縁部で、下方に屈曲し外方につまみ出している。104は天井部が平坦で、肩部と口縁部の間にくびれ

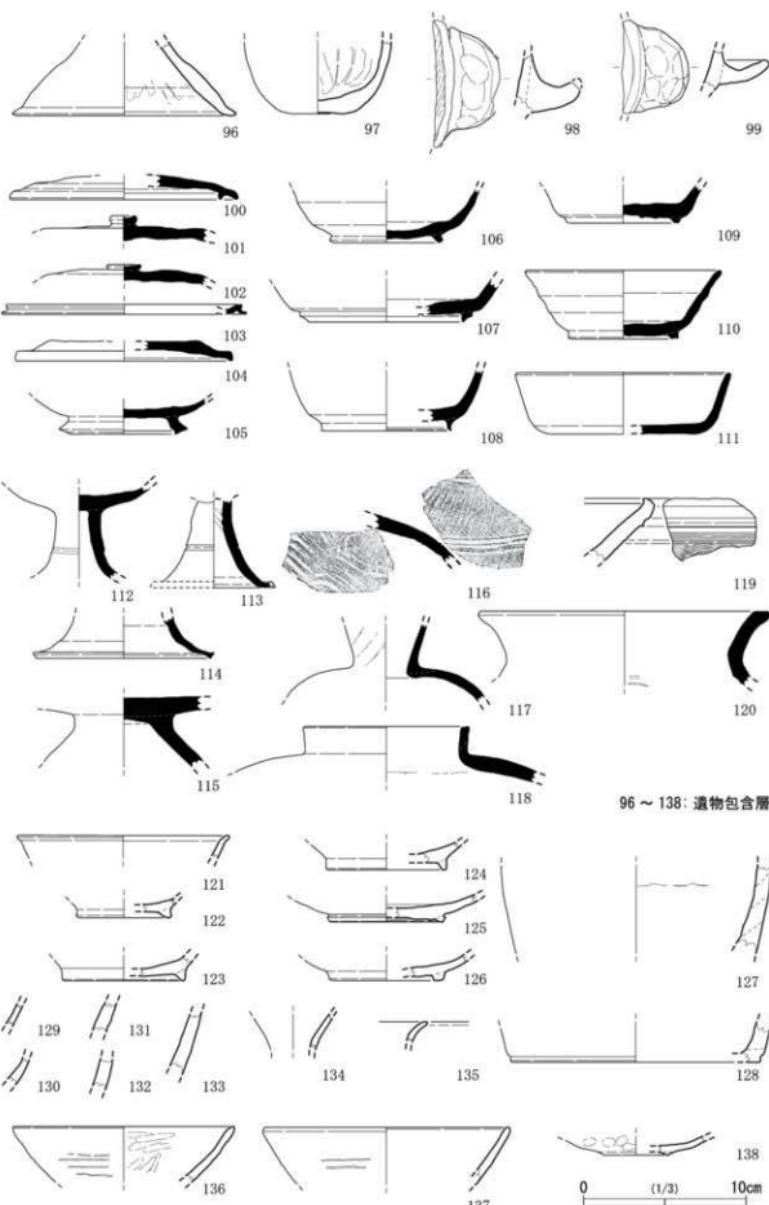


第32図 出土遺物実測図(4)



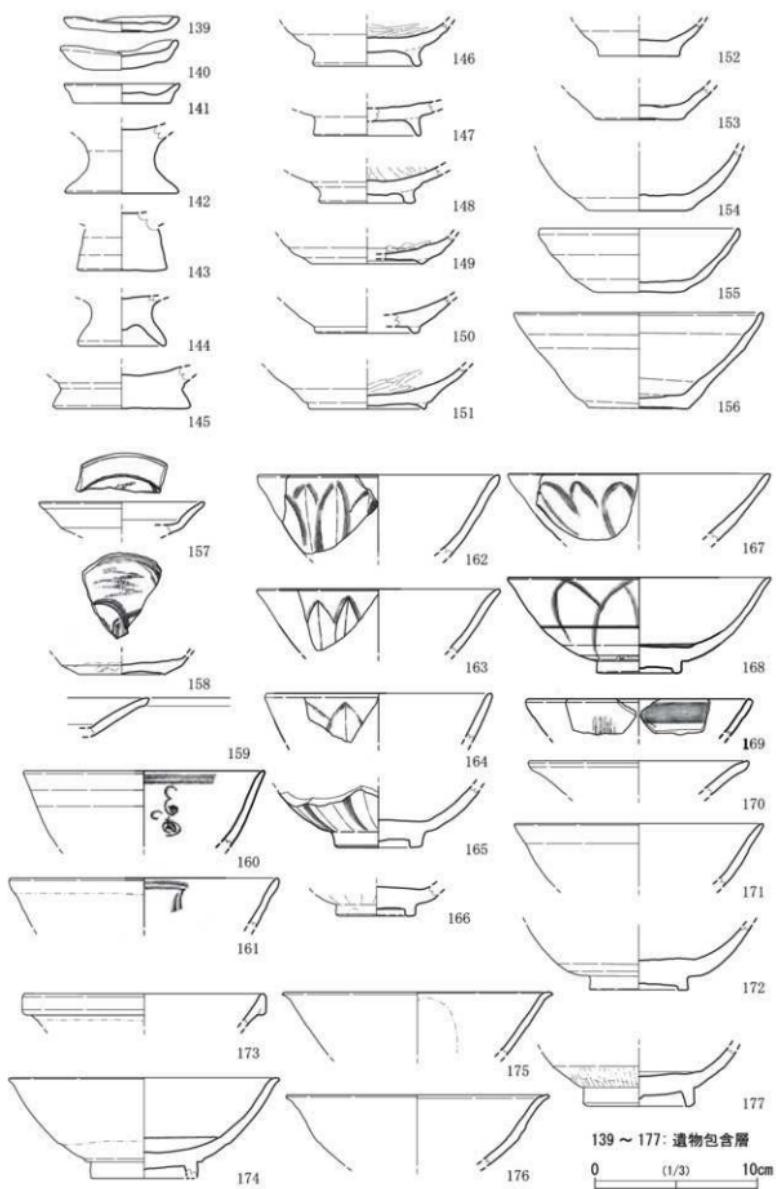
第33図 出土遺物実測図（5）

をもち、口縁端部は丸みを帯びた三角形を呈する。105～110は高台をもつ須恵器杯身である。105は高台が断面長方形を呈し、ハの字形に踏ん張り内側が接地する。106は大きく丸みを帯びた腰部から体部が立ち上がる。高台はハの字形に踏ん張り内側が接地する。107は横に小さく張る腰部から体部が立ち上がる。高台は傾斜し内側が接地する。108は緩やかに張り出した腰部から体部が立ち上がる。高台幅は細く鳥嘴状を呈し外側が接地する。109・110は緩やかに張り出した腰部から体部が立ち上がる。高台は断面台形を呈し、両側が接地する。111は高台の無い杯身である。平坦な底部から緩やかに張り出した腰部をもち、体部は外上方向に直線的に立ち上がる。112～115は須恵器高杯である。112・113は脚部中位に1条の沈線がめぐる。114は裾部で、端部は外上方につまみ上げている。115は大型の高杯で、脚部は大きくハの字形に開く。116は赤灰色を呈する壺の肩部で、外面に沈線と絞杉文状に刺突文を施している。117は須恵器長頸壺で、丸みを帯びた肩から外上方へ直線的に頸部が立ち上がる。118は短頸壺で、大きく張り出した肩からほぼ垂直に頸部が立ち上がる。119・120は須恵

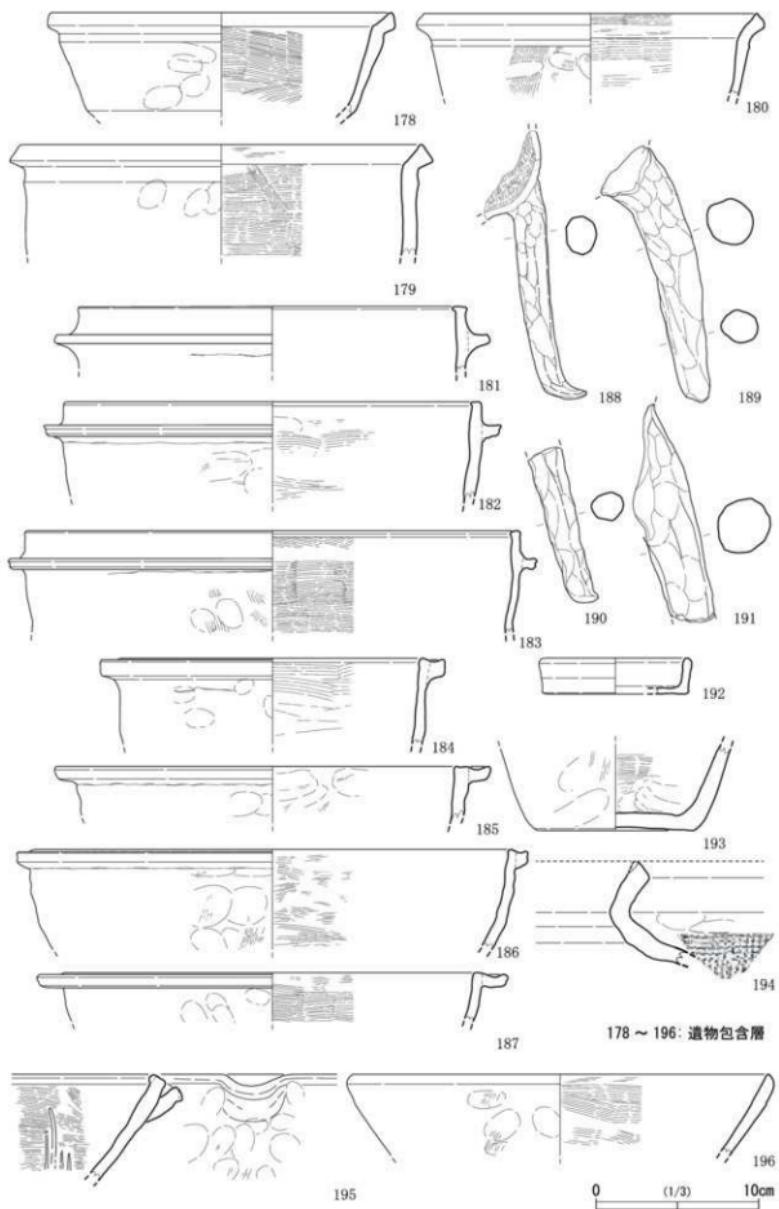


第34図 出土遺物実測図(6)

器窓の口縁部で、119は口縁外面に1条の沈線と小さな突帯をめぐらせ、5条の直線文と波状文を施している。120は口縁端部に平坦面をもち、頸部内面下位はヘラナデを施している。121～135は縁釉陶器である。121は楕の口縁部で、端部を外方へ屈曲させている。胎土は須恵質で、釉に光沢がある。122～126は楕底部である。122・123は見込みにトチンの目跡をもつ。125の削り出し高台を除き、他は貼り付け高台である。126は高台が断面台形を呈し、幅広である。いずれも胎土は土師質で、釉に光沢がない。127は壺の体部で、128は底部である。胎土や釉色の特徴から同一個体と思われる。129～133は楕あるいは壺の体部破片である。130は須恵質で、他は土師質である。134・135は瓶の口縁と思われる。136・137は瓦器楕と思われる。砂粒を含まない精良な胎土で、内面にヘラミガキを施し、内面と外面口縁部下位に炭素吸着処理を施している。138は瓦器楕で見込みに平行暗文をもち、高台は断面三角形で低く小さい。139～145は土師器皿である。139は見込みと体部の境に強いナデを施し、体部は立ち上がりが低い。140は長径7.9cm、短径7.3cmの梢円形を呈し、歪みも大きい。141は体部外面が中位でわずかにくびれ、口縁端部は尖りぎみである。142・143は土師器柱状高台皿で、142は高台中位にくびれをもつ。143は底部から内上方へすぼまる柱状である。144は土師器台付皿で、高台はハの字形に開く。高台の中心は山形に盛り上がるが、頂部はなでて平坦である。145は円板状の高台をもつ皿で、底部の復元径は8.4cmと大ぶりである。146～151は土師器楕である。146はハの字形に踏ん張る大ぶりの高台をもち、内面に密なヘラミガキを施す。147は細くて長い断面三角形の高台をもち、内面にヘラミガキを施す。148は高台が断面台形を呈し、接地面は幅広い。内面に幅の広いヘラミガキを施す。149は高台が丸みを帯びた断面三角形を呈し、内面にヘラミガキを施す。150は高台が丸みを帯びた台形を呈し、体部は高台から外上方へ直線的に立ち上がる。151は高台が小ぶりな断面三角形を呈し、内面にヘラミガキを施す。152～156は土師器杯である。152は底部からやや高い位置で張り出す腰部をもつ。底部の一部に赤色顔料が残る。153は体部が外上方に直線的に立ち上がる。154は体部が緩やかに内湾して立ち上がる。155は体部が緩やかに内湾して立ち上がり、外面にロクロ目を残す。156は体部が直線的に立ち上がり、外面にロクロ目を残す。復元口径15.1cmと大ぶりである。157～172は青磁皿と楕である。157・158は同安窯系の皿で、見込みに櫛目文と花文を施す。159は体部が見込みの境から外上方に直線的に立ち上がり、口縁部下位でわずかに膨らみ、端部は尖る。160は内面に飛雲文、161は分割線をもつ龍泉窯系の青磁楕である。162～166は鎬蓮弁文の楕である。いずれも蓮弁の中心に鎬をもつ。167・168は鎬の無い、幅広の蓮弁文をもつ。173～176は白磁楕である。173は玉縁口縁の楕である。174～176は体部が緩やかに内湾し、口縁部下位でわずかに反り、端部は内傾する平坦面をもつ。177は鉢底部である。178～180は瓦質土器の鉢である。178は口縁部が短く、断面は丸みを帯びた方形で、口縁部外面下位に強いナデを施す。179は口縁部が短く、端部に平坦面をもち口縁部外面下位に強いナデを施す。内面に炭化物、外面に煤が付着する。180は口縁部が短く、端部内側を上方につまみ上げている。181～187は羽釜である。181～183は口縁部の下位に鈎がつくもので、いずれも口縁端部を内側につまみ出している。184～187は口縁端部と同位に鈎がつくもので、鈎は断面が長方形や台形を呈し、端部をつまみ上げている。188～191は足鍋の脚部である。188は鍋との接合部からほぼ直線的に伸び、端部で大きく屈曲し接地面に平坦面をもつ。189は緩やかに屈曲するやや太めの脚部で、端部はやや尖る。190は脚部内側に強い指オサエを施し、端部に小さい屈曲



第35図 出土遺物実測図 (7)

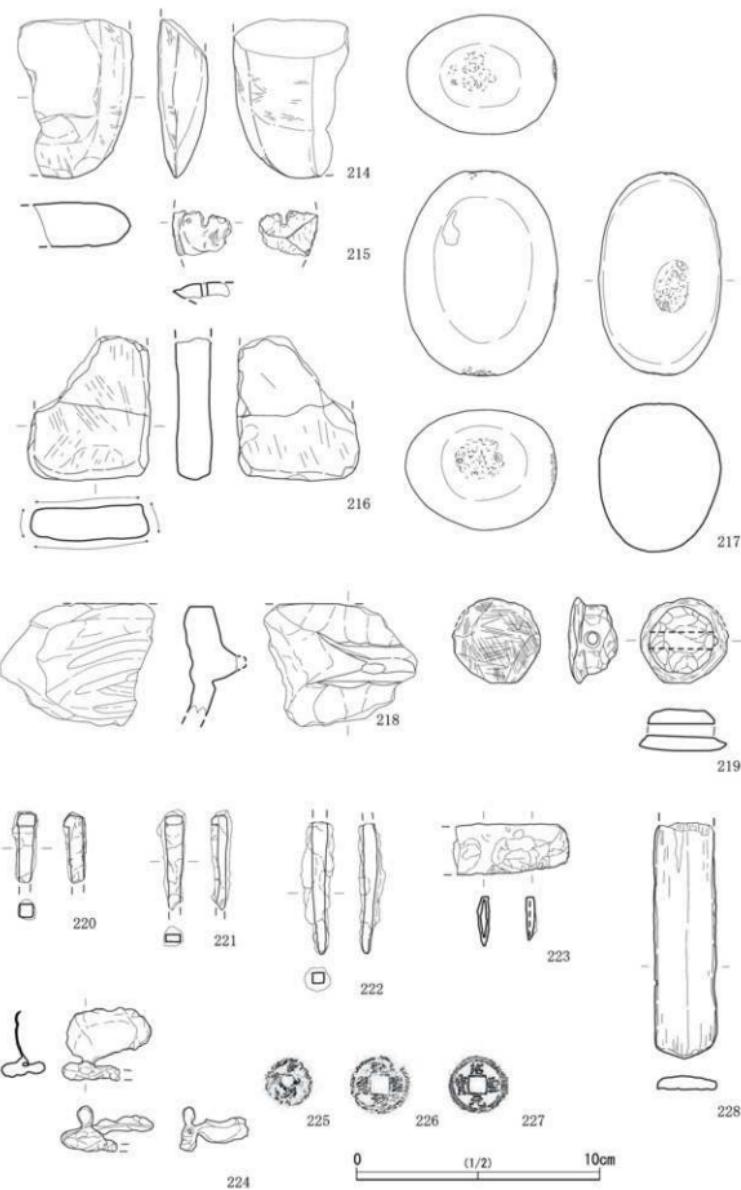


第36図 出土遺物実測図(8)



第37図 出土遺物実測図（9）

をもつ。191は鍋との接合部から太く直線的に伸びる。伊予系の足鍋の可能性が考えられる。192は瓦質土器の小型鉢である。体部が上方へ直線的に立ち上がり、端部は丸みをもつ。193は瓦質土器の壺と思われる底部で、内面にハケ目調整が見られるが、雑な仕上がりである。194は瓦質土器の大甕で、肩部に小さい格子目タタキを施す。195は片口をもつ瓦質土器擂鉢で、口縁内面に粘土を貼り肥厚させている。196は土師質土器捏鉢である。口縁外側に内傾する平坦面をもつ。197は備前焼の大甕で、口縁部の折り曲げ幅は広く、玉縁は断面円形を呈する。198は平瓦の右隅部分で上面に細かい布目をもつ。199～205は棒状土鉢で、棒状の両端に片側から穿孔し、穿孔出口の張り出し粘土を削り、両端部を裁ち落としている。206は有溝土鉢で、平面形は尖った卵形を呈し、棒状工具で両側面にU字形の溝を穿っている。207～213は紡錘形管状土鉢で、207は直径27cmの大型である。208～213は直径1.3～1.7cmの小型である。214～219は石製品である。214は両刃磨製石斧で、石材は玄武岩である。215は中央に気泡孔をもつ腰岳産黒曜石の剥片である。216は中砥用の砥石で、石材は凝灰岩である。217は敲石で上下面と側面に使用痕が見られる。石材は凝灰岩と思われる。218は石鍋口縁部で、端部に水平な平坦面をもつ。滑石製である。219は石鍋の補修栓で、栓の中位に直径0.7cmの円形の穴が横方向に穿たれている。滑石製である。220～228は金属製品である。200～222は鉄製の角釘である。223は鉄製刀子の茎と思われる。224は用途不明銅製品である。厚さ0.1cmの扇状の板部分と指円形の突起をもつ不整形な三角形から成る。透過X線撮影を試みたが、鉛等の不純物の含有率が高いためか透過できなかった。飾金具の可能性も考えられる。225～227は錢貨である。225は名称不明で、鉛の含有率が高いのか褐色を呈する。226は天聖元寶と思われる。227は紹聖元寶である。ともに北宋からの輸入錢である。228は下方先端を山形に加工した幅2.5cm、厚さ0.5cmの板である。



第38図 出土遺物実測図(10)

214～228：遺物包含層

第8表 向条谷地区出土遺物観察一覧表

邦 国 版	No.	出土 場所	種別	器種	法量(cm)			耐 熱 度 (後元値)	焼成 度	色調(内) 色調(外)	主な調査(内) 主な調査(外)	備 考
					上口 (後元値)	高さ (後元値)	底径 (後元値)					
29	23	1	SI401	土師器	壺	-	10.3	-	やや粗	に赤い褐色 に赤い褐色	横ナデ 底部: ハラナデ後丁寧なナデ 丁寧なナデ	
29	23	2	SI401	土師器	高脚 壺	-	3.8残	(13.6)	密	褐色 に赤い褐色 褐色	ナデ後アラミガキ ハラナデ後ナデ	
29	23	3	SI401	土師器	壺	(14.8)	6.6残	-	密	褐色 灰白色 灰白色	ハケ後丁寧なナデ ハケ前丁寧なナデ	
29	23	4	SI401	土師器	壺	12.0	5.8残	-	密	褐色 灰白色 灰白色	ハラナデ後丁寧なナデ 丁寧なナデ	搬入品か
29	23	5	SI401	石製品	磨石	横長 10.3	厚 9.3	重 5.3	7.40			凝灰岩か
29	23	6	SI401	石製品	磨石	横長 12.8	厚 5.6	重 5.7	6.50			凝灰岩か
29	23	7	SI301 (SP3013)	木製品	用意 不明品	横長 4.5残	厚 1.3	0.1 ~ 0.6				
29	23	8	SI302 (SP3025)	土師器	壺	14.9	4.7	7.5	密	褐色 灰白色 灰白色	回転ナデ 底部: 回転ナデ後丁寧なナデ	
29	23	9	SI302 (SP3017)	土師器	壺	(14.2)	4.8残	-	密	褐色 灰白色 灰白色	回転ナデ後アラミガキ 回転ナデ	
29	23	10	SI303 (SP3032)	土師器	壺 または 杯	(14.4)	3.4残	-	密	褐色 灰白色 浅黃褐色	回転ナデ後アラミガキ 回転ナデ	
29	23	11	SI303 (SP3032)	土師器	壺 または 杯	(14.0)	2.0残	-	密	褐色 灰白色 灰白色	回転ナデ後アラミガキ 回転ナデ	
29	23	12	SI303 (SP3025)	土師器	壺 または 杯	(15.8)	3.4残	-	密	褐色 灰白色 灰白色	回転ナデ後アラミガキ 回転ナデ	
29	23	13	SI303 (SP3025)	土師器	壺	(25.6)	15.1残	-	粗	褐色 に赤い褐色 黒褐色	横ナデ後ナデ オサナデ後黒ナデ ナデ	
29	24	14	SB402 (SP4060)	土師器	壺	(7.8)	0.9	(6.2)	やや粗	褐色 褐色	回転ナデ 見込み: 回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ 底部: 回転ナデ後静止ナデ	
29	24	15	SB402 (SP4060)	土師器	壺	8.6	1.3	4.9	粗	中や軟質 褐色	回転ナデ 見込み: 回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ 武部: 回転ナデ後静止ナデ	
29	24	16	SB402 (SP4060)	土師器	壺	8.3	1.2	4.2	密	褐色 褐色	回転ナデ 見込み: 回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ 武部: 回転ナデ後静止ナデ	
29	24	17	SB402 (SP4060)	土師器	壺	(8.2)	1.1	(6.4)	密	褐色 褐色	回転ナデ 武部: 回転ナデ	
29	24	18	SB402 (SP4060)	土師器	壺	8.8	1.3	7.4	やや粗	中や軟質 褐色	回転ナデ 武部: 回転ナデ	
29	24	19	SB404 (SP4085)	土師器	杯	(15.5)	4.2	(7.6)	密	褐色 暗赤褐色	回転ナデ 見込み: 回転ナデ後アラミガキ 回転ナデ 底部: 回転ナデ後アラミガキ	
30	24	20	SK310	土師器	壺	(6.2)	0.8	(4.3)	やや粗	褐色 に赤い褐色 褐色	回転ナデ 底部: 回転ナデ	
30	24	21	SK309	土師器	壺	8.0	0.9	6.0	やや粗	褐色 に赤い褐色	回転ナデ 底部: 回転ナデ	
30	24	22	SK309	土師器	壺	-	1.8残	(7.5)	やや粗	中や軟質 褐色 浅黃褐色	回転ナデ 底部: 回転ナデ	
30	24	23	SK309	土師器	壺	(16.4)	4.8	(8.8)	密	中や軟質 褐色 灰白色	回転ナデ 底部: 回転ナデ	
30	24	24	SK309	土師器	杯	12.9	4.3	5.0	密	褐色 に赤い褐色 褐色	回転ナデ 底部: 回転ナデ	
30	24	25	SK309	瓦質土器	程跡	(20.0)	4.5	-	粗	褐色 黄灰色	横ナデ後ナデ オサナデ後ナデ	
30	24	26	SK309	瓦質土器	程跡	(23.0)	5.0残	-	密	中や軟質 褐色 黄灰色	横ナデ オサナデ後ナデ	
30	24	27	SK309	土師質 土器	羽茎	(26.0)	6.1残	-	密	褐色 浅黃褐色 褐色	横ナデ後ナデ オサナデ後ナデ	
30	24	28	SK409	土師器	瓶	(27.5)	7.0残	-	やや粗	褐色 褐色	丁寧なナデ オサナデ	
30	24	29	SK409	土師器	瓶 把手	47	9.1残	把手厚 2.0	やや粗	褐色 明示褐色 明示褐色	把手ナデ オサナデ後ナデ ハケ日後ナデ	
30	25	30	SE401	瓦質土器	足跡	23.9	14.1残	-	密	褐色 暗灰色	横ナデ後ナデ オサナデ ハケ日後ナデ	外面に煤付着
30	25	31	SE401	瓦質土器	縁	(43.8)	11.5残	-	やや粗	褐色 暗灰色	横ナデ後ナデ オサナデ後ハケ日後ナデ	外面に煤付着
31	25	32	SD307	瓦器	壺	(13.4)	3.2	(3.3)	やや粗	中や軟質 褐色 灰白色	横ナデ後アラミガキ オサナデ後ナデ	和泉型
31	25	33	SD307	土製品	管状有 溝土器	20	1.5	0.5 ~ 0.7	密	褐色 灰白色 灰白色	オサナデ 明示褐色 明示褐色	
31	25	34	SD307	瓦質土器	程跡	-	7.0残	-	密	褐色 オリーブ黒色	ハケ日後ナデ オサナデ後ナデ	
31	25	35	SD401	土師器	製塗土 器	-	2.2残	2.1	粗	褐色 明示褐色 明示褐色	ナデ ナデ	美濃ヶ浜式製塗土器 台脚部分
31	25	36	SD401	土師器	壺	(10.8)	2.0	(6.4)	密	褐色 浅黃褐色	回転ナデ ナデ	外面に煤付着
31	25	37	SD401	土師器	壺	(17.0)	7.7残	-	やや粗	褐色 暗褐色 に赤い褐色	ナデ後ナデ ナデ	美濃ヶ浜式製塗土器 台脚部分
31	25	38	SD401	土師器	壺	(17.3)	13.9残	-	やや粗	中や軟質 褐色 に赤い褐色	ナデ後ナデ ナデ	美濃ヶ浜式製塗土器 台脚部分
31	26	39	SD401	土師器	壺	18.4	17.5	-	やや粗	褐色 暗褐色 明示褐色	ナデ後ナデ ナデ	美濃ヶ浜式製塗土器 台脚部分
31	26	40	SD401	土師器	壺	-	23.0残	-	粗	褐色 褐色	ナデ後ナデ ナデ	外面に煤付着
31	26	41	SD401	須恵器	杯蓋	14.3	3.6	つまみ律 2.9	密	褐色 灰白色	天井部: 回転ナデ後静止ナデ 天井部: ハラナデ	陶室専用
31	26	42	SD401	須恵器	杯蓋	(15.4)	3.2	つまみ律 2.8	密	褐色 灰白色	天井部: 回転ナデ 天井部: ハラナデ	陶室専用
31	26	43	SD401	須恵器	杯蓋	(14.3)	3.2	つまみ律 2.8	やや粗	褐色 灰白色 灰白色	天井部: 回転ナデ後静止ナデ 天井部: ハラナデ	陶室専用
31	26	44	SD401	須恵器	杯蓋	(14.1)	3.0	つまみ律 3.0	やや粗	褐色 灰白色	天井部: 回転ナデ後静止ナデ 天井部: ハラナデ	陶室専用
31	26	45	SD401	須恵器	杯蓋	(12.8)	2.5	つまみ律 2.5	やや粗	褐色 灰白色	天井部: 回転ナデ後静止ナデ 天井部: ハラナデ	陶室専用

種別	國版	No.	施主場所	種別	番号	法量(cm)			粒上	粒成	色調(内 外)	主な調整(内 外)	備考
						口径 (復元値)	高さ (残存値)	底径 (復元値)					
31	26	46	SD401	須志器	杯蓋	(137)	19残	-	やや粗	硬質	灰白色 灰黑色	回転ナデ 天井部：回転ナデ後静止ナデ 天井部：ハラ切り後回転ナデ	陶窯底か
31	26	47	SD401	須志器	杯蓋	(136)	2.0	つまみ桂 24	密	硬質	明青灰色 灰黑色	回転ナデ 天井部：回転ナデ後静止ナデ 天井部：ハラ切り後回転ナデ	陶窯底か
31	26	48	SD401	須志器	杯蓋	140	2.5	つまみ桂 21	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナデ 天井部：回転ナデ後静止ナデ 天井部：ハラ切り後回転ナデ	陶窯底か
31	26	49	SD401	須志器	杯蓋	134	2.3	つまみ桂 20	粗	硬質	明青灰色 明青灰色	回転ナデ 天井部：回転ナデ後静止ナデ 天井部：ハラ切り後回転ナデ	陶窯底か
31	26	50	SD401	須志器	杯蓋	(122)	29残	-	密	やや軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 天井部：回転ナデ後静止ナデ 天井部：ハラ切り後回転ナデ	陶窯底か
31	26	51	SD401	須志器	杯蓋	131	2.4	天井部厚 11.5	密	硬質	灰白色 灰黑色	回転ナデ 天井部：回転ナデ後静止ナデ 天井部：ハラ切り後回転ナデ	陶窯底か
31	26	52	SD401	須志器	杯蓋	(140)	2.2	天井部厚 (11.5)	やや粗	硬質	灰黑色 灰黑色	回転ナデ 天井部：回転ナデ後静止ナデ 天井部：ハラ切り後回転ナデ	陶窯底か
31	27	53	SD401	須志器	杯蓋	(140)	2.0	天井部厚 (12.0)	やや粗	硬質	灰白色 灰白色	回転ナデ 天井部：回転ナデ後静止ナデ 天井部：ハラ切り後回転ナデ	陶窯底か
31	27	54	SD401	須志器	杯身	(132)	4.6	(10.2)	密	硬質	灰白色 明青灰色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
31	27	55	SD401	須志器	杯身	(130)	4.9	8.4	やや粗	軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か 底部に板目直彌
31	27	56	SD401	須志器	杯身	125	4.3	7.9	密	硬質	灰黑色 灰黑色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
31	27	57	SD401	須志器	杯身	-	24残	(7.8)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナデ 天井部：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後回転ナデ	底部に板目直彌
31	27	58	SD401	須志器	杯身	(121)	4.2	(8.8)	やや粗	硬質	灰黑色 灰黑色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
31	27	59	SD401	須志器	杯身	(126)	4.0	(9.2)	やや粗	軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
31	27	60	SD401	須志器	杯身	133	4.4	8.9	やや粗	硬質	灰白色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
31	27	61	SD401	須志器	杯身	(120)	4.7	(7.2)	密	硬質	明青灰色 暗青灰色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
31	27	62	SD401	須志器	杯身	124	4.5	8.9	密	硬質	灰黑色 灰黑色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
31	27	63	SD401	須志器	杯身	(143)	5.9	8.8	密	硬質	青灰黑色 青灰黑色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
32	27	64	SD401	須志器	杯身	11.3	4.9	8.8	やや粗	軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
32	27	65	SD401	須志器	杯身	(120)	4.3	(9.1)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
32	27	66	SD401	須志器	杯身	(130)	3.9	(9.8)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
32	27	67	SD401	須志器	杯身	128	4.3	7.6	やや粗	軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
32	28	68	SD401	須志器	杯身	(126)	4.4	(8.9)	やや粗	硬質	灰白色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
32	28	69	SD401	須志器	杯身	128	4.6	7.0	中や粗	中や軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
32	28	70	SD401	須志器	杯身	(124)	4.4	7.4	密	小小軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	底部に板目直彌
32	28	71	SD401	須志器	広口壺	(19.2)	38残	-	密	硬質	灰黑色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	
32	28	72	SD401	須志器	壺	-	89残	(11.4)	やや粗	硬質	灰黑色 灰黑色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
32	28	73	SD401	須志器	高杯 杯	122	55残	-	やや粗	硬質	灰白色 暗青灰色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	外面にヘラによる後縁2条
32	28	74	SD401	須志器	高杯 脚	-	105残	(13.6)	密	やや軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	
32	28	75	SD401	須志器	高杯 脚	-	103残	(14.0)	密	硬質	暗青灰色 暗青灰色	回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 底部：ハラ切り後静止ナデ	陶窯底か
32	28	76	SD401	須志器	大甕	-	8.4残	-	密	硬質	灰黑色 灰白色	同心円支角で具瓶 ナデ 平行手すりナキ	
32	28	77	SD401	上製品	直井上	1.7	49残	0.4	孔詰	硬質	にぶい褐色 明褐色	端削り立ちとし、ナデ 乳孔部立ちとし、ナデ	
32	28	78	SD401	上製品	直井上	1.6	38残	0.5	孔詰	やや粗	にぶい褐色 明褐色	端削り立ちとし、ナデ 乳孔部立ちとし、ナデ	
32	28	79	SD401	石製品	砾石	14.6残	10.6	32	重	硬質	浅黄褐色 浅黄褐色	前オサキ、ナデ 前オサキ、ナデ	
32	28	80	SP2018	土器器	壺	(18.0)	149残	-	粗	硬質	明褐灰色 灰褐色	ヨリナヒ横ナデ 横ナデ	
32	29	81	SP3049	土器器	高杯	15.9	11.6	11.2	中や粗	硬質	淡褐色 褐色	丁寧なナデ 丁寧なナデ	
32	29	82	SP4002	須志器	高杯 杯	-	23残	-	密	硬質	灰白色 灰白色	ハケ月日ナデ 回転ナデ	
32	29	83	SP4002	上製品	トーチン	-	40残	-	密	硬質	浅黄褐色 浅黄褐色	前オサキ、ナデ 前オサキ、ナデ	
32	29	84	SP4024	須志器	杯蓋	(17.4)	22残	-	密	硬質	灰黑色 灰黑色	ロウナヒ横ナデ 天井部：回転ナデ後静止ナデ ロウナヒ横ナデ 天井部：ハラ切り後回転ナデ	陶窯底か
32	29	85	SP4001	土器器	瓶	-	62残	-	粗	やや軟質	褐色 にぶい褐色	ハケ日影ナデ ハケ日影ヘルアケズリ	
32	29	86	SP4082	須志器	壺	(36.2)	42残	-	密	硬質	灰黑色 黒色	回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ	内面全面に灰墨り 外に水の迹の濃い、墨を手取る
32	29	87	SP2016	土器器	壺	(7.5)	1.3	(5.4)	密	硬質	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ	
32	29	88	SP3016	土器器	杯	(124)	3.1	(5.5)	密	硬質	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ	
32	29	89	SP3016	瓦質土器	足柄	-	129残	-	中や粗	硬質	明褐色 陶器色	前オサキ後ナデ 前オサキ後ナデ	
32	29	90	SP3041	土器器	壺	(7.8)	1.2	(5.0)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ	
32	29	91	SP4032	土器器	壺	5.6	1.0	4.2	密	硬質	褐色 褐色	回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ	白色系
32	29	92	SP4062	土器器	壺	(8.2)	1.7	(5.5)	やや粗	やや軟質	回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ 足込み：回転ナデ後静止ナデ		

序 番 号	国 版 No.	出 土 場 所	種 別	器形	法量(cm)			黏 土	燒 成	色調(内) (外)	主な調査(内) (外)	備 考
					口徑 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
33 29 93	SP4076	土師器	瓶	(7.2)	1.3	(4.0)	密	硬質	にふく・橙色 にふく・橙色	回転ナダ 見込み部:回転ナダ後静止ナダ 回転ナダ 尾部:回転ナダ切り後静止ナダ		
33 29 94	SP4089	土器品	管状有溝土溝	直徑 2.0~2.3	1.9	0.4~0.5	密	硬質	浅黃褐色 浅黃褐色	指オサズ後ナダ 指オサズ後ナダ		
33 30 95	SP4049	木製品	底板	幅長 8.0cm	厚 0.7	0.7	密					柄杓の底板か
34 30 96	遺物収容箱	土師器	高杯飾	-	4.5cm	(13.8)	密	中小數貫	灰白色 灰白色	ハラケシリ後ナダ 横ナダ		
34 30 97	遺物収容箱	土師器	碗	-	4.6cm	(3.4)	密	やや數貫	にふく・淡褐色 にふく・淡褐色	偏い折子 上折子ナダ		
34 30 98	遺物収容箱	土師器	盤	底長 7.8cm	厚 2.9cm	1.3	密	硬質	にふく・淡褐色 にふく・淡褐色	無いハセ 指オサズナダ		
34 30 99	遺物収容箱	土師器	盤把手	底長 5.7cm	厚 2.6cm	0.8	粗	硬質	にふく・淡褐色 にふく・淡褐色	ハケ目ナダ 指オサズナダ		
34 30 100	遺物収容箱	頭忠器	杯蓋	(12.0)	1.5cm	-	密	硬質	灰白色 灰黄色	回転ナダ 天井部:回転ナダ後静止ナダ 回転ナダ 尾部:ヘラ切り後静止ナダ		
34 30 101	遺物収容箱	頭忠器	杯蓋	-	1.5cm	つまみ括 1.7	密	硬質	灰白色 灰白色	天井部:回転ナダ後静止ナダ 天井部:ヘラ切り後静止ナダ		
34 30 102	遺物収容箱	頭忠器	杯蓋	-	1.3cm	つまみ括 2.1	密	硬質	灰白色 灰黄色	天井部:回転ナダ後静止ナダ 天井部:ヘラ切り後回転ナダ		
34 30 103	遺物収容箱	頭忠器	杯蓋	(15.1)	1.1cm	-	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ 回転ナダ		
34 30 104	遺物収容箱	頭忠器	杯蓋	(13.3)	1.3cm	-	やや粗	硬質	灰白色 青褐色	回転ナダ 天井部:回転ナダ後静止ナダ 回転ナダ 天井部:ヘラ切り後回転ナダ	陶室底か	
34 30 105	遺物収容箱	頭忠器	杯身	-	2.9cm	(7.8)	密	硬質	青褐色 青褐色	回転ナダ 天井部:回転ナダ後静止ナダ 回転ナダ 天井部:ヘラ切り後回転ナダ		
34 30 106	遺物収容箱	頭忠器	杯身	-	3.3cm	(7.0)	密	中小數貫	灰白色 灰白色	回転ナダ 天井部:回転ナダ後静止ナダ 回転ナダ 天井部:ヘラ切り後回転ナダ		
34 30 107	遺物収容箱	頭忠器	杯身	-	2.7cm	(10.6)	やや粗	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ 天井部:回転ナダ後静止ナダ 回転ナダ 天井部:ヘラ切り後回転ナダ	陶室底か	
34 30 108	遺物収容箱	頭忠器	杯身	-	3.7cm	(8.0)	やや粗	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ 底部:ヘラ切り後回転ナダ		
34 30 109	遺物収容箱	頭忠器	杯身	-	2.4cm	7.0	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ 尾部:ヘラ切り後本調型 回転ナダ 尾部:ヘラ切り後回転ナダ		
34 30 110	遺物収容箱	頭忠器	杯身	(12.1)	4.2	(6.8)	密	硬質	灰白色 灰白色	見込み:回転ナダ後静止ナダ 回転ナダ 尾部:ヘラ切り後回転ナダ	陶室底か	
34 30 111	遺物収容箱	頭忠器	杯身	(13.2)	3.8	(9.0)	密	軟質	灰白色 青褐色	見込み:回転ナダ後静止ナダ 回転ナダ 尾部:ヘラ切り後回転ナダ	陶室底か	
34 30 112	遺物収容箱	頭忠器	高杯	-	5.6cm	-	密	硬質	灰白色 青褐色	回転ナダ 尾部:回転ナダ後静止ナダ 回転ナダ 尾部:ヘラ切り後回転ナダ	脚部にヘラによる沈縫1条	
34 31 113	遺物収容箱	頭忠器	高杯飾	-	5.4cm	-	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ フタナダ	脚部にヘラによる沈縫1条	
34 31 114	遺物収容箱	頭忠器	高杯飾	-	2.2cm	(11.2)	密	中小數貫	明暗灰色 明暗灰色	回転ナダ 回転ナダ		
34 31 115	遺物収容箱	頭忠器	高杯	-	4.3	-	密	硬質	明暗灰色 明暗灰色	回転ナダ 回転ナダ		
34 31 116	遺物収容箱	頭忠器	壺	-	2.9cm	-	密	硬質	灰白色 赤褐色	平行文タキ、同心円文当柱痕をヘラで消し ロクロタキ回転ナダ	外面に沈縫、後柱文状の斜突文	
34 31 117	遺物収容箱	頭忠器	壺	長颈壺	-	4.8cm	-	密	硬質	灰白色 黄褐色	回転ナダ 回転ナダ	
34 31 118	遺物収容箱	頭忠器	壺	(10.2)	3.4cm	-	密	硬質	黄褐色 灰白色	回転ナダ 同心円文当柱痕をヘラで消し 回転ナダ 尾部:平行文タキ回転ナダ	陶室底か	
34 31 119	遺物収容箱	頭忠器	壺	-	3.8cm	7.0	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ 回転ナダ	外面に縫下部に沈縫と突審 5条の直線文、8条の波状文を描文	
34 31 120	遺物収容箱	頭忠器	壺	(18.0)	4.6cm	-	やや粗	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ 同心円文当柱痕をヘラで消し 回転ナダ 尾部:平行文タキ回転ナダ		
34 31 121	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	(11.0)	1.2cm	-	密	硬質	オリーブ灰 灰白色	回転ナダ 縦輪 回転ナダ:縦輪	頭忠質 近江庄か	
34 31 122	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	-	1.2cm	(5.8)	密	中小數貫	オリーブ灰 灰白色	回転ナダ:縦輪 回転ナダ:縦輪	土師質 トラン日跡 近江庄か	
34 31 123	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	-	1.6cm	(7.6)	密	中小數貫	灰白色 灰褐色	回転ナダ 縦輪 回転ナダ:縦輪	土師質 トラン日跡 近江庄あるいは近防所	
34 31 124	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	-	1.7cm	(7.4)	密	中小數貫	灰白色 浅黃色	回転ナダ 縦輪 回転ナダ:縦輪	土師質 近江庄か	
34 32 125	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	-	1.7cm	(7.0)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ 縦輪 回転ナダ:高台内へラケシリ 施釉	土師質 見込みに沈縫1条進 る 郡都	
34 32 126	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	-	1.6cm	(6.8)	密	硬質	浅黃色 明オリーブ灰色	回転ナダ:施釉 明オリーブ灰色	土師質 京都府か	
34 32 127	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	-	5.5cm	-	密	中小數貫	褐色 褐色、暗オリーブ灰色	横ナダ 横ナダ:施釉	土師質 長門底か 1色濃い2色混じる	
34 32 128	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	-	2.5cm	(15.4)	密	中小數貫	灰白色 オリーブ灰色	横ナダ 横ナダ:施釉	土師質 長門底か	
34 32 129	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	ホ	-	1.4cm	-	やや粗	やや粗 にふく・黃褐色	回転ナダ 施釉 回転ナダ:施釉	土師質 長門底か	
34 32 130	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	ホ	-	1.7cm	-	密	硬質 オリーブ灰色	回転ナダ 施釉 回転ナダ:施釉	頭忠質 近江庄か	
34 32 131	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	ホ	-	1.6cm	-	やや粗	灰白色 オリーブ灰色	回転ナダ 施釉 回転ナダ:施釉	土師質 長門底か	
34 32 132	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	ホ	-	2.0cm	-	密	中小數貫 オリーブ灰色	横ナダ 横ナダ:施釉	土師質 長門底か 133と同一個体か	
34 32 133	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	ホ	-	3.9cm	-	密	中小數貫 深褐色	横ナダ 横ナダ:施釉	土師質 長門底か	
34 32 134	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	ホ	-	2.2cm	-	密	中小數貫 オリーブ灰色	回転ナダ 施釉 回転ナダ:施釉	土師質 長門底か	
34 32 135	遺物収容箱	縦輪陶壷	壺	ホ	-	1.3cm	-	やや粗	やや粗 オリーブ灰色	回転ナダ 施釉 回転ナダ:施釉	土師質 長門底か	
34 32 136	遺物収容箱	瓦器	壺	(13.6)	3.4cm	-	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ後ヘミガキ	口縁内向外に露赤吸着处理 動力、色済む18cm長い	
34 33 137	遺物収容箱	瓦器	壺	(15.2)	3.5cm	-	密	硬質	黄褐色 灰白色、灰白色	回転ナダ 回転ナダ	口縁部分外に露赤吸着处理	
34 33 138	遺物収容箱	瓦器	壺	-	1.1cm	(4.0)	やや粗	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ後手打筋文 指オサエ後ナダ	内外面に灰赤吸着处理 和朝型	

種別	國版	番号	場所	種別	器機	法量(cm)			底土	底成	色調(内 外)	主な調整(内 外)	備考
						口径 (復元値)	高さ (残存倉)	底径 (復元値)					
35	33	129	遺物収容庫	土器部	瓶	7.2	8.9	5.8	密	硬質	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナット後静止ナダ 底部：回転系切り後ナダ	
35	33	140	遺物収容庫	土器部	瓶	7.3	1.5	5.1	粗	硬質	褐色 褐色	回転ナット後静止ナダ 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	
35	33	141	遺物収容庫	土器部	瓶	(7.1)	1.1	(6.0)	今や粗	硬質	淡褐色 にぶい褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	
35	33	142	遺物収容庫	土器部	瓶	-	4.1残	(7.0)	密	硬質	灰白色 灰黃褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	柱状高台類
35	33	143	遺物収容庫	土器部	瓶	-	3.5残	(5.6)	密	硬質	浅黃褐色 浅黃褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	柱状高台類
35	33	144	遺物収容庫	土器部	瓶	-	3.1残	(5.3)	密	硬質	にぶい黄褐色 浅黃褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転ナット	高台付属
35	33	145	遺物収容庫	土器部	瓶	-	2.6残	(8.4)	今や粗	硬質	浅黃褐色 浅黃褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	
35	33	146	遺物収容庫	土器部	瓶	-	2.7残	(6.7)	密	硬質	浅黃褐色 浅黃褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	
35	33	147	遺物収容庫	土器部	瓶	-	2.1残	(6.6)	密	硬質	浅黃褐色 浅黃褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	
35	33	148	遺物収容庫	土器部	瓶	-	2.2残	(5.9)	密	硬質	浅褐色 褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	
35	33	149	遺物収容庫	土器部	瓶	-	1.7残	(6.8)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	白色系
35	33	150	遺物収容庫	土器部	瓶	-	2.3残	(6.4)	今や軟質	硬質	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	
35	33	151	遺物収容庫	土器部	瓶	-	2.5残	7.0	密	今や軟質	灰黑色 灰黑色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	
35	33	152	遺物収容庫	土器部	杯	-	1.9残	4.9	密	硬質	浅黃褐色 褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り	
35	33	153	遺物収容庫	土器部	杯	-	2.6残	5.6	密	硬質	灰褐色 浅黃褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	
35	33	154	遺物収容庫	土器部	杯	-	3.7残	6.1	密	硬質	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	
35	34	155	遺物収容庫	土器部	杯	(12.2)	3.9	5.2	今や粗	硬質	褐色 褐色	回転ナット 回転ナット底部：回転系切り後ナダ	
35	34	156	遺物収容庫	土器部	杯	(15.1)	5.9	6.0	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナット 見込み：回転ナット後静止ナダ	白色系
35	34	157	遺物収容庫	青磁	瓶	(10.2)	2.0残	-	今や粗	硬質	灰オリーブ色 灰白色	回転ナット後側日本、花文を施す 回転ナット後ラミズリ	同安窯系
35	34	158	遺物収容庫	青磁	瓶	-	1.1残	(5.2)	今や粗	硬質	灰オリーブ色 灰白色	回転ナット後側日本、花文を施す	同安窯系
35	34	159	遺物収容庫	青磁	瓶	-	2.3残	-	今や粗	硬質	灰オリーブ色 灰オリーブ色	回転ナット 回転ナット後ラミズリ	福建省
35	34	160	遺物収容庫	青磁	瓶	(14.8)	4.6残	-	今や粗	硬質	灰オリーブ色 灰オリーブ色	回転ナット後施文 回転ナット	龍泉窯系 茶葉文
35	34	161	遺物収容庫	青磁	瓶	(16.6)	3.0残	-	密	硬質	灰オリーブ色 灰オリーブ色	回転ナット後施文 回転ナット	龍泉窯系 分割繩
35	34	162	遺物収容庫	青磁	瓶	(15.0)	5.1残	-	密	硬質	灰オリーブ色 灰オリーブ色	回転ナット後施文 回転ナット	龍泉窯系 緩通有文
35	34	163	遺物収容庫	青磁	瓶	(15.0)	3.9残	-	密	硬質	灰黄色 灰黄色	回転ナット後施文	龍泉窯系 緩通有文
35	34	164	遺物収容庫	青磁	瓶	(14.0)	3.0残	-	密	硬質	灰黄色 灰黄色	回転ナット後施文 回転ナット	龍泉窯系 緩通有文
35	34	165	遺物収容庫	青磁	瓶	-	3.8残	5.5	密	硬質	にぶい黄色 にぶい黄色	回転ナット後施文 底部：ヘラケズリ	龍泉窯系 緩通有文
35	35	166	遺物収容庫	青磁	瓶	-	1.8残	4.9	密	硬質	オリーブ色 オリーブ色	回転ナット後施文 底部：ヘラケズリ	龍泉窯系 緩通有文
35	35	167	遺物収容庫	青磁	瓶	(16.2)	4.2残	-	密	硬質	オリーブ色 オリーブ色	回転ナット後施文	龍泉窯系 通透文
35	35	168	遺物収容庫	青磁	瓶	(16.2)	5.9残	5.2	密	硬質	オリーブ色 オリーブ色	回転ナット後施文 底部：ヘラケズリ	龍泉窯系 通透文
35	35	169	遺物収容庫	青磁	瓶	(13.6)	22残	-	密	硬質	オリーブ色 オリーブ色	回転ナット後施文 回転ナット後施文	同安窯系小
35	35	170	遺物収容庫	青磁	瓶	(13.6)	2.1残	-	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナット 回転ナット	福建省
35	35	171	遺物収容庫	青磁	瓶	(15.3)	3.9残	-	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナット 回転ナット	龍泉窯系
35	35	172	遺物収容庫	青磁	瓶	-	4.0残	6.1	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナット 回転ナット	龍泉窯系 通透文
35	35	173	遺物収容庫	白磁	瓶	(15.0)	2.0残	-	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナット 回転ナット	福建省
35	35	174	遺物収容庫	白磁	瓶	(16.3)	6.2残	(6.4)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナット 回転ナット	福建省
35	35	175	遺物収容庫	白磁	瓶	(16.6)	3.9残	-	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナット 回転ナット	福建省
35	35	176	遺物収容庫	白磁	瓶	(16.2)	4.3残	-	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナット 回転ナット	福建省
35	36	177	遺物収容庫	白磁	詰	-	3.6残	6.8	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナット 回転ナット	福建省
36	36	178	遺物収容庫	瓦質土器	罐	(21.0)	6.5残	-	今や粗	硬質	灰白色 灰白色	横ナット、ハケ目後ナダ 横ナット、ハケ目後ナダ	外面に糊付着
36	36	179	遺物収容庫	瓦質土器	罐	(24.6)	6.8残	-	粗	硬質	暗灰色 暗灰色	ハケ目後ナダ 横ナット、ハケ目後ナダ	外面に糊付着
36	36	180	遺物収容庫	瓦質土器	罐	(20.4)	5.0残	-	今や粗	硬質	暗灰色 暗灰色	ハケ目後ナダ 横ナット、ハケ目後ナダ	外面に糊付着
36	36	181	遺物収容庫	土師質土器	羽釜	(24.0)	4.0残	-	密	今や軟質	赤褐色 赤褐色	横ナット 横ナット	同安窯系
36	36	182	遺物収容庫	瓦質土器	羽釜	(25.5)	6.2残	-	密	硬質	暗灰色 暗灰色	横ナットナダ 横ナットナダ	同安窯系
36	36	183	遺物収容庫	瓦質土器	羽釜	(30.6)	6.3残	-	密	硬質	オリーブ黒色 灰白色	ハケ目後ナダ 横ナット、ハケ目後ナダ	
36	36	184	遺物収容庫	土師質土器	羽釜	(18.4)	5.3残	-	今や粗	硬質	灰白色 灰白色	ハケ目後ナダ 横ナット、ハケ目後ナダ	
36	36	185	遺物収容庫	土師質土器	羽釜	(22.5)	3.5残	-	今や粗	硬質	暗灰色 暗灰色	同安窯ナダ 同安窯ナダ	

解説	国版	No.	出土場所	種別	器形	法量(cm)			黏土	焼成	色調(内)	主な調査(内)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
36	36	186	遺物包含層	瓦質土器	羽釜	(29.5)	6.2残	-	やや粗	中小數質	浅黃褐色 淡黃褐色	ハケ日後ナデ 指オサエ、ナデ日後ナデ	
36	36	187	遺物包含層	瓦質土器	羽釜	(25.0)	3.0残	-	密	中小數質	暗褐色 灰褐色	ハケ日後ナデ 指オサエ、ナデナデ	
36	37	188	遺物包含層	瓦質土器	足踏鉢	-	16.5残	-	密	細質	灰白色 灰白色	指オサエ、後ナデ 指オサエ、後ナデ	
36	37	189	遺物包含層	瓦質土器	足踏鉢	-	16.1残	-	密	細質	明黃褐色 褐色	指オサエ、後ナデ 指オサエ、後ナデ	
36	37	190	遺物包含層	瓦質土器	足踏鉢	-	9.9残	-	密	細質	黑色 深褐色	指オサエ、後ナデ 指オサエ、後ナデ	
36	37	191	遺物包含層	瓦質土器	足踏鉢	-	13.7残	-	密	中小數質	青灰色 明黃褐色	指オサエ、後ナデ 指オサエ、後ナデ	太く直線的に伸びる、伊予系 か
36	37	192	遺物包含層	瓦質土器	小型鉢	(8.8)	2.2	(9.0)	やや粗	硬質	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	板丘庄庭
36	37	193	遺物包含層	瓦質土器	壺	-	5.3残	9.6	密	硬質	にむし黃褐色 にむし黃褐色	指オサエ、ハケ日後ナデ ハケ日後ナデ	板丘庄庭
36	37	194	遺物包含層	瓦質土器	大甕	-	6.3残	-	密	硬質	暗褐色 暗褐色	横ナデ、ラウダ 横ナデ、熟子日タキ	
36	37	195	遺物包含層	瓦質土器	盆鉢	-	6.4残	-	密	硬質	灰白色 灰白色	ナデ後ナケ、羅目施文 指オサエ、後ナデ	
36	37	196	遺物包含層	土師質 土器	盆鉢	(25.6)	5.0残	-	やや粗	中小數質	灰白色 灰白色	ハケ日後ナデ 指オサエ、ナデ後ハケ	
37	38	197	遺物包含層	陶器	大甕	-	8.4残	-	密	細質	灰黃褐色 にむし黃褐色	横ナデヘルナナ 横ナデ	備前燒
37	38	198	遺物包含層	瓦	平瓦	縦長 6.4残	厚 19	密	やや粗	中小數質	表: 明黃褐色 裏: 淡黃色	布目張 縦目タキキ	
37	38	199	遺物包含層	土鍋品	椎狀土鍋	1.1	5.6残	0.3	孔徑	硬質	淡黃色 淡黃色	表: 濃淡黄褐色落とし、ナデ 裏: 穴孔ケズリ、ナデ	
37	38	200	遺物包含層	土鍋品	椎狀土鍋	1.5	5.6残	0.4	孔徑	硬質	褐色 褐色	表: 濃淡黄褐色落とし、ナデ 裏: 穴孔ケズリ、ナデ	赤色顔料微布
37	38	201	遺物包含層	土鍋品	椎狀土鍋	1.2	4.1残	0.4	孔徑	中小數質	淡黃褐色 淡黃褐色	表: 濃淡黄褐色落とし、ナデ 裏: 穴孔ケズリ、ナデ	赤色顔料微布
37	38	202	遺物包含層	土鍋品	椎狀土鍋	1.4	3.8残	0.4	孔徑	中小數質	暗褐色 暗褐色	表: 濃淡黄褐色落とし、ナデ 裏: 穴孔ケズリ、ナデ	
37	38	203	遺物包含層	土鍋品	椎狀土鍋	1.6	3.6残	0.5	孔徑	軟質	淡黃色 淡黃色	表: 濃淡黄褐色落とし、ナデ 裏: 穴孔ケズリ、ナデ	赤色顔料微布
37	38	204	遺物包含層	土鍋品	椎狀土鍋	1.5	5.2残	0.5	孔徑	中小數質	ナリーパ系色 淡黃褐色	表: 濃淡黄褐色落とし、ナデ 裏: 穴孔ケズリ、ナデ	
37	38	205	遺物包含層	土鍋品	椎狀土鍋	1.7	4.5残	0.4	孔徑	中小數質	にむし黃褐色 にむし黃褐色	表: 濃淡黄褐色落とし、ナデ 裏: 穴孔ケズリ、ナデ	
37	38	206	遺物包含層	土製品	有溝土器	縦長 5.8残	3.2残 3.2	2.2	密	硬質	淡黃褐色 淡黃褐色	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	重量63.9g
37	38	207	遺物包含層	土製品	縫錐形 管状土器	縦長 4.5残	孔徑 2.7	0.8	孔徑	軟質	灰白色 青褐色	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	重量26.9g 赤色顔料微布
37	38	208	遺物包含層	土製品	縫錐形 管状土器	縦長 4.3	孔徑 1.7	0.5	孔徑	硬質	灰白色 灰白色	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	重量11.5g
37	38	209	遺物包含層	土製品	縫錐形 管状土器	縦長 4.1	孔徑 1.5	0.5	孔徑	中小數質	にむし黃褐色 灰黃褐色	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	重量7.8g
37	38	210	遺物包含層	土製品	縫錐形 管状土器	縦長 4.4	孔徑 1.5	0.6	孔徑	中小數質	淡黃褐色 淡黃褐色	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	重量8.0g
37	39	211	遺物包含層	土製品	縫錐形 管状土器	縦長 4.7残	孔徑 1.5	0.5	孔徑	軟質	にむし黃褐色 にむし黃褐色	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	重量7.9g
37	39	212	遺物包含層	土製品	縫錐形 管状土器	縦長 4.2	孔徑 1.4	0.5	孔徑	硬質	灰白色 灰白色	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	重量7.1g
37	39	213	遺物包含層	土製品	縫錐形 管状土器	縦長 5.4	孔徑 1.3	0.4	孔徑	中小數質	黒褐色 黒褐色	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	重量8.5g
38	39	214	遺物包含層	石製品	磨削石斧	縦長 6.5残	厚 4.7残	2.0	重	重	重 重		玄武岩か
38	39	215	遺物包含層	石製品	磨片	縦長 1.8残	厚 0.9	0.9	重	重	重 重		優良産黒曜石 直径2cmの気泡孔
38	39	216	遺物包含層	石製品	砾石	縦長 5.9残	厚 4.8残	1.4	重	重	54.7		凝灰岩
38	39	217	遺物包含層	石製品	砾石	縦長 8.1	厚 4.3	0.9	重	重	41.0		凝灰岩か
38	39	218	遺物包含層	石製品	砾石	縦長 5.0残	厚 6.3残	2.1残	重	重	60.9		滑石
38	39	219	遺物包含層	石製品	剥修粒	縦長 3.6	厚 2.7	0.9	孔徑	重	25.1 0.2		滑石
38	40	220	遺物包含層	鉄製品	釘	縦長 2.9残	厚 0.5	0.5	重	重	3.1		
38	40	221	遺物包含層	鉄製品	釘	縦長 4.1残	厚 0.8	0.7	重	重	4.7		
38	40	222	遺物包含層	鉄製品	釘	縦長 5.4残	厚 1.3	1.0	重	重	9.9		
38	40	223	遺物包含層	鉄製品	刀子	縦長 2.0	厚 4.7残	0.3	重	重	8.4		
38	40	224	遺物包含層	鋼全糸	縫合針	縦長 2.9残	厚 3.8残	0.1 ~ 0.7	孔徑	重	10.8		
38	40	225	遺物包含層	銅貨	不明	縦長 2.0	0.17	0.4	孔徑	重	2.3		銅含有量少なく、鉛含有量多い
38	40	226	遺物包含層	銅貨	天保元年款	縦長 2.5	0.08	0.7	孔徑	重	1.4		北宋 1023年鑄造
38	40	227	遺物包含層	銅貨	祐安元年	縦長 2.4	0.15	孔徑	重				光緒年山形に成形
38	40	228	遺物包含層	本銀品	不明	縦長 9.6残	厚 2.6	0.6	孔徑	重	3.0		
40	229	SD-401		銀洋		縦長 8.5	厚 11.4	8.3	重	40.47			純銀洋銀

V 中ヶ原地区調査の成果

1 遺構

中ヶ原地区は、向条谷地区の北西方向約500mに位置し、今回の調査区では最も面積が広い。遺跡は、一部に谷筋を含み、南から北に伸びる丘陵上に展開する。標高は、南側で約24.3m、北側で約15.7mである。調査区東側から坂を下った岩船と呼ばれるところが船着場であったと伝えられることから、かつては海水がこの辺りまで湾入していたことがうかがえる。また、表土除去の際、谷筋を埋めるための大規模な切土や盛土といった土木工事や、小規模な地形の改変も確認された。

今回の調査では、柱穴を約1100個検出し、掘立柱建物を3棟復元した。その他にも、堅穴建物3棟、土坑38基、炉1基、溝6条、性格不明遺構3基、谷筋からは遺物包含層を検出した。遺物が出土した柱穴は、南側に集中しているものの96個と1割にも満たず、削平の規模が想像以上であることがうかがえる。遺構面は1面で、集落としての営みが確認できた時期は古墳時代と中世後半である。遺物としては、谷筋の遺物包含層から弥生時代終末期の土器が出土している。また、調査区南側西端の標高の高い地点から近世窯で使用したハマが採集されたが、いずれも同時期の遺構は確認されていない。調査区周辺は、中世後半のある時期に耕作地として利用され始め、現在に至っているものと考えられる。以下、主な遺構について取り上げる。

(1) 堅穴建物

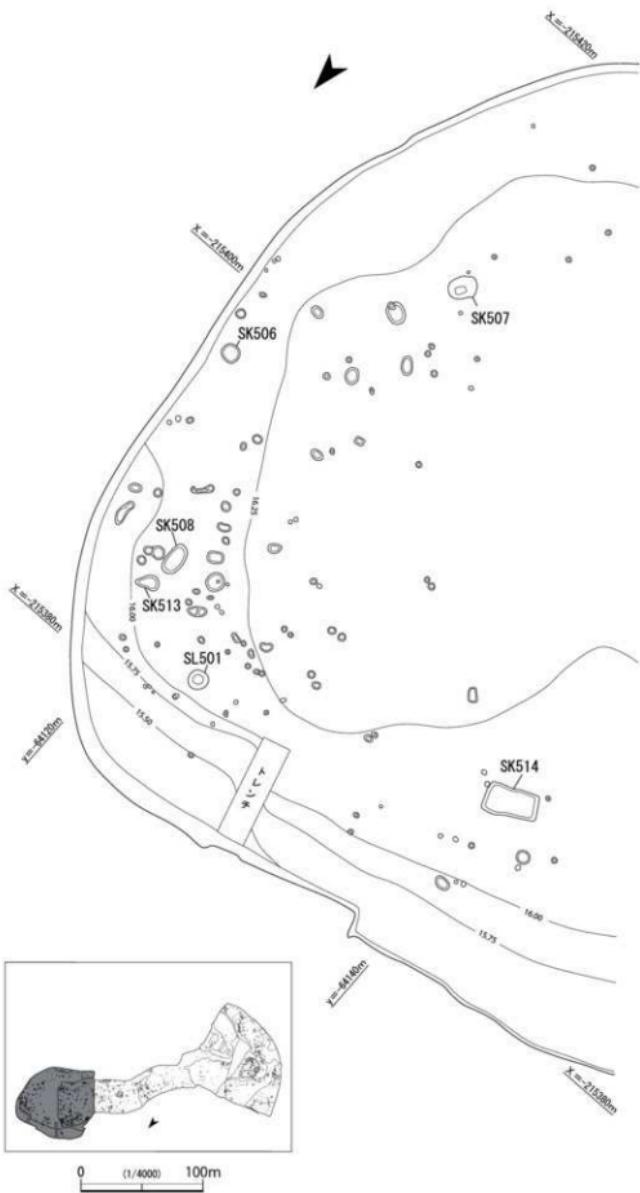
今回の調査では、強く削平を受け遺物量の非常に少ない調査区中央付近で、3棟の堅穴建物が検出された。

SI601（第43図 図版44） 調査区中央付近に位置する方形の堅穴建物で、北東隅をSK607に切られる。東西に3.9m、南北に4.0m、床面積15.6m²を測る。主柱穴は4本で、床面からの深さは25～42cmである。残存壁高は西側で15cmである。周溝が壁下を巡り、幅約13cm、深さ約5cmを測る。床面中央には径65cm、深さ20cmの土坑があり、溝で周溝と連結している。用途については、住居内の排水を目的とした溜め井、埋土に炭を含むことから炉などが考えられるが、不明である。出土遺物は、土師器碗（1～3）、台付鉢（4）、甕（5～7）、ミニチュア土器（8）、器台（9）、椀把手（10）、ヤリガンナ（11）などである。出土遺物から、5世紀前半の建物と考えられる。

SI602・SI603（第44図 図版45） 調査区中央南端で検出された建替の堅穴建物である。SI602は全体の1/6程度の検出であるが、床面からの深さが28cmの主柱穴を1個検出した。出土遺物はないが、SI601と方向性が一致すること、2棟の距離が11m程度であることなどから同時期の住居の可能性がある。SI603はSI602廃絶後に建て替えられた住居で、全体の1/2程度の検出であるが、一辺が3.7m、床面積13.69m²の方形の堅穴建物に復元される。主柱穴4個のうち2個が検出され、床面からの深さ20～32cmを測る。残存壁高は西側で37cmと比較的の残りがよく、建替の際床面を15cm程度嵩上げしている。ただ、出土した須恵器の高杯（12）から、SI602の埋没後建替までに空白の時間の存在が判明した。

(2) 掘立柱建物

今回の調査で復元した3棟は、いずれも床面積が20m²未満の小規模な建物である。調査区の南側で、





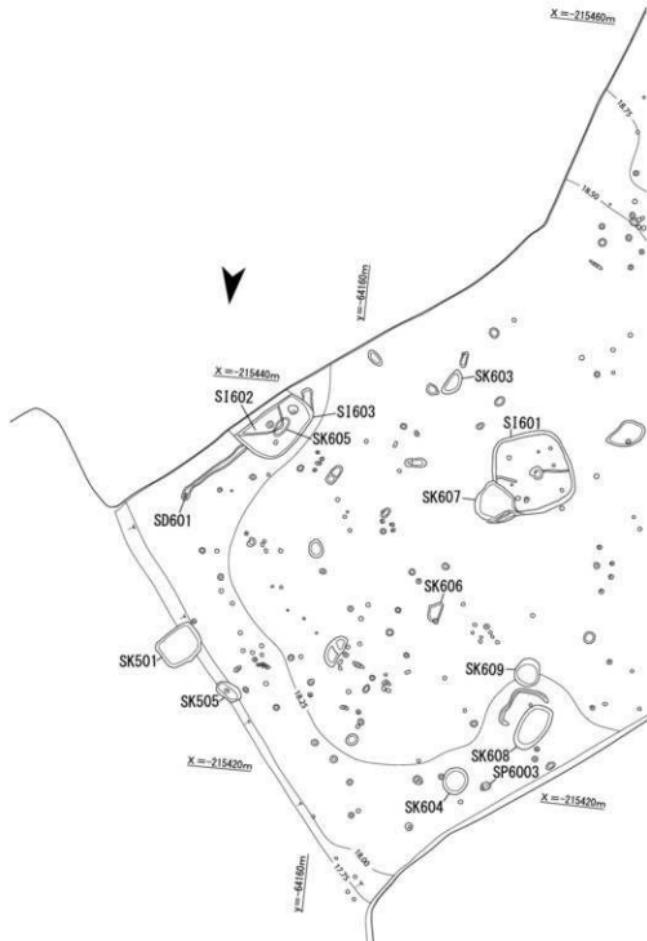
第39図 中ヶ原地区北部遺構配置図

谷状地形を囲むように検出された。住居は、地形や土地の利用状況を反映していると思われ、棟方向や方向性に共通性は認められなかった。

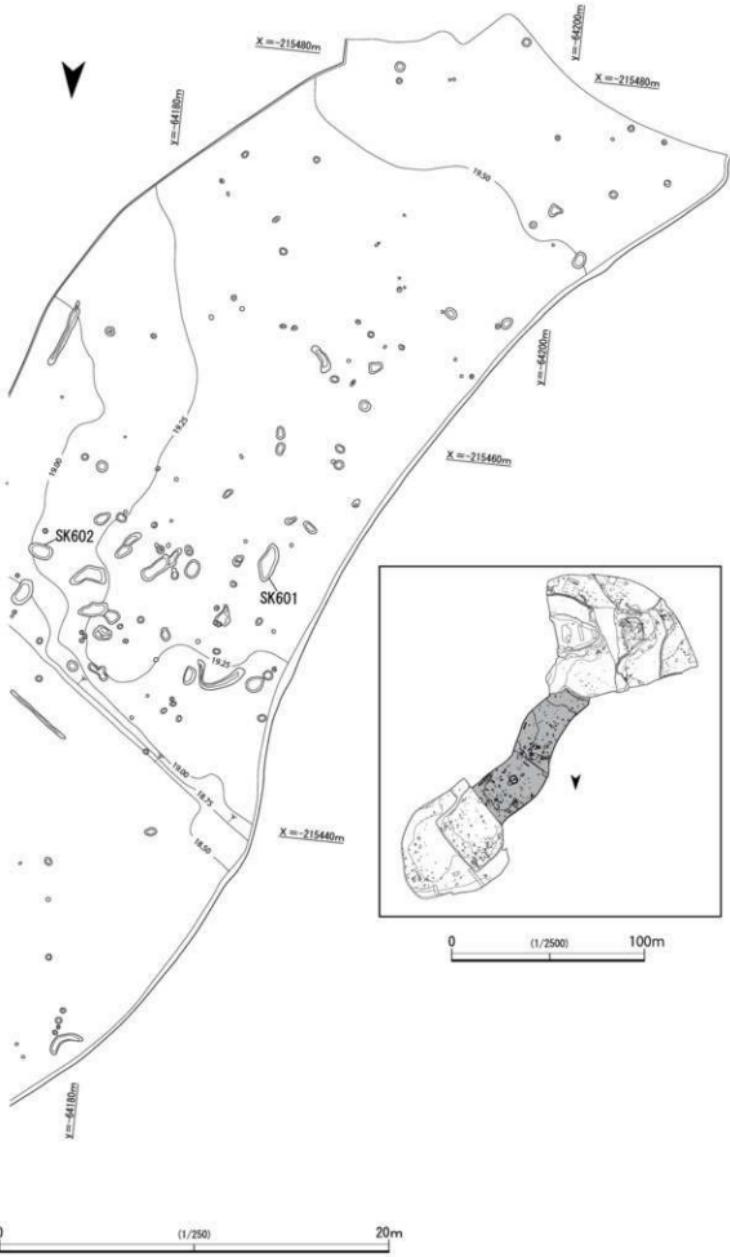
SB701（第45図 図版45） 調査区南側に位置する建物で、桁行2間（5.60m）×梁行1間（3.02m）、床面積16.91m²を測る。棟方向はN31°Wである。SP7021・SP7026から土師器皿（13・14）、その他の柱穴からも瓦質土器や土師器の土器片が出土した。出土遺物から中世後半の建物と考えられる。

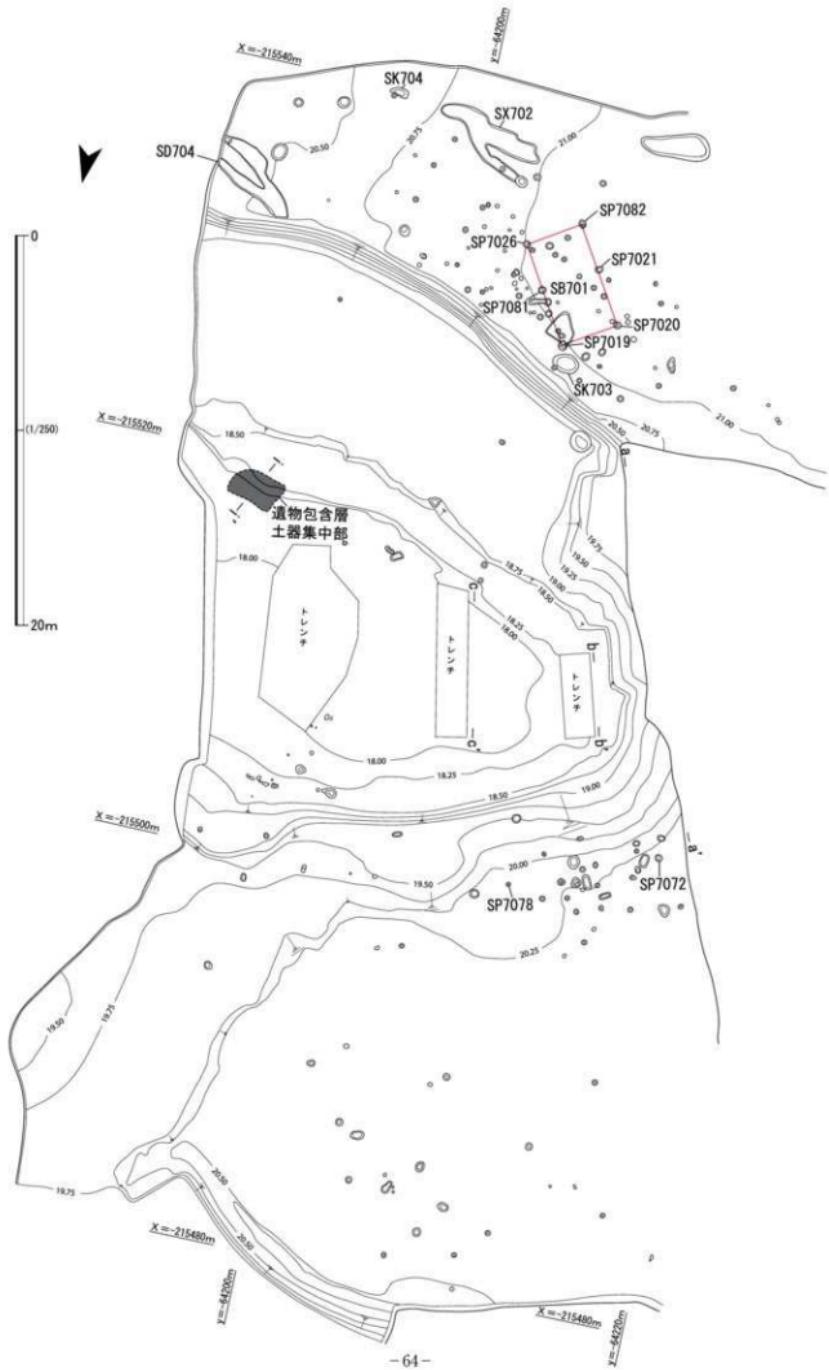
SB702（第45図 図版46） 調査区南端に位置する小規模な建物で、桁行2間（3.19m）×梁行1間（1.86m）、床面積5.93m²を測る。棟方向はN18°Wである。出土遺物はなく、時期は不明である。

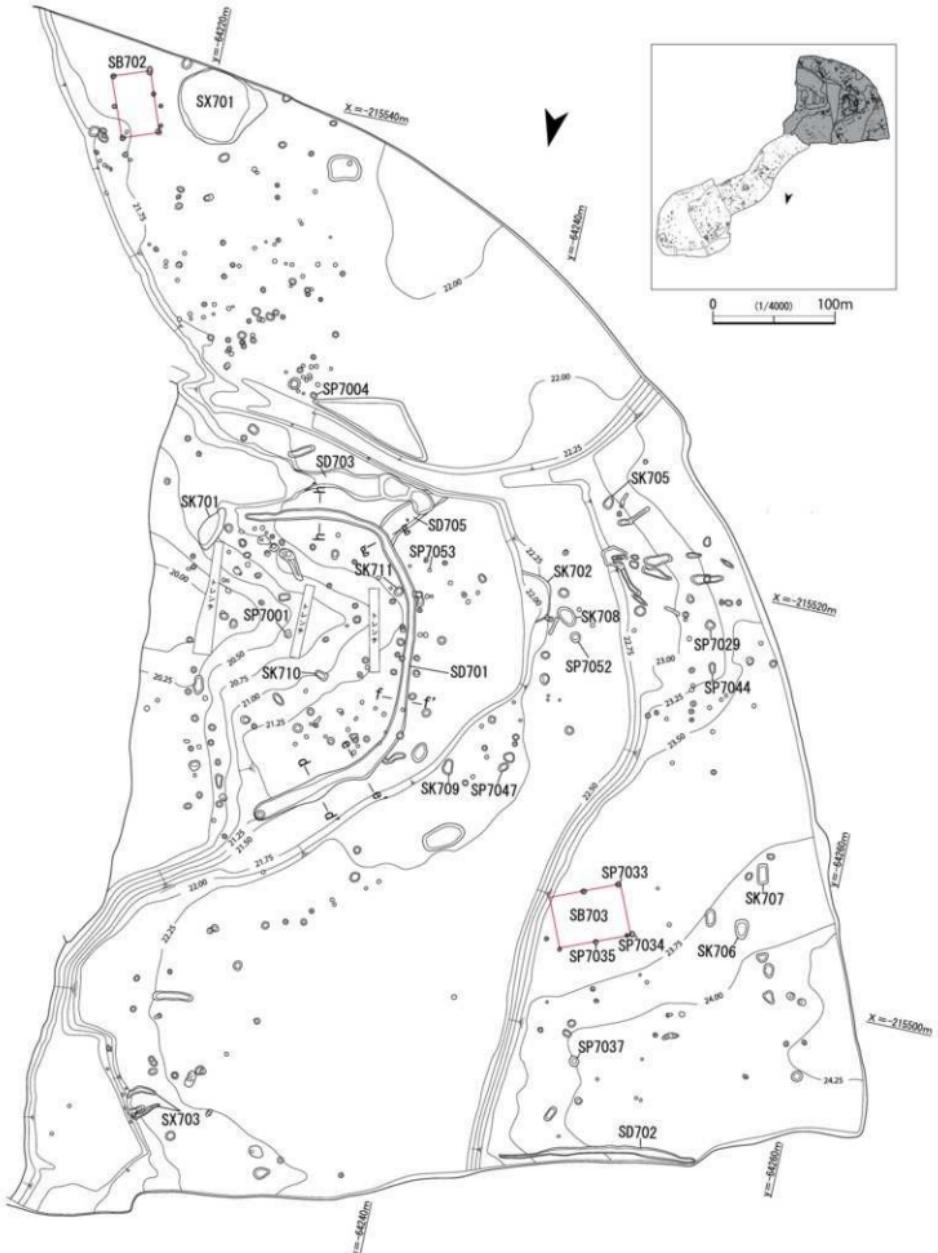
SB703（第45図 図版46） 調査区南側に位置する建物で、桁行2間（3.84m）×梁行1間（2.66m）、



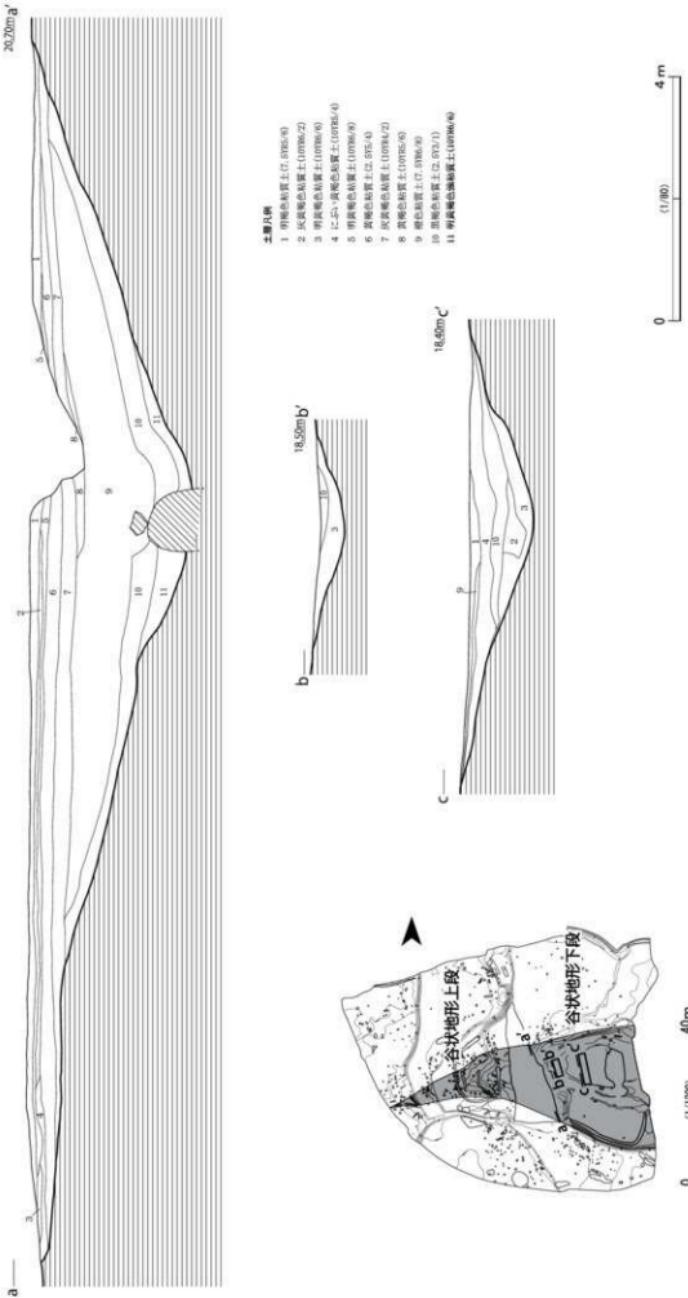
第40図 中ヶ原地区中央部遺構配置図



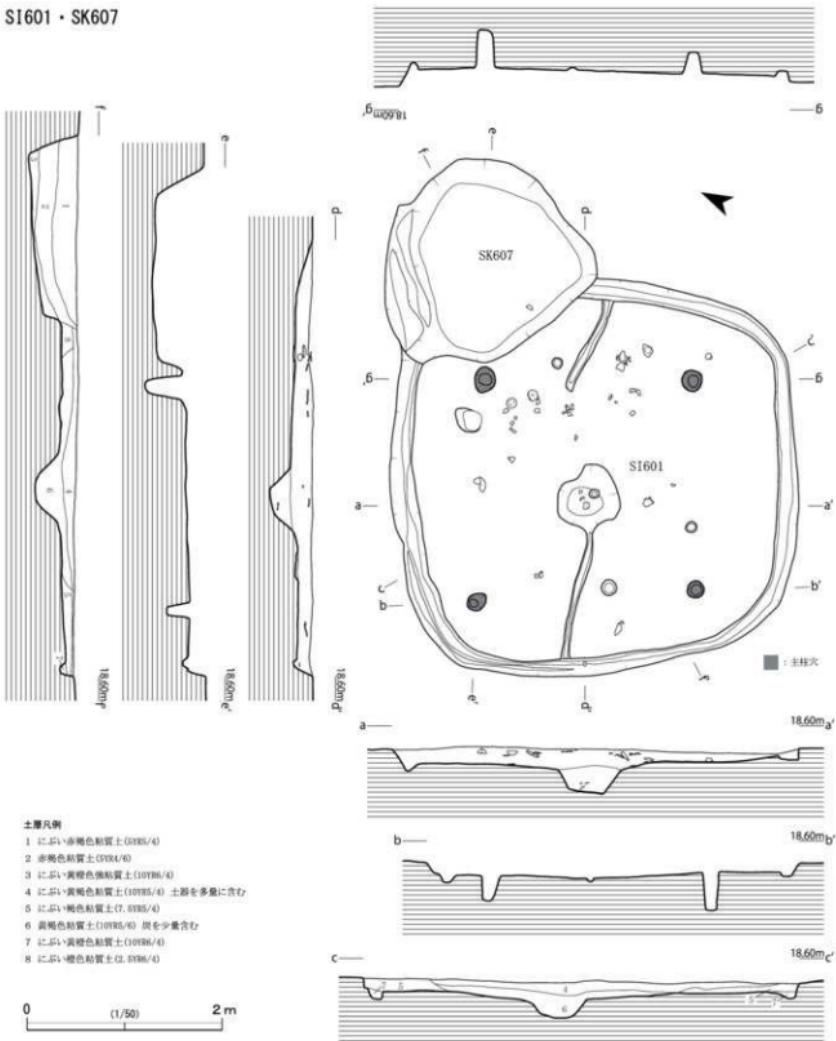




第41図 中ヶ原地区南部遺構配置図



第42圖 南部谷状地形土層斷面測量圖

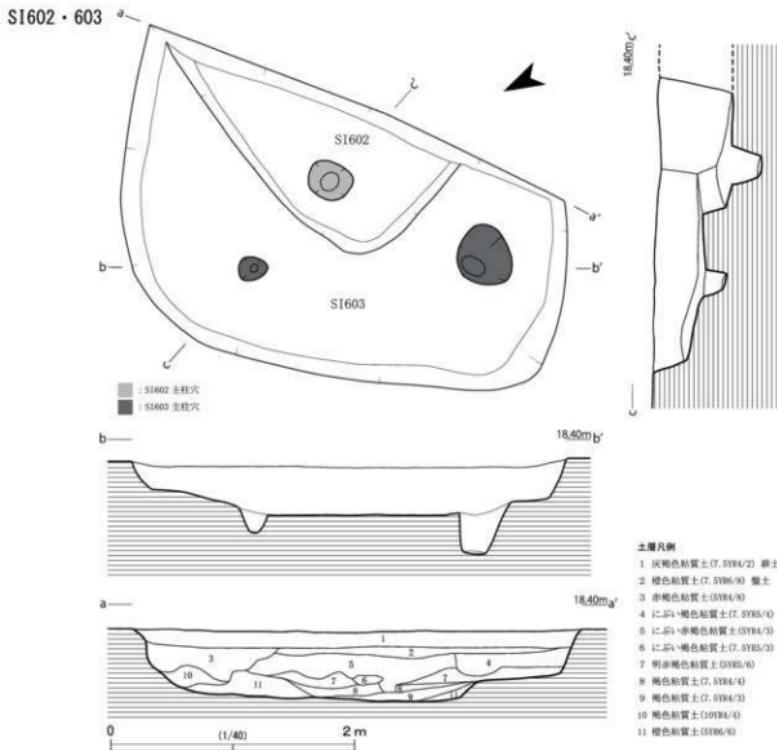


第43図 SI601・SK607 実測図

床面積10.21m²を測る。棟方向はN66° Eである。SP7034・SP7035から瓦質土器足鍋（15）、SP7033から瓦質土器捕鉢（16）、その他の柱穴からも瓦質土器や土師器の土器片が出土した。出土遺物から中世後半の建物と考えられる。

（3）土坑

今回の調査では、38基の土坑が検出された。長軸で1.5mを超えるものが10基、1.0m未満のものが



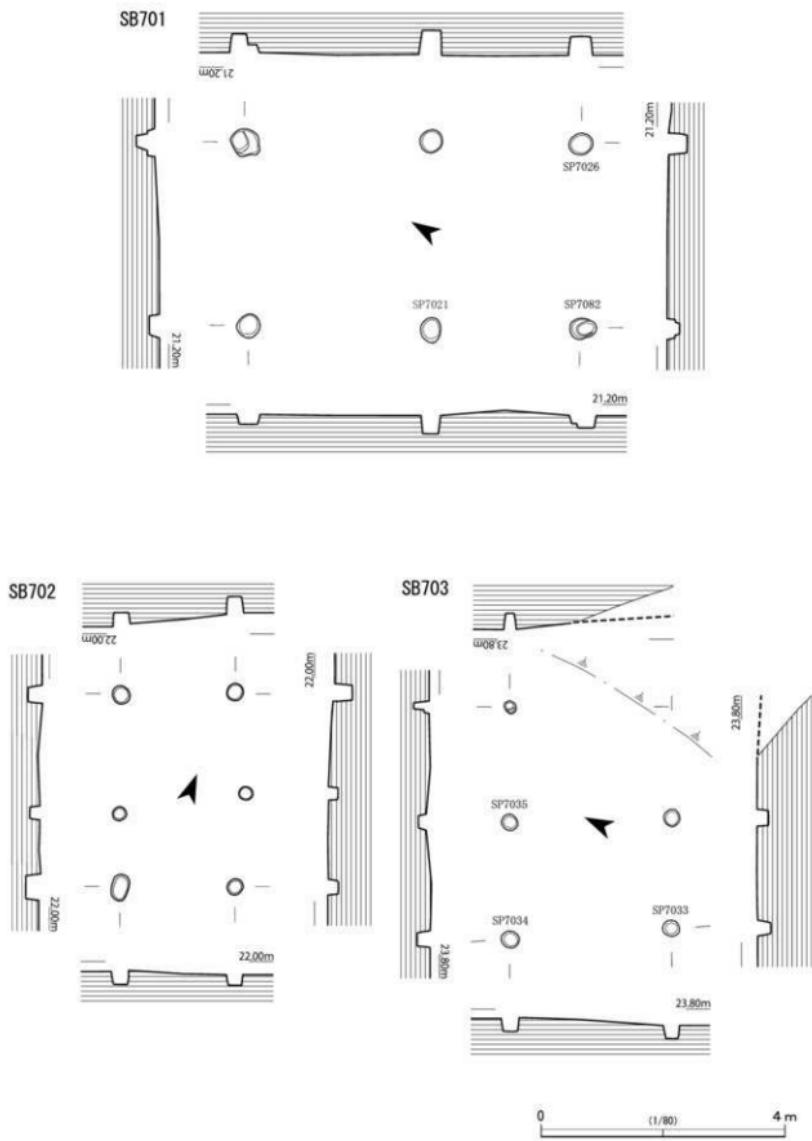
第44図 S1602・603 実測図

7基、中間のものが21基であった。深さは30cm未満のものが23基と大半を占め、水田化の際に強く削平を受けている。検出された土坑のうち、遺物が含まれなかつたものは7基であった。調査区の中央から北側にかけての土坑からは古墳時代の遺物が出土し、調査区の南側の土坑からは中世の遺物が出土した。また、調査区北側の地域には土坑中央にピットをもつものが4基あり、落とし穴であった可能性が高いと思われる。その中には深さが149cmにも及ぶものがあった。以下、主なものについて取り上げる。

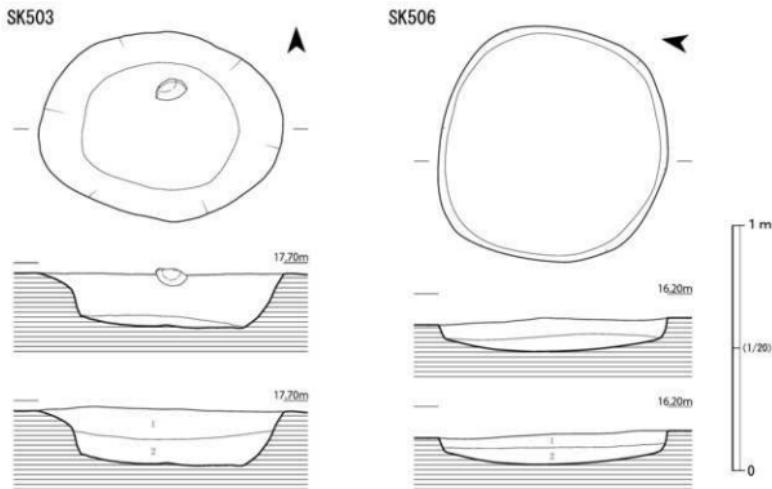
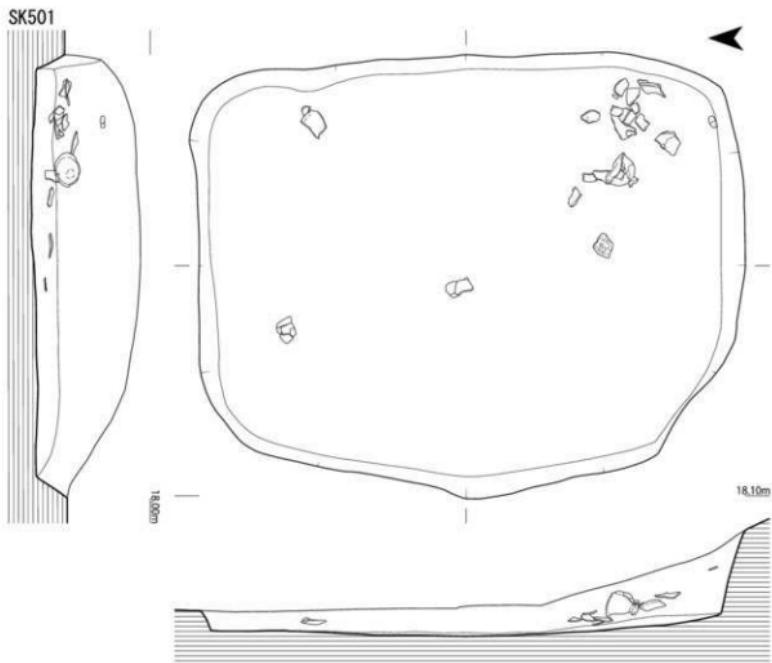
SK501（第46図 図版46） 調査区中央部と北部の間にある段差の東側に位置する土坑で、平面形は長方形を呈す。規模は長さ223cm、幅179cm、深さ42cmを測る。埋土に炭を含んでおり、土師器台付鉢（17）、壺（18・19）、甕（20）が出土した。出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SK503（第46図 図版46） 調査区中央部と北部の間にある段差のやや北側に位置する土坑で、平面形は楕円形を呈す。規模は長軸100cm、短軸78cm、深さ22cmを測る。埋土に炭を含んでおり、土師器甕（21）が出土した。出土遺物から古墳時代前半と考えられる。

SK505（第47図） SK501の西隣に位置する土坑で、平面形は長方形を呈す。規模は長さ140cm、幅81



第45図 SB701・702・703 実測図



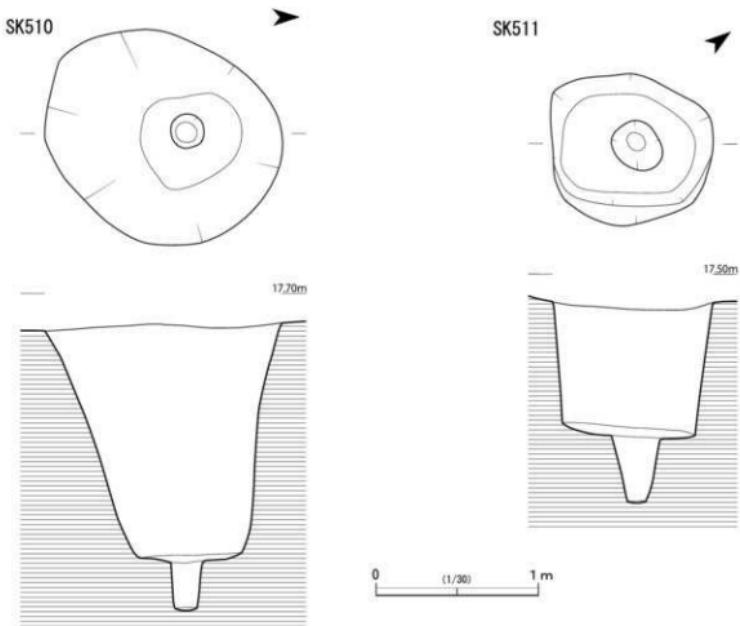
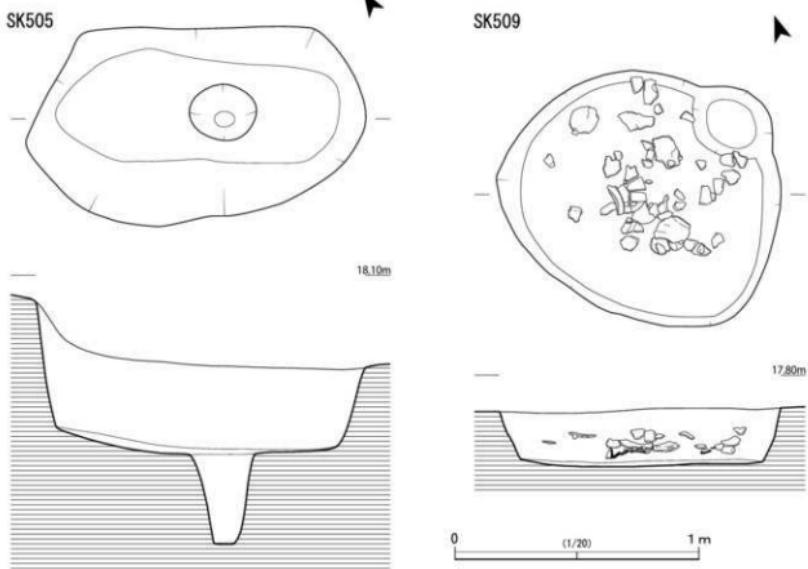
土層凡例

- 1 棕褐色粘質土((0YR4/0))
- 2 淡黃褐色粘質土((0YR4/2)) 黄を含む

土層凡例

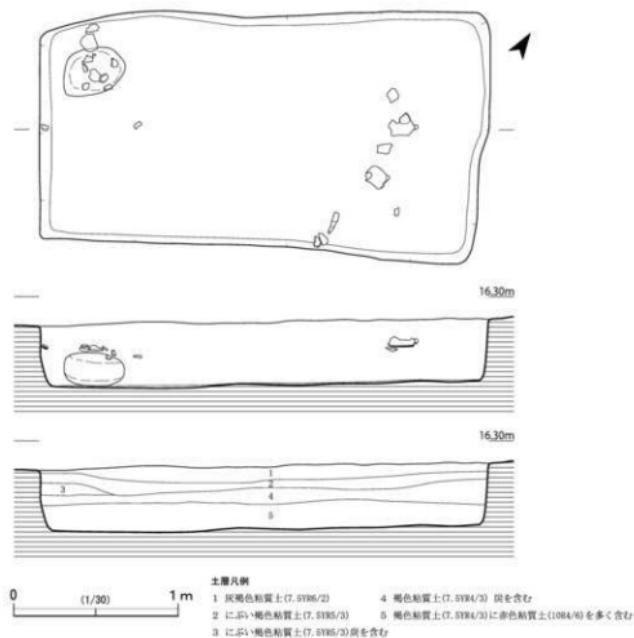
- 1 淡褐色粘質土((0YR5/3)) 黄を含む
- 2 黑褐色粘質土((5YR2/1)) 黄褐

第46図 SK501・503・506 実測図

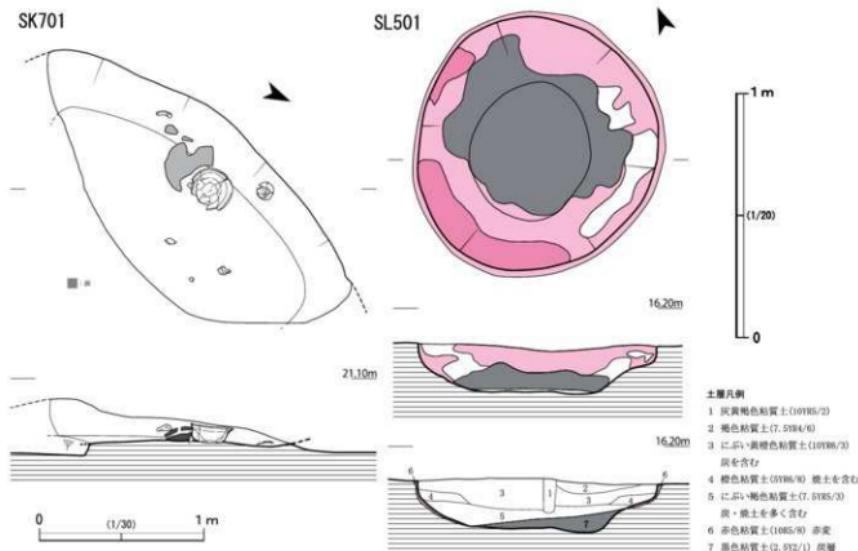


第47図 SK505・509・510・511実測図

SK514



SK701



第48図 SK514・701・SL501 実測図

cm、深さ63cmを測る。出土遺物はないが、土坑内に床面から深さ37cmのピットがあり、落とし穴であつたと考えられる。縄文時代の遺構と思われる。

SK506（第46図 図版46） 調査区北端のやや東側に位置する土坑で、平面形は長方形を呈す。規模は長さ102cm、幅96cm、深さ15cmを測る。埋土に多量の炭を含んでおり、土師器片が出土した。出土遺物から古墳時代前半と考えられる。

SK509（第47図 図版47） 調査区北部のやや西側に位置する土坑で、平面形は梢円形を呈す。規模は長軸113cm、短軸101cm、深さ25cmを測る。埋土中から土師器甕（22・23・25）・高杯（24）が出土した。出土遺物から古墳時代前半と考えられる。

SK510（第47図 図版48） 調査区北部の東側に位置する土坑で、平面形は梢円形を呈す。規模は長軸147cm、短軸132cm、深さ149cmを測る。埋土上位より古式土師器片が出土したが、後世の流れ込みの可能性が高い。土坑内に床面から深さ30cmのピットがあり落とし穴と思われる。縄文時代の遺構と考えられる。

SK511（第47図 図版48） 調査区北部の西側に位置する土坑で、平面形は長方形を呈す。規模は長さ100cm、幅95cm、深さ88cmを測る。埋土中から姫島産の黒曜石が出土した。土坑内に床面から深さ42cmのピットがあり落とし穴と思われる。縄文時代の遺構と考えられる。

SK514（第48図 図版47） 調査区北部の北西に位置する土坑で、平面形は長方形を呈す。規模は長さ277cm、幅151cm、深さ38cmを測る。炭と焼土を含む埋土中から土師器甕（28）・瓶（29）が出土した。出土遺物から古墳時代前半と考えられる。

SK701（第48図 図版48） 調査区南部の谷状地形の南側に位置する土坑で、水田化の際に削平を受けているために平面形は不整形である。規模は長さ233cm、幅残101cm、深さ24cmを測る。埋土中から土師器皿（30）、瓦質土器足鍋（31）が出土した。出土遺物から中世後半と考えられる。

（4）炉

炉と考えられる遺構は1基で、調査区北端に位置する。

SL501（第48図 図版49） 平面は梢円形で、規模は長径107cm、短径100cm、深さ18cmを測る。断面は緩やかな播鉢状を呈する。出土遺物はなく、炉内は全体が被熱のため広範囲にわたって赤変し、分厚く堆積した炭の層も確認された。検出状況から、木炭焼成坑と考えられる。放射性炭素年代測定で、7世紀末～9世紀後半の可能性が指摘されている。

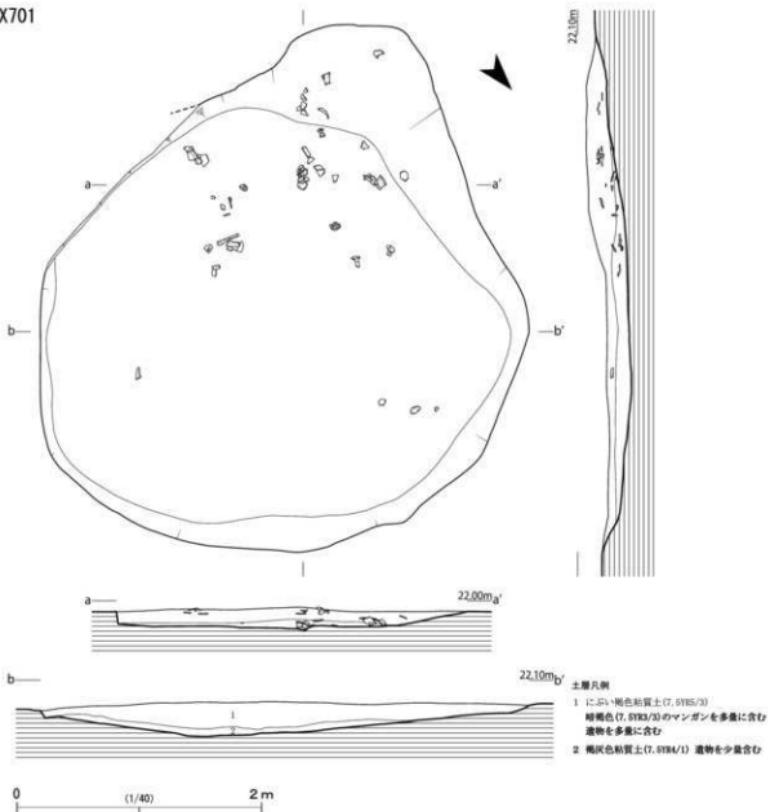
（5）性格不明遺構

今回の調査では、調査区南側で3基の性格不明遺構を検出した。

SX701（第49図 図版49） 調査区南端に位置する遺構で、南端の一部が調査区外へ伸び平面形は不整形である。規模は長径418cm、短径399cm、深さ24cmを測る。平面の規模に対する深さが非常に浅く、強く削平を受けていると思われる。遺構の底は緩やかに弧を描き、埋土は2層に分かれる。どちらの層からも中世後半の土師器や瓦質土器の破片が出土した。図化掲載した遺物は瓦質土器足鍋の脚（32）のみである。出土した遺物から、16世紀代の遺構と考えられる。

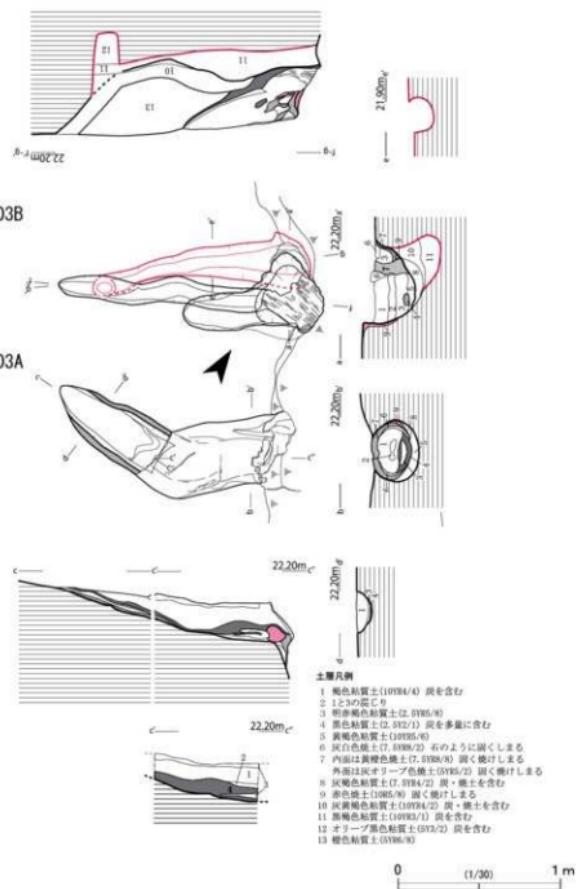
SX703A・SX703B（第50図 図版48） 調査区南側北端に位置し、2基並んで検出された遺構で木炭窯と思われるが、不明な点が多いことや類例がないことから即断は避けたい。両者の間隔はわずか

SX701



50cm程度である。どちらも強い被熱により、赤変や焼けしまりが確認でき、炭化した木片も多数出土している。傾斜した自然地形を利用した登窯風の遺構が想像されるが、後世に強く段状に削平されたことにより、焚口や規模を確認することはできなかった。ただ、北寄りSX703Bの遺構内に付着している炭化した木片の量や状況から、焚口までの距離はそれほど遠くないことが予想される。木片は分析の結果、マツの葉であることが判明した。両者はほぼ同じ標高で窯内から煙道へ同一方位に伸びるが、SX703Bの窯内の傾斜角約25°、長さ50cmで検出面まで上昇するのに対して、SX703Aは筒状に焼けしまった煙道を傾斜角わずか5°で50cm緩やかに上った後、40°近くもSX703B側に屈曲して向きを変え、20°の角度で80cm上昇して検出面に至る。熱効率のことを考えれば、屈曲の理由は外的な要因によるものと考えられるが、不明である。また、SX703Bには窯内から伸びる別の煙道が存在する。水平方向に30cm程度伸びた後、木酢液や水滴などの窯内への逆流を防ぐためなのか、一度レベルを15cm下げその後上方に抜ける構造となっている。窓の下を潜る長さ120cmの溝状の遺構も確認された。

SX703



第50図 SX703 実測図

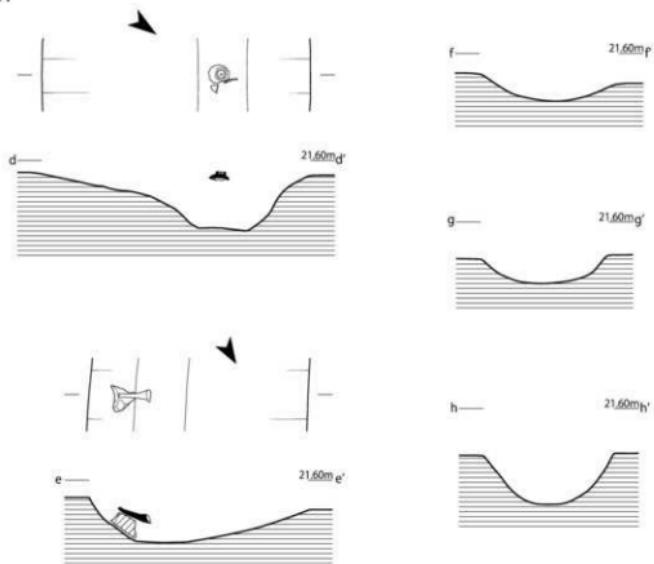
このように、SX703AとSX703Bには構造上の相違が認められ、用途や目的の異なる窯と思われるが、併存、造り替え、現段階ではどちらの可能性も残す。放射性炭素年代測定で、9世紀末から10世紀末の遺構の可能性が指摘されている。

(6) 溝

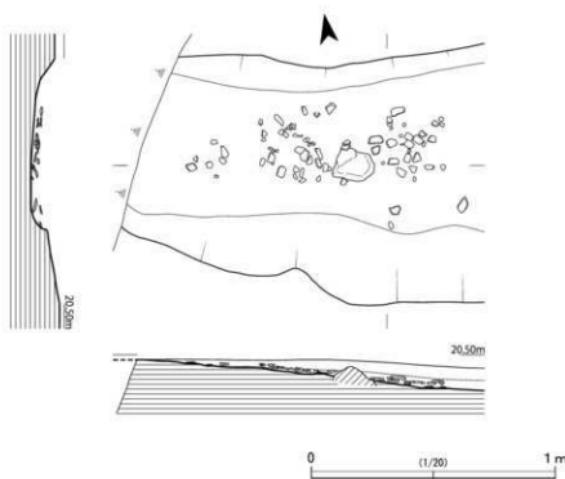
6条の溝が検出された。SD701からSD705は出土遺物から中世後半の溝と考えられるが、一部後世の水田化による削平を受けており、その全容をうかがい知ることは難しい。

SD701（第51図 図版49）馬蹄形を呈し、谷状地形の上端に沿って2方向に分かれて流れ、馬蹄形中央部の標高が最も高い本調査地区最大の溝である。確認長は25.88m、幅39～106cm、標高差42cmである。埋土中から土師器皿（33）、土師質土器鍋（39）、瓦質土器擂鉢（36）、足鍋脚（37）、青磁碗

SD701

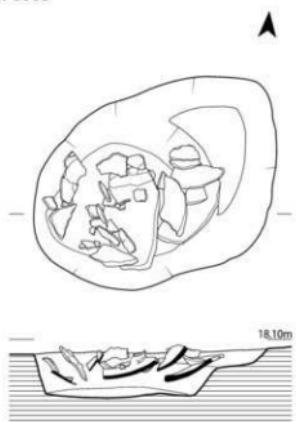


SD704

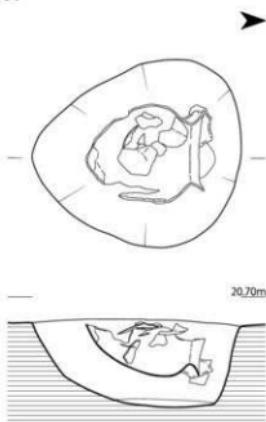


第 51 図 SD701・704 実測図

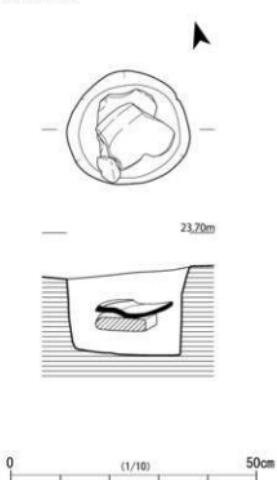
SP6003



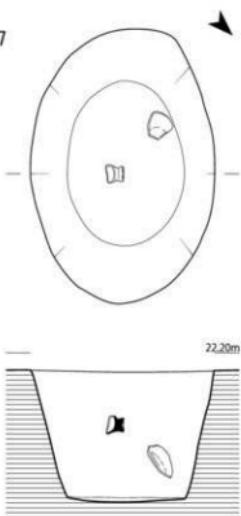
SP7001



SP7035 (SB703)



SP7047

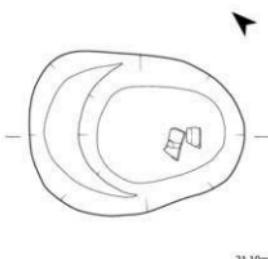


第 52 図 SP6003・7001・7035(SB703)・7047 実測図

SP7052

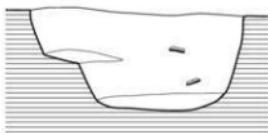
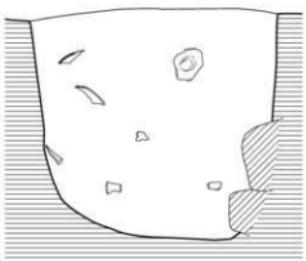


SP7082 (SB701)



21.10m

22.40m



0 (1/10) 50cm

第53図 SP7052・7082(SB701) 実測図

(34・35)、砾石 (38) が出土している。出土遺物から中世後半の遺構と考えられる。

SD704 (第51図) 途中流路を2方向に分かたがら東端調査区外へ伸びる。確認長は5.25m、幅41～100cm、標高差24cmを測る。埋土中から細片ながら土師器や瓦質土器が出土している。出土遺物から中世の溝と考えられる。

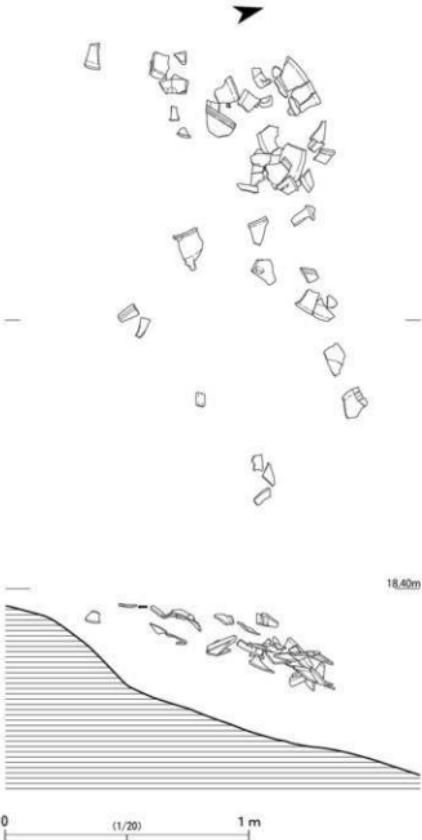
(7) 柱穴

検出された柱穴は約1100個で、その内遺物は96個の柱穴から出土している。これは、全柱穴の1割にも満たない。集落の有無や規模にもよるが、後世の削平の影響を強く受けているためと思われる。以下、主なものについて取り上げる。

SP6003 (第52図 図版49) 中央部のやや北側に位置し、規模は径40～56cm、深さ10cmを測る。東側に検出面から深さ3cmのテラスを有する。埋土上位で土師器壺 (48) が出土した。出土遺物から古墳時代の遺構と考えられる。

SP7001 (第52図 図版49) 谷状地形上段のほぼ中央に位置し、規模は径36～43cm、深さ18cmを測る。埋土上位で土師器壺 (47) が出土した。出土遺物から古墳時代前期の遺構と考えられる。

SP7035 (SB703) (第52図 図版49) 南部の西側に位置し、SB703を構成する柱穴の一つである。規模は径23～25cm、深さ18cmを測る。埋土中位で瓦質土器足鍋 (15) の土器片が石の上から出土し



第54図 谷状地形遺物包含層土器集中部実測図

大量の客土の下には、黒褐色粘質土の遺物包含層が存在する。下方ほど層の厚さは増していくが、遺物の量にそれほどの変化ではなく、弥生時代終末期から16世紀までの遺物（57～102）を包含していた。ただ、周辺の集落の様相を反映してか、古墳時代後半から中世前半までの遺物は非常に少なく、中世中頃以降の瓦質土器が大半をしめる。層の薄い上段では、地山に貼り付くように弥生土器や古墳時代の土師器、中世の瓦質土器が同一層から出土した。下段では、分厚く下層に堆積した強粘質土からは土器片が少量出土するのみで、遺物は上層に集中していた。また、下段南側の斜面からは、瓦質土器を中心の中世後半の土器が集中して出土した。遺物の中には、使用頻度の少ない良質の鍋もあることから、近くに窯の存在も期待させたが、今回の調査では発見されなかった。

ている。出土遺物から中世後半頃の遺構と考えられる。

SP7047（第52図） 谷状地形上部の北西側に位置し、規模は径38～56cm、深さ27cmを測る。埋土中位で赤色顔料が塗付された土師器皿（50）、やや下位から土師器皿（51）が出土した。出土遺物から中世後半頃の遺構と考えられる。

SP7052（第53図） 谷状地形上部の西側に位置し、規模は径51～57cm、深さ47cmを測る。埋土全体に土器片が散在し、瓦質土器足鍋、土師器皿・杯の土器片が出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

SP7082（第53図） 南側に位置し、SB701を構成する柱穴の一つである。規模は径34～44cm、深さ21cmを測る。北西側に検出面から深さ10～12cmのテラスがある。埋土中位で土師器皿の土器片が出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

（8）遺物包含層（第54図 図版43）

調査区南西側には、西から東に向かって40mの距離で標高を6mも下げる谷筋がある。この谷筋を嵩上げした

第9表 中ヶ原地区掘立柱建物一覧表

※:南東隅の柱穴から測れなかった場合

通構 番号	規模 (間)	棟方向	桁 行 建物の南東隅から (m)	梁 行 建物の南東隅から (m)	床面積 (m ²)	間連柱穴	出土遺物	時代	備 考
SB701	2×1	N31°W	5.60(248~312)	3.02	16.91	SP7021, SP7026, SP7082	土師器、瓦質土器	中世後半	
SB702	2×1	N18°W	3.19(156~163)	1.86	5.93	-	-	-	小規模な建物。母屋に附属する可能性が高い。
SB703	2×1	N66°E	※384(193~191)	※266	10.21	SP7033, SP7034, SP7035	土師器、瓦質土器	中世後半	削平を受け、南東隅の角柱抜 出不能。

第10表 中ヶ原地区土坑一覧表

通構 番号	平面形	主軸方位	規 模(cm)			出土遺物	時 代	備 考
			長 さ	幅	深 さ			
SK501	長方形	N45°E	223	179	42	土師器	古墳中期	埋土に炭を含む。夷タキ調査。
SK502	楕円形	N9°W	107	66	75	土師器	古墳前半	遺物少量。テラスあり。
SK503	楕円形	N85°W	100	78	22	土師器	古墳前半	埋土に炭を含む。
SK504	楕円形	N37°E	86	45	14	土師器	古墳前半	土師器片
SK505	長方形	N56°W	140	81	63	-	縄文	中央ビットあり。落とし穴か。ビットの深さ床面から37cm。
SK506	長方形	N4°W	102	96	15	土師器	古墳前半	土師器片、埋土に炭を多量に含む。焼けしまりなし。
SK507	長方形	N26°E	150	111	23	土師器	古墳前半	土師器片、埋土に少量の炭を含む。
SK508	長方形	N3°W	158	92	29	土師器	古墳前半	土師器片、埋土に炭・燒土を含む。
SK509	楕円形	N65°W	113	101	25	土師器	古墳前半	夷タキ調査。
SK510	楕円形	N24°E	147	132	149	土師器(流れ込み)	縄文	中央ビットあり。落とし穴か。ビットの深さ床面から30cm。
SK511	長方形	N35°E	100	95	88	黒曜石	縄文	都島産。中央ビットあり。落とし穴か。ビットの深さ床面から42cm。
SK512	不整形	-	243	140	20	土師器、魚骨片	古墳前半	
SK513	不整形	-	122	77	18	土師器	古墳前半	土師器片
SK514	長方形	N68°E	277	151	38	土師器	古墳前半	土師器片、埋土に炭・燒土を含む。
SK515	楕円形	N75°W	102	53	50	-	縄文	中央ビットあり。落とし穴か。ビットの深さ床面から32cm。
SK516	長方形	N19°W	101	50	67	-	-	
SK517	長方形	N28°E	118	100	74	-	-	
SK518	楕円形	N27°W	112	81	74	-	-	
SK601	楕円形	N9°E	198	88	26	土師器	古墳前半	土師器片
SK602	楕円形	N76°W	125	75	19	-	-	埋土に炭を含む。
SK603	不整形	-	141	73	19	土師器	古墳前半	土師器片
SK604	楕円形	N11°E	132	118	10	土師器、須恵器	古墳前半	土師器片
SK605	不整形	-	85	53	22	土師器	古代	埋土に炭、如壁片を含む。SB602・603を切る。
SK606	不整形	-	102	67	21	土師器	古墳前半	土師器片
SK607	不整形	-	215	206	58	土師器	古墳前半	土師器片、SB601を切る。
SK608	長方形	N27°E	251	143	57	土師器	古墳前半	埋土に炭、燒土、如壁片を含む。
SK609	楕円形	N18°E	143	128	51	-	-	
SK701	不整形	-	233	残101	24	土師器、瓦質土器	中世後半	水田化の際、削平を受ける。
SK702	不整形	-	残275	残111	11	弥生土器	弥生終末	水田化の際、削平を受ける。
SK703	楕円形	N80°W	137	95	18	土師器	中世	
SK704	不整形	-	95	45	9	瓦質土器	中世	
SK705	長方形	N15°E	67	46	22	土師器、瓦質土器	中世	
SK706	楕円形	N10°W	100	67	39	土師器	古墳前半	土師器片
SK707	長方形	N14°W	105	54	12	土師器	中世	埋土に炭・動物の焼骨片を含む。
SK708	楕円形	N50°W	111	71	23	瓦質土器	中世	
SK709	長方形	N4°E	79	51	12	土師器、瓦質土器	中世	
SK710	長方形	N74°W	66	41	61	土師器	古墳前半	土師器片
SK711	楕円形	N33°E	50	41	32	土師器	中世	

第11表 中原地区溝一覧表

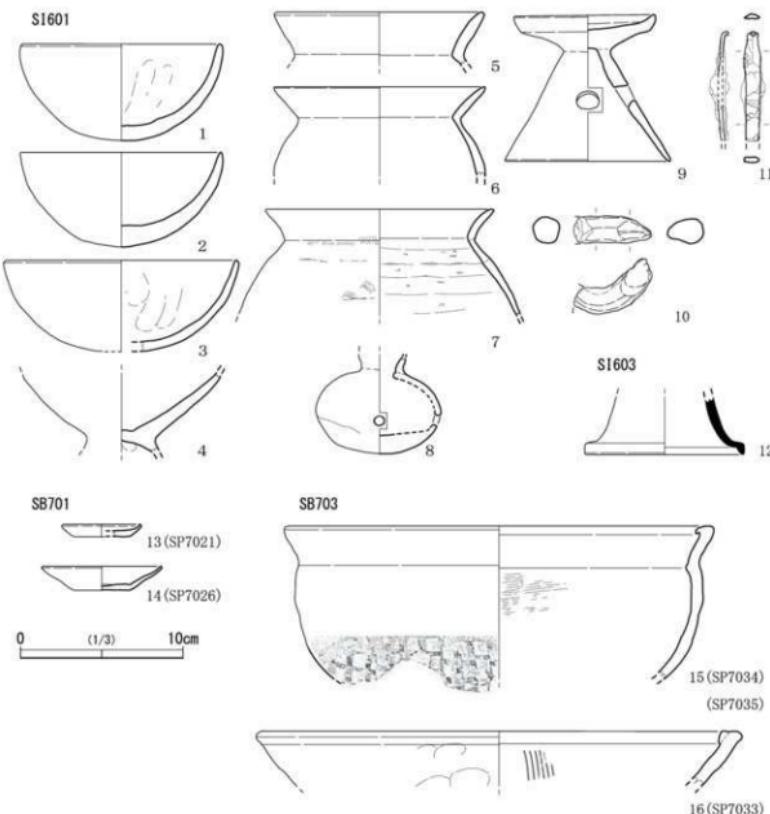
通構 番号	長 さ (m)	幅 (cm)	標高差 (cm)	出土遺物	時 代	備 考
SD601	4.18	20~39	5	土師器	古墳前半	U字断面形。西端SD603に切られる。東端調査区内で収束。
SD701	25.88	39~106	42	青磁、土師器、瓦質土器、 陶器、石製品	中世後半	U字断面形。中程の標高が最も高く、谷底地形の上端に沿って2方向に分かれ流れ。両端は水田化の際の削平を受ける。
SD702	9.95	16~50	51	土師器、瓦質土器	中世後半	U字断面形。西端調査区外へ伸びる。東端水田化の際、削平を受ける。
SD703	7.25	72~135	24	瓦質土器	中世後半	U字断面形。西端調査区内で終息。西端水田化の際、削平を受ける。
SD704	5.25	41~100	24	土師器、瓦質土器	中世	U字断面形。西端水田化の際、削平を受ける。東端調査区外へ伸びる。途中流路2方向に分かれれる。道端いずれも削平。
SD705	2.16	104 ~ 112	14	瓦質土器	中世	U字断面形。北端SD701に、南端SD703に切られる。

2 遺物

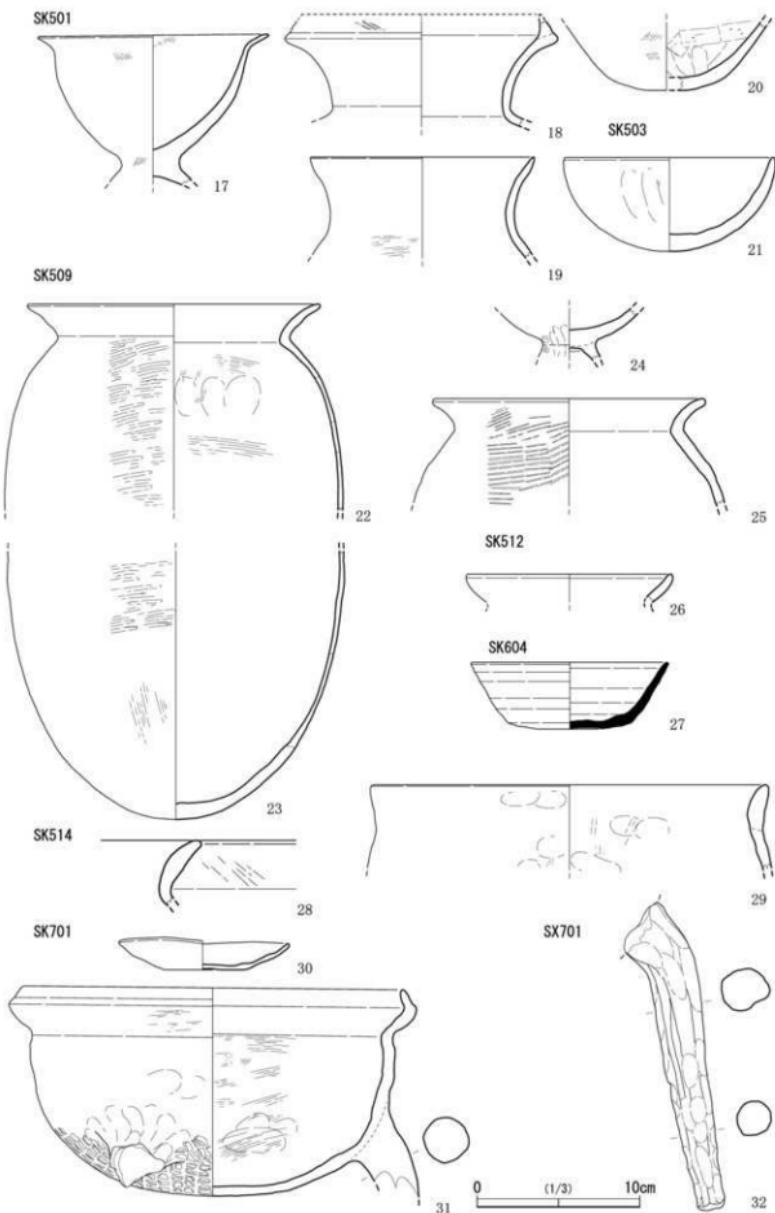
調査の結果、主に弥生時代終末期、古墳時代、奈良時代、平安時代、室町時代の遺物が出土した。遺物の種類としては、弥生土器・土師器・須恵器・輸入磁器・土師質土器・瓦質土器・土製品・石製品・金属製品などがある。竪穴建物・柱穴・土坑・溝に伴う遺物があり、良好な一括資料を得ることができた。また、遺物包含層から出土した遺物も多い。なお、各遺物の法量や調整、特徴については、遺物観察一覧表に掲載している。

(1) 竪穴建物出土遺物（第55図 図版50）

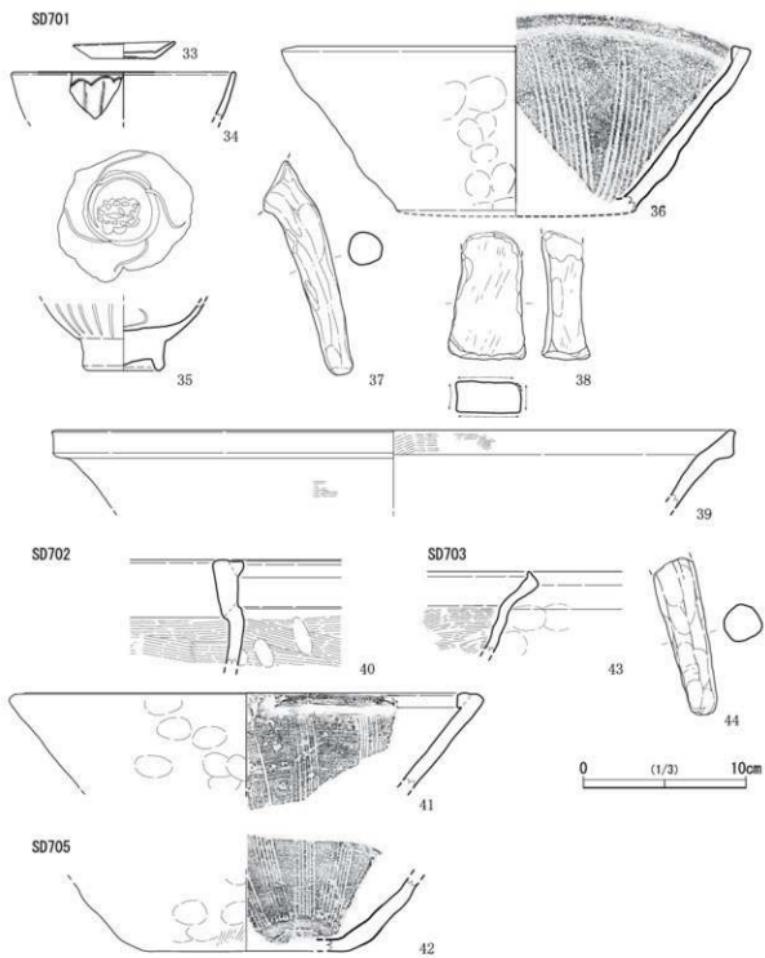
1～11はSI601出土の遺物である。1～3は土師器碗で、半球状の体部をもち、口縁部がやや外方に立ち上がる。4は土師器台付鉢で、見込みと脚部中央に強い指オサエを施す。5～7は土師器甕で、くの字状に屈曲する口縁部をもつ。8は壺形のミニチュア土器で、体部下位に直径0.6cmの焼成前の穿孔をもつ。9は小型器台で、形態は畿内系であるが受部の器壁が極めて厚い。10は碗の把手と



第55図 出土遺物実測図(1)



第 56 図 出土遺物実測図 (2)

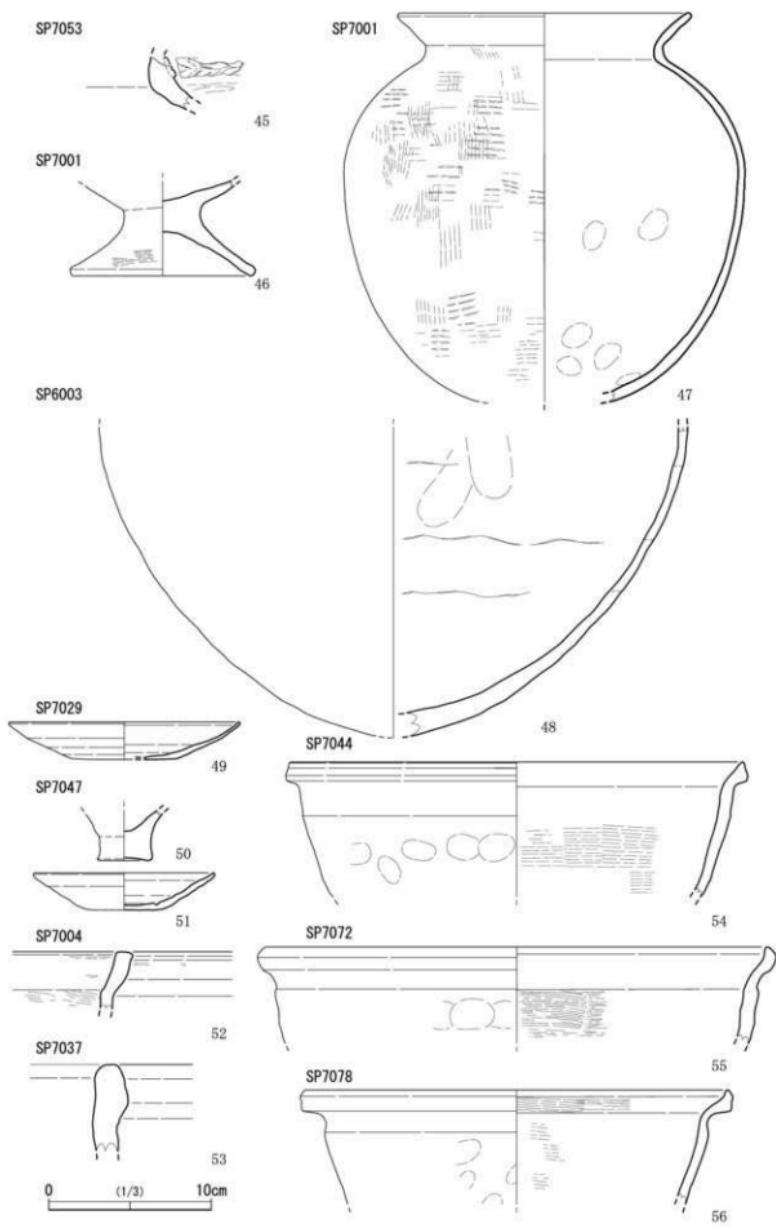


第57図 出土遺物実測図（3）

思われる。11は鉄製のヤリガンナで、両端の刃部が明瞭に残る。茎に一部木質が残る。12はSI603出土の須恵器高杯の裾部で、口縁端部はほぼ垂直に屈曲する。

(2) 挖立柱建物出土遺物 (第55図 図版50)

13・14はSB701の構成柱穴出土の土師器皿で、13は短い体部から口縁端部を内側につまみ上げている。14は見込みと体部の境に沈線をもち、体部は大きく開く。15・16はSB703の構成柱穴出土の遺物である。15は瓦質土器足鍋で、くの字状に屈曲する口縁部をもち、端部は内傾し先端を内側に丸め込んでいる。16は瓦質土器擂鉢で、口縁部内面に断面三角形の粘土を巡らし肥厚させている。



第58図 出土遺物実測図(4)

(3) 土坑出土遺物 (第56図 図版50)

17～20はSK501出土の遺物である。17は台付鉢で、体部が緩やかに内湾して立ち上がる。口縁部は外反し、端部は尖りぎみである。18は複合口縁の壺で、立ち上がり部に櫛描波状文をわずかに残す。19は壺で、肩から緩やかに内湾し、口縁部が外上方に立ち上がる。20は壺の底部で、内面にヘラケズリを施す。いずれも弥生時代終末期の遺物である。21はSK503出土の土師器椀で、半球状の体部をもち、口縁部がやや外上方に立ち上がる。22～25はSK509出土の遺物である。22と23は同一個体で、外側はタタキの後ナデを施す。24は高杯で、杯部と脚部の接合部分を内外ともに丁寧にならる。25は壺で、口縁部は外反し端部は丸みをもつ。タタキは口縁中位にまで及ぶ。26はSK512出土の土師器壺の口縁部で、わずかに内湾して外上方に立ち上がる。27はSK604出土の高台の無い須恵器杯身で、体部が外上方に直線的に立ち上がる。28・29はSK514出土遺物である。28は壺口縁部で、内面中位で肥厚させている。29は瓶の肩部から口縁部で、口縁下位でわずかにくびれる。30・31はSK701出土の遺物である。30は土師器皿で、体部が内湾して立ち上がり、端部に小さな平坦面をもつ。31は瓦質土器足鍋で、口縁部がくの字状に屈曲する。32はSX701出土の足鍋の脚部である。

(4) 溝出土遺物 (第57図 図版52)

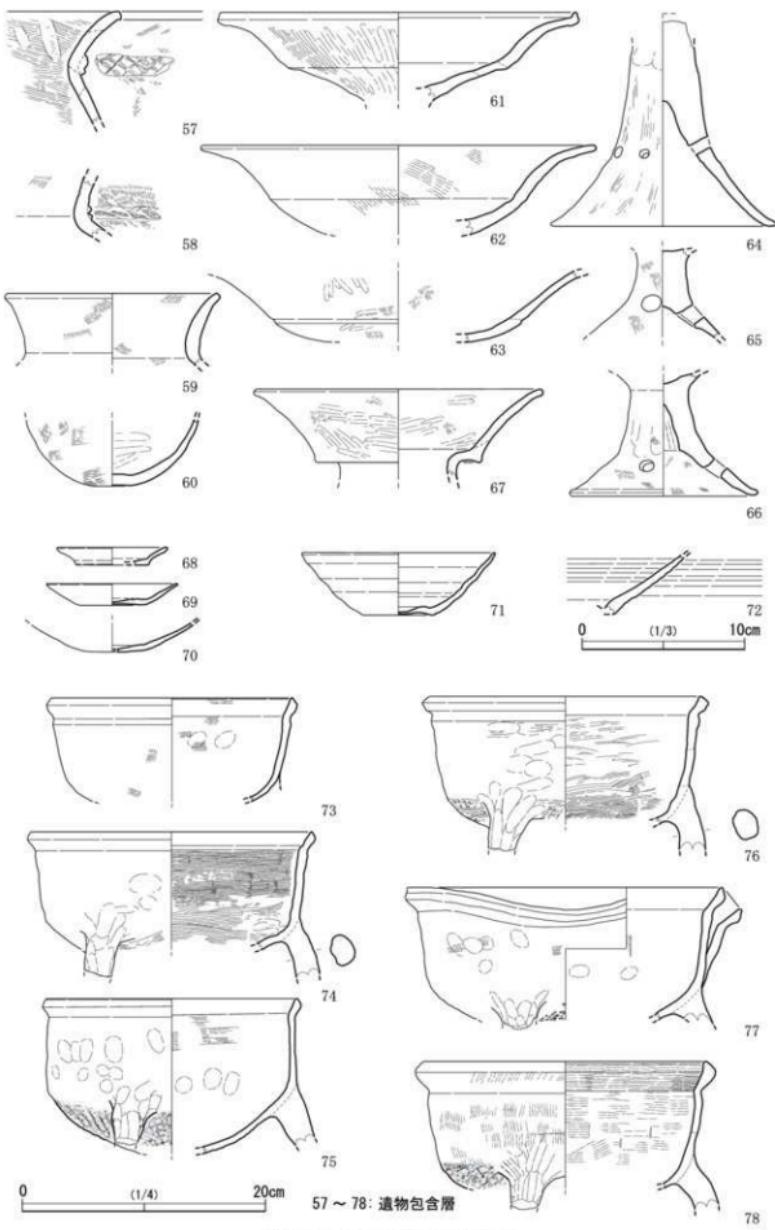
33～39はSD701出土の遺物である。33は土師器皿で、見込みと体部の境を強くなじ、体部は外上方に直線的に立ち上がる。34は線描蓮弁文をもつ青磁碗である。35は見込みに印花文と花卉草葉文を施し、外面に細蓮弁文を施す。36は瓦質土器擂鉢で、8条1単位の擂目をもつ。37は瓦質土器足鍋の脚部である。38は中砥用の砥石で、石材は凝灰岩である。39は土師質土器鍋で、復元径42.0cmと大ぶりである。40・41はSD702出土の遺物である。40は瓦質土器火鉢で、肩がわずかに張り出し、口縁部は垂直に立ち上がる。端部外面に断面三角形の粘土帯を巡らす。41は瓦質土器擂鉢で、7条1単位の擂目をもち、口縁部内面に断面三角形の粘土帯を巡らす。42はSD705出土の瓦質土器擂鉢で、7条1単位の擂目をもつ。43・44はSD703出土の遺物である。43は瓦質土器鍋で、体部から緩やかに外反し、端部を上方につまみ上げている。44は足鍋脚部で丁寧になじ、断面は五角形に近い。

(5) 柱穴出土遺物 (第58図 図版52・53)

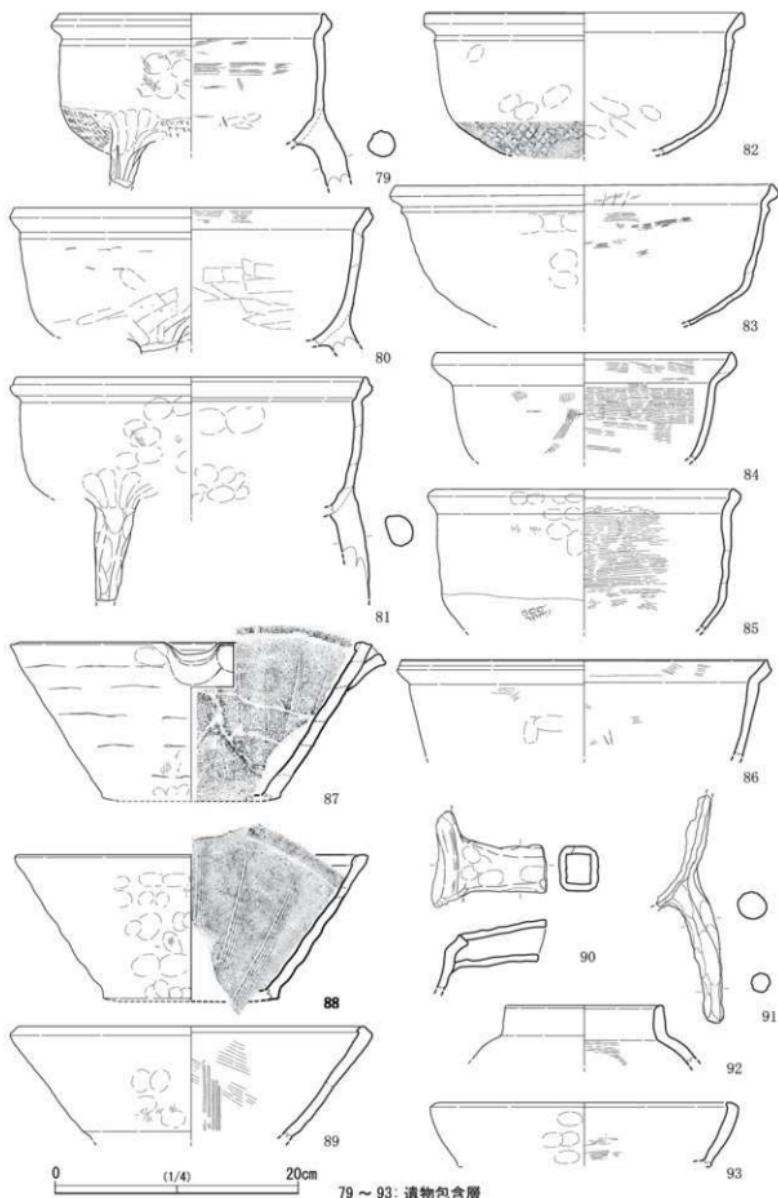
45は弥生時代終末期の壺である。頸部に綾杉状の刻み目を施した貼付突帯が巡る。46は台付鉢の脚部で、直線的に大きくハの字形に開き、端部は丸みをもつ。47は壺で、球状に膨らむ体部にタタキとナデを施す。口縁部はくの字状に屈曲し、端部は丸みをもつ。48は土師器壺で、外側に丁寧なナデを施す。49は土師器皿で、器壁は0.15～0.3cmと極めて薄い。50・51は土師器皿で、50は柱状高台をもち、赤色顔料を塗付している。51は体部内外にロクロ目をもち、見込みと体部の境に強いナデを施す。52は瓦質土器鍋の口縁部で、端部に平坦面をもつ。53は瓦質土器大壺の口縁部である。54は瓦質土器鍋で、口縁端部は断面が丸みを帯びた方形を呈し、上端部をつまみ上げている。55は瓦質土器鍋で、口縁部がわずかに内湾し、口縁部外側下位に強いナデを施す。56は瓦質土器鍋で、口縁部が外側に強く屈曲した後、上方に屈折し、上端部をつまみ上げている。

(6) 遺物包含層出土遺物 (第59・60・61図 図版53・54・55・56)

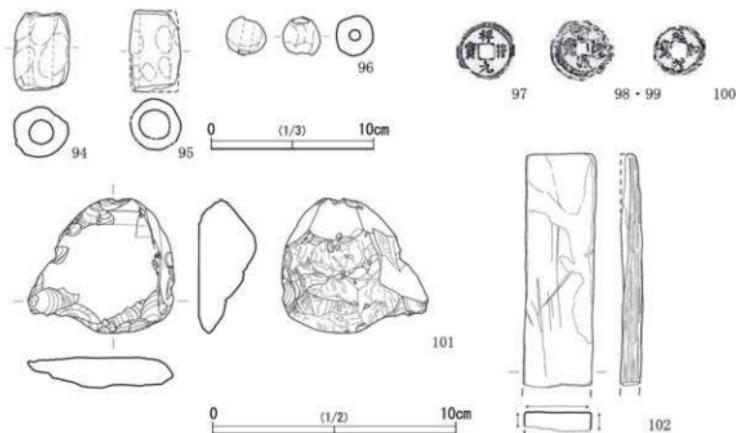
57・58は弥生時代終末期の壺で、57は頸部に斜格子文の貼付突帯が巡り、58は頸部に刺突文の貼付突帯が巡る。59は土師器壺の口縁部で緩やかに外反し、端部に平坦面をもつ。60は土師器椀で平坦な



第59図 出土遺物実測図(5)



第60図 出土遺物実測図（6）



第61図 出土遺物実測図（7）

94～102：遺物包含層

底部をもち、内面にヘラミガキを施している。61～63は高杯の杯部である。64～66は高杯の脚部である。64は裾が大きく緩やかに開き、先端はやや尖りぎみである。円孔透かしを6方向にもつ。65は円孔透かしを3方向にもつ。66は脚部中位から裾が開き、端部を上方にわずかにつまみ上げている。67は山陰系鼓形器台の受部である。68～70は土師器皿である。71・72は土師器杯である。71は見込みと体部の境に強いナデを施し、体部にロクロ目を残す。72は体部内外に明瞭なロクロ目を残す。73～81は足鍋である。73～76は比較的口縁部が短く、端部を上方へつまみ上げる。口縁下位に強いナデを施す。77は片口を成形せず、口縁部の一部を押し下げ、片口の機能をもたせている。79・81は口縁端部外面に沈線がめぐる。80は口縁部が断面長方形を呈し、端部を上方につまみ上げている。82～86は鍋としたが、明言できるのは83のみである。82・83は丸みを帯びた断面方形の口縁部をもち、口縁下位に強いナデを施す。84は比較的長い口縁部をもつ。85は口縁部内面に浅いくびれをもつ。86は口縁部が断面長方形を呈し、端部を上方につまみ上げている。87～89は瓦質土器の擂鉢である。87は片口をもち、擂目は7条1単位である。使い込まれて下位の擂目は摩耗している。88は6条1単位の明瞭な擂目をもち、擂目単位の間隔が広い。89は口縁の先端を内側に折り曲げる。擂目は7条1単位である。90は鍋の把手である。断面が方形で、一枚の粘土を角材に巻き付けて成形したと考えられる。91は足鍋の脚部で、比較的短く端部はやや尖る。92は瓦質土器の茶釜で、肩から口縁まで均一な厚さである。93は瓦質土器焰壺で、体部中位からわずかに内湾して立ち上がる。94～96は管状土錐である。94は上下端面に粘土板の巻き込み痕跡が見られ、円柱棒に粘土を巻いて成形したことがわかる。96は球形の管状土錐で体部に溝は無い。97は祥符元寶である。98～100は3枚が重なって出土し、98は元豐通寶、99は98に着色して名称は不明である。100は至和元寶である。101は煙水晶製スクリーパーの未製品と思われる。102は仕上げ用の砥石で、石材は泥岩である。103はSK512出土のサケ科（マスも含む）の腹椎と尾椎である。人為的な切断面をもつ。混入遺物の可能性が高い。

第12表 中ヶ原地区出土遺物観察一覧表

種類	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm) (復元値)			胎土	焼成	色調(内) (外)	主な調査(内) (外)	備考
						目添 (復元値)	高さ (残存値)	底径 (復元値)					
55	50	1	S6601	土器部	瓶	124	5.9	12	粗	やや粗	浅黄褐色 灰褐色	丁寧なナダ 丁寧なナダ	
55	50	2	S6601	土器部	瓶	124	5.8	-	やや粗	硬質	褐色 褐色、灰白色	丁寧なナダ 丁寧なナダ	
55	50	3	S6601	土器部	瓶	(140)	5.6残	-	粗	やや粗	灰白色 灰褐色	丁寧なナダ 丁寧なナダ	
55	50	4	S6601	土器部	台付鉢	-	4.9残	-	やや粗	硬質	灰黄色 灰褐色	ハケ日焼丁寧なナダ ハケ日焼丁寧なナダ	
55	50	5	S6601	土器部	壺	(126)	2.3残	-	粗	やや粗	灰白色 灰白色	ナダ ナダ	
55	50	6	S6601	土器部	壺	(130)	5.5残	-	粗	硬質	灰白色 灰褐色	丁寧なナダ 丁寧なナダ	
55	50	7	S6601	土器部	壺	(140)	6.6残	-	やや粗	硬質	灰褐色 灰白色	ナダ ナダ	
55	50	8	S6601	土器部 上・下部	壺	-	6.1残	1.4	やや粗	硬質	灰褐色 灰褐色	丁寧なナダ 丁寧なナダ	側部に焼成前の芽孔(径0.6cm)
55	50	9	S6601	土器部	壺	8.7	9.0	10.2	密	硬質	灰白色 灰白色	丁寧なナダ 丁寧なナダ	器内省小形部分
55	50	10	S6601	土器部	瓶	-	4.8残	-	粗	やや粗	褐色 褐色	ナダ ナダ	赤色顔料帯
55	50	11	S6601	跳梁品	ヤリガラ 瓶	瓶長 6.7残	瓶厚 0.9	0.3	粗	硬質	褐色 褐色	丁寧なナダ 丁寧なナダ	
55	50	12	S6601	組合部	高杯 瓶	-	3.5残	(9.8)	密	硬質	オリーブ黒色 灰白色	回転ナダ 回転ナダ	
55	50	13	SP7021	土器部	瓶	(48)	0.8	(3.5)	密	硬質	褐色 褐色	回転ナダ 回転ナダ	
55	50	14	SP7026	土器部	瓶	(7.4)	1.5	(3.5)	密	硬質	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナダ 見込み:回転ナダ後静止ナダ 回転ナダ 底部:回転系切り	
55	50	15	SP703	瓦質土器	足頭	(265)	9.4残	-	密	硬質	暗灰色 黑色	ナダ ナダ	SP7035出土遺物と接合
55	50	16	SP703	瓦質土器	脚跡	(30.0)	3.4残	-	密	硬質	暗灰色 黑色	ナダ ナダ	掘目6条1單位
56	51	17	S6501	土器部	台付鉢	(142)	9.2残	-	粗	硬質	灰白色 灰褐色	ハケ日焼丁寧なナダ ハケ日焼丁寧なナダ	
56	51	18	S6501	土器部	壺	(146)	6.5残	-	粗	やや粗	黄褐色 褐色	ナダ ナダ	口縁部外面に模様状文
56	51	19	S6501	土器部	壺	(138)	6.2残	-	粗	やや粗	褐色 褐色	ナダ ナダ	
56	51	20	S6501	土器部	壺	-	4.2残	-	密	硬質	灰白色 灰褐色	ナダ ナダ	
56	51	21	S6503	土器部	瓶	(126)	5.8残	-	粗	やや粗	灰白色 灰褐色	ナダ ナダ	
56	51	22	S6509	土器部	壺	(180)	12.7残	-	やや粗	やや粗	灰褐色 褐色	西オサニ ハケ日焼ナダ タキナダ	
56	51	23	S6509	土器部	壺	-	16.6残	-	やや粗	やや粗	灰褐色 褐色	西オサニ ハケ日焼ナダ タキナダ	23と同一個体
56	51	24	S6509	土器部	高杯	-	3.2残	-	やや粗	やや粗	灰褐色 褐色	ナダ ナダ	
56	51	25	S6509	土器部	壺	(168)	6.6残	-	密	硬質	灰褐色 灰褐色	丁寧なナダ タキナダ部分的にナダ	
56	51	26	S6512	土器部	壺	(127)	1.7残	-	密	硬質	褐色 褐色	ナダ ナダ	
56	51	27	S6504	須恵器	舟身	(112)	4.1	6.4	やや粗	硬質	オリーブ黒色 灰褐色	回転ナダ 回転ナダ 底部:ハラ切と後ハラナダ	陶室產か
56	51	28	S6514	土器部	壺	-	4.0残	-	粗	やや粗	灰褐色 褐色	ハケ日焼ナダ	
56	51	29	S6514	土器部	瓶	(24.4)	5.2残	-	粗	やや粗	明褐色 明褐色	西オサニ ハケ日焼ナダ タキナダ	
56	51	30	S6701	土器部	瓶	10.6	18.8残	5.1	密	硬質	灰褐色 灰褐色	回転ナダ 見込み:回転ナダ後静止ナダ 回転ナダ 底部:回転系切り後ナダ	板目直痕
56	51	31	S6701	瓦質土器	足頭	(234)	12.8残	-	密	硬質	浅黄褐色 灰褐色	ハケ日焼ナダ ハケ日焼ナダ 格子タキナダ	外面に模様着
56	51	32	S6701	瓦質土器	足頭	-	18.9残	-	密	硬質	灰白色 灰褐色	西オサニ ハケ日焼ナダ タキナダ	
57	52	33	SD701	土器部	瓶	6.3	1.0	3.9	密	やや粗	灰褐色 灰褐色	回転ナダ 回転ナダ 底部:回転系切り後ナダ	白色系
57	52	34	SD701	青磁	瓶	(13.6)	29残	-	やや粗	硬質	オリーブ黒色 オリーブ黒色	回転ナダ 回転ナダ後進青文施	繩織進青文
57	52	35	SD701	青磁	瓶	-	4.1残	5.0	やや粗	軟質	灰オリーブ色 灰褐色	回転ナダ 回転ナダ 底部:ハラケズリ	見る込みの花文、花卉飾草文 外面に繩織青文
57	52	36	SD701	瓦質土器	脚跡	(28.9)	10.5残	(14.7)	密	硬質	灰白色 灰褐色	ナダ ナダ	掘目6条1單位
57	52	37	SD701	瓦質土器	足頭	-	13.2残	-	密	硬質	褐色 灰褐色	西オサニ 西オサニ後ナダ	
57	52	38	SD701	石製品	砾石	砾長 7.9残	砾厚 2.8	121.5	密	硬質	灰褐色 灰褐色	西オサニ 西オサニ後ナダ	觀灰岩
57	52	39	SD701	土質質土器	瓶	(420)	4.8残	-	密	硬質	灰褐色 灰褐色	ハケ日焼丁寧なナダ、ヘラナダ ハケ日焼丁寧なナダ	
57	52	40	SD702	瓦質土器	火鉢	-	6.5残	-	粗	硬質	灰褐色 灰褐色	ナダ ナダ	
57	52	41	SD702	瓦質土器	脚跡	(29.2)	6.6残	-	やや粗	硬質	灰白色 灰白色	西オサニ 西オサニ後ナダ	
57	52	42	SD705	瓦質土器	足頭	-	4.5残	(12.6)	密	硬質	灰白色 灰褐色	ナダ後日焼文 西オサニ後ナダ	掘目7条1單位
57	52	43	SD703	瓦質土器	瓶	-	5.0残	-	密	硬質	灰褐色 灰褐色	西オサニ 西オサニ後ナダ	外面に模様着
57	52	44	SD703	瓦質土器	足頭	-	9.6残	-	密	硬質	灰褐色 灰褐色	ナダ後丁寧なナダ 西オサニ後丁寧なナダ	
58	52	45	SP703	生土生土器	壺	-	3.2残	-	密	硬質	浅黄褐色 浅黄褐色	ハケ日焼ナダ ハケ日焼ヘラ+ガシ	
58	52	46	SP7001	土器部	台付盆	-	4.8残	(11.2)	密	やや粗	明褐色 明褐色	ハケ日焼ナダ ハケ日焼ナダ	掘形状刻込み點付帶
58	52	47	SP7001	土器部	壺	(18.0)	23残	-	密	硬質	灰褐色 灰褐色	ハケ日焼ナダ ハケ日焼ナダ	
58	52	48	SP6003	土器部	壺	-	19.1残	-	粗	硬質	灰褐色 灰褐色	ナダ ナダ	
58	52	49	SP7029	土器部	壺	(142)	2.3	(6.3)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ 回転ナダ	腹部:板状压痕
58	52	50	SP7047	土器部	瓶	(11.0)	2.3	(4.7)	密	硬質	灰褐色 灰褐色	回転ナダ 回転ナダ	柱状高瓶底か 赤色顔料帯
58	53	51	SP7047	土器部	瓶	(11.0)	2.3	(4.7)	密	硬質	灰褐色 灰褐色	回転ナダ 回転ナダ	底部:回転系切り後静止ナダ

拂 拂	國 版	No.	出土 場所	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調(例) (%)(%)	主な調査(内 (外))	施 考
						13種 (復元値)	高さ (残存値)	底径 (復元値)					
58	53	52	SP7004	瓦質土器	罐	-	3.5残	-	密	硬質	灰褐色 灰黑色	拂ナダ、ハケ目 拂ナダ	
58	53	53	SP7037	瓦質土器	大甕	-	5.3残	-	やや粗	硬質	青灰色 黑色	拂ナダか、摩滅著しい 拂ナダ	
58	53	54	SP7044	瓦質土器	罐	(27.8)	8.3残	-	やや粗	やや軟質	黑褐色 黑色	ハケ目ナダ 指オサエ、ナダ	
58	53	55	SP7072	瓦質土器	罐	(30.8)	5.9残	-	密	やや軟質	黑褐色 灰褐色	拂ナダ、ハケ目後ナダ 指オサエ、ナダ	
58	53	56	SP7078	瓦質土器	罐	(26.0)	7.0残	-	密	硬質	灰褐色 黑色	ノラナダ、ハケ目 指オサエ、ナダ	
59	53	57	遺物合層	生糸土器	壺	-	6.9残	-	やや粗	硬質	黑褐色 灰褐色	ハケ目ナダ ハケ目後丁寧なナダ	頭部に斜格子文貼付文帶
59	53	58	遺物合層	生糸土器	壺	-	3.7残	-	密	やや軟質	青灰色 青褐色	ハケ目ナダ ハケ目後ナダ	頭部に斜文貼付文帶
59	53	59	遺物合層	土師器	壺	(13.2)	4.4	-	やや粗	やや軟質	青灰色 明褐色	ハケ目ナダ ハケ目後ナダ	
59	53	60	遺物合層	土師器	瓶	-	4.1残	(2.4)	やや粗	硬質	青灰色 青褐色	ナダ、ハケ目 指オサエ、ナダ	
59	53	61	遺物合層	土師器	高杯	(22.0)	5.4残	-	やや粗	硬質	浅青褐色 青褐色	ハケ目後丁寧なナダ ハケ目後ナダ、ハラミガキ	
59	54	62	遺物合層	土師器	高杯	(24.3)	5.5残	-	密	硬質	水褐色 赤褐色	ハケ目ナダ ハケ目後丁寧なナダ ハケ目後ナダ	
59	54	63	遺物合層	土師器	高杯	-	5.2残	-	やや粗	硬質	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目ナダ 摩滅著しい ハケ目ナダ、洗浄分のヘラミガキ	
59	54	64	遺物合層	生糸土器	高杯	-	12.6残	(13.9)	密	硬質	青褐色 浅青褐色	ハケ目後丁寧なナダ ハラミガキ	透孔徑0.6cm 6方向
59	54	65	遺物合層	土師器	高杯	-	5.5残	-	密	硬質	青褐色 浅青褐色	ハケ目後ナダ ハケ目後ナダ	透孔徑1.1cm 3方向
59	54	66	遺物合層	土師器	高杯	-	7.5残	(11.6)	粗	やや軟質	黃褐色 橙色	ハケ目ナダ ハケ目後ナダ	透孔徑0.9cm 4方向
59	54	67	遺物合層	土師器	鬱台	(17.8)	5.6残	-	密	硬質	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナダ ハラミガキ	山陰系菱形器
59	54	68	遺物合層	土師器	瓶	(6.8)	1.1	(4.4)	やや粗	硬質	乳白色 灰白色	回転ナダ、見込み 回転ナダ、切口回転	
59	54	69	遺物合層	土師器	瓶	8.1	1.3	4.0	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナダ 回転ナダ、底部 回転ナダ、底部、切り役静止ナダ	白色系
59	54	70	遺物合層	土師器	瓶	-	1.8残	4.4	密	やや軟質	淡黃褐色 淡黃褐色	回転ナダ 回転ナダ、底部 回転ナダ、底部、切り役静止ナダ	白色系 底部に板状痕
59	54	71	遺物合層	土師器	杯	(11.8)	3.8	4.4	密	硬質	淡青褐色 青褐色	回転ナダ 回転ナダ、底部 回転ナダ、底部、切り役静止ナダ	白色系
59	54	72	遺物合層	土師器	杯	-	3.6残	-	密	硬質	青白色 灰白色	回転ナダ 回転ナダ、底部 回転ナダ、底部、切り役静止ナダ	白色系
59	54	73	遺物合層	瓦質土器	足端	(19.7)	8.4残	-	粗	硬質	灰褐色 灰褐色	ナダ、ハケ目後ナダ ナダ、ハケ目後ナダ	外面部に墨付着
59	54	74	遺物合層	瓦質土器	足端	(23.1)	11.9残	-	密	硬質	灰褐色 赤褐色	ナダ、ハケ目後ナダ ナダ、ハケ目後丁寧なナダ	外面部に墨付着
59	54	75	遺物合層	瓦質土器	足端	20.4	12.5残	-	やや粗	硬質	灰褐色 灰褐色	ナダ後ナダ、底部 ナダ後ナダ、底部、ハラミガキ	外面部に墨付着
59	55	76	遺物合層	瓦質土器	足端	(22.2)	12.6残	-	密	硬質	灰白色 灰白色	ナダ後ナダ ナダ後ナダ、底部 ナダ後ナダ、底部、ハラミガキ	外面部底面に墨付着
59	55	77	遺物合層	瓦質土器	足端	(25.6)	11.6残	-	粗	硬質	青灰白色 灰白色	ナダ ナダ、ハラミガキ	外面部底面に墨付着
59	55	78	遺物合層	瓦質土器	足端	(22.8)	12.1残	-	やや粗	硬質	灰白色 灰白色	ハケ目ナダ 底部、ハケ目後丁寧なナダ ハケ目ナダ、底部、ハラミガキ	外面部に墨付着
60	55	79	遺物合層	瓦質土器	足端	(21.6)	14.2残	-	密	硬質	灰色 にぶい青褐色	ナダ ナダ、ハケ目後ナダ ナダ、ハケ目後ナダ	外面部に墨付着
60	55	80	遺物合層	瓦質土器	足端	(29.0)	11.8残	-	密	硬質	淡青褐色 青褐色	ナダ ナダ、ハケ目後丁寧なナダ ナダ、ハケ目後ナダ	外面部に墨付着
60	55	81	遺物合層	瓦質土器	足端	(28.5)	18.2残	-	密	硬質	青褐色 黑色	ナダ ナダ、ハケ目後ナダ	外面部に墨付着
60	55	82	遺物合層	瓦質土器	罐	(25.8)	11.6残	-	やや粗	硬質	青灰褐色 青褐色	ナダ ナダ、ハケ目後ナダ	外面部に墨付着
60	55	83	遺物合層	瓦質土器	罐	30.8	11.5残	-	密	硬質	青褐色 黒褐色	ナダ ナダ、ハケ目後丁寧なナダ	外面部に墨付着
60	55	84	遺物合層	瓦質土器	罐	(24.2)	8.8残	-	やや粗	硬質	灰白色 灰白色	ナダ ナダ、ハケ目後丁寧なナダ	外面部底面に炭化物付着
60	55	85	遺物合層	瓦質土器	罐	(24.4)	11.5残	-	密	硬質	青褐色 黒褐色	ナダ ナダ、ハケ目後ナダ	外面部底面に炭化物付着
60	55	86	遺物合層	瓦質土器	罐	(30.0)	7.9残	-	やや粗	硬質	黑褐色 灰褐色	ハケ目ナダ、ナダ ナダ、ハケ目後丁寧なナダ	80と同一個体か
60	55	87	遺物合層	瓦質土器	罐	(29.4)	12.9残	(14.6)	密	硬質	オリーバー黑色 青褐色	拂ナダ接目施文 ナダ、ハケ目後丁寧なナダ ナダ、ハケ目後丁寧なナダ	内面部下部に炭化物、外面部底面に 墨付着
60	56	88	遺物合層	瓦質土器	罐	(29.0)	11.8残	(14.4)	密	硬質	青褐色 灰白色	ナダ ナダ、ハケ目後丁寧なナダ ナダ、ハケ目後丁寧なナダ	内面部底面に炭化物付着
60	56	89	遺物合層	瓦質土器	罐	(28.2)	9.2残	-	密	硬質	淡青褐色 青褐色	ハケ目後ナダ ナダ、ハケ目後ナダ	内面部底面に墨付着
60	56	90	遺物合層	瓦質土器	把手	37	10.5残	3.7	粗	硬質	青褐色 灰褐色	ナダ ナダ、ハケ目後ナダ	内面部底面に墨付着
60	56	91	遺物合層	瓦質土器	足端	-	18.6残	-	密	硬質	青褐色 灰白色	ナダ ナダ、ハラミガキ	墨付着
60	56	92	遺物合層	瓦質土器	茎葉	(13.0)	4.9残	-	粗	硬質	青褐色 灰白色	ナダ ナダ、ハラミガキ	墨付着
60	56	93	遺物合層	瓦質土器	焰燒	(24.4)	5.2残	(21.2)	密	硬質	青褐色 灰褐色	ハケ目後ナダ ナダ、ハケ目後ナダ	墨付着
61	56	94	遺物合層	土製品	青灰土調	3.1 - 3.3	4.7	1.4	粗	密	青褐色 青褐色	ナダ ナダ、ハケ目後ナダ	重量443 g
61	56	95	遺物合層	土製品	青灰土調	3.1	5.0	1.8	粗	密	青褐色 灰褐色	ナダ ナダ、ハケ目後ナダ	重量263 g
61	56	96	遺物合層	土製品	青灰土調	2.2 - 2.4	2.3	0.6	粗	硬質	青褐色 青褐色	ナダ ナダ、ハケ目後ナダ	重量10.8 g 球形
61	56	97	遺物合層	鐵質	青灰土調	2.4	0.13	0.6	重	重	重	北宋 1023年鑄造	
61	56	98	遺物合層	鐵質	青灰土調	2.3	0.15	0.6	重	重	重	北宋 1078年鑄造 鐵質2枚付着 合計重量4.0 g	
61	56	99	遺物合層	鐵質	青灰土調	-	0.16	-	-	-	-	98.1付着	
61	56	100	遺物合層	鐵質	青灰土調	2.2	0.13	0.6	重	重	重	北宋 1054年鑄造 鐵質2枚付着	
61	56	101	遺物合層	石製品	3.7x1.9x0.5	1.5	6.0	2.3	粗	重	重	墨水晶 未製品	
61	56	102	遺物合層	石製品	3.7x1.9x0.5	2.9	0.8	4.3	粗	重	重	墨岩	
61	56	103	SK512	自然遺物	魚骨	0.8	0.6	0.08	重	重	重	サケ科(マスも含む) 鰓板3 点、尾椎1点	

VI 自然科学分析

1 下津令遺跡における放射性炭素年代測定

バレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展

(1)はじめに

防府市大字台道地内に位置する下津令遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

(2)試料と方法

試料No.1 (PLD-27928)は、西尾崎2地区土坑SK102の床面に近い下層埋土中から8世紀末～9世紀初頭の土器とともに出土した炭化材である。試料No.2 (PLD-27929)は、中ヶ原地区土坑SK605の床面付近埋土中から古代の土器とともに出土した炭化材である。試料No.3 (PLD-27930)は、向条谷地区炉SL301の床面付近から出土した炭化材である。試料No.4 (PLD-27931)は、向条谷地区炉SL401の床面付近から出土した炭化材である。試料No.5 (PLD-27932)は、向条谷地区堅穴建物SI401の床面付近埋土中から5世紀前半の土器とともに出土した炭化材である。試料No.6 (PLD-27933)は、向条谷地区性格不明遺構SX403の床面に広がる炭化材である。試料No.7 (PLD-27934)は、中ヶ原地区炉SL501の床面に広がる炭化材である。試料No.8 (PLD-27935)は、中ヶ原地区土坑SK514の埋土中層から出土した炭化材である。試料No.9 (PLD-27936)は、中ヶ原地区堅穴建物SI601の埋土中から5世紀前半の土器とともに出土した炭化材である。試料No.10 (PLD-27937)は、中ヶ原地区土坑SK605の埋土上層から古代の土器とともに出土した炭化材である。試料No.11 (PLD-27938)は、中ヶ原地区性格不明遺構SX703の煙道埋土中から出土した炭化したマツの葉である。なお、炭化材10点のうち、試料No.1とNo.10は最終形成年輪が確認され、その他8点は最終形成年輪の確認できない部位不明の炭化材であった。

試料は調製後、加速器質量分析計(バレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

(3)結果

表1に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が96.8%であることを示す。

第13表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
PLD-27928 試料No.1	-32.15 \pm 0.23	1223 \pm 19	1225 \pm 20	725-739 cal AD (11.4%) 768-778 cal AD (10.6%) 791-828 cal AD (27.4%) 839-864 cal AD (18.9%)	711-745 cal AD (18.3%) 765-883 cal AD (77.1%)
PLD-27929 試料No.2	-26.71 \pm 0.20	1205 \pm 19	1205 \pm 20	774-778 cal AD (3.8%) 790-829 cal AD (37.3%) 838-867 cal AD (27.0%)	769-886 cal AD (95.4%)
PLD-27930 試料No.3	-25.83 \pm 0.21	1272 \pm 19	1270 \pm 20	689-721 cal AD (39.0%) 741-767 cal AD (29.2%)	679-770 cal AD (95.4%)
PLD-27931 試料No.4	-27.01 \pm 0.20	1155 \pm 19	1155 \pm 20	778-790 cal AD (8.2%) 827-840 cal AD (5.6%) 864-900 cal AD (30.9%) 921-950 cal AD (23.4%)	776-794 cal AD (10.0%) 800-904 cal AD (55.1%) 917-966 cal AD (30.3%)
PLD-27932 試料No.5	-25.45 \pm 0.22	1573 \pm 20	1575 \pm 20	429-474 cal AD (37.1%) 485-496 cal AD (9.0%) 507-536 cal AD (22.1%)	424-540 cal AD (95.4%)
PLD-27933 試料No.6	-26.09 \pm 0.27	1588 \pm 22	1590 \pm 20	422-435 cal AD (10.6%) 451-471 cal AD (14.2%) 487-534 cal AD (43.4%)	416-539 cal AD (95.4%)
PLD-27934 試料No.7	-22.89 \pm 0.18	1223 \pm 20	1225 \pm 20	725-739 cal AD (11.3%) 768-779 cal AD (10.4%) 791-829 cal AD (27.3%) 838-865 cal AD (19.3%)	695-700 cal AD (0.7%) 710-745 cal AD (18.5%) 764-884 cal AD (76.2%)
PLD-27935 試料No.8	-25.28 \pm 0.22	1858 \pm 20	1860 \pm 20	125-180 cal AD (45.9%) 186-214 cal AD (22.3%)	85-225 cal AD (95.4%)
PLD-27936 試料No.9	-26.69 \pm 0.20	1874 \pm 20	1875 \pm 20	80-140 cal AD (62.7%) 197-207 cal AD (5.5%)	76-215 cal AD (95.4%)
PLD-27937 試料No.10	-27.39 \pm 0.22	1214 \pm 20	1215 \pm 20	771-779 cal AD (7.0%) 790-868 cal AD (61.2%)	721-740 cal AD (7.3%) 766-885 cal AD (88.1%)
PLD-27938 試料No.11	-26.73 \pm 0.19	1098 \pm 19	1100 \pm 20	901-921 cal AD (27.7%) 950-982 cal AD (40.5%)	893-990 cal AD (95.4%)

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の曆年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。

(4) 考察

以下、 2σ 曆年代範囲(確率95.4%)を基に結果を地区ごとに整理する。なお、試料No.1、No.10、No.11以外の試料は、最終形成年輪が確認されていない部位不明炭化材であるため、最終形成年輪からの年輪分に応じて枯死・伐採年代より古い年代となる古木効果の影響を考慮する必要がある。

西尾崎2地区土坑SK102の床面に近い下層埋土中より8世紀末～9世紀初頭の土器とともに出土した

炭化材である試料No.1 (PLD-27928)は、711-745 cal AD (18.3%) および765-883 cal AD (77.1%)となり、8世紀前半から9世紀後半の範囲を示した。これは、ともに出土した土器の時期と整合的である。

向条谷地区戸SL301の床面付近より出土した炭化材である試料No.3 (PLD-27930)は、679-770 cal AD (95.4%)となり、7世紀後半から8世紀後半の範囲を示した。

向条谷地区戸SL401の床面付近より出土した炭化材である試料No.4 (PLD-27931)は、776-794 cal AD (10.0%)、800-904 cal AD (55.1%)、917-966 cal AD (30.3%)となり、8世紀後半から10世紀後半の範囲を示した。

向条谷地区堅穴建物SI401の床面付近埋土中より5世紀前半の土器とともに出土した炭化材である試料No.5 (PLD-27932)は、424-540 cal AD (95.4%)となり、5世紀前半から6世紀前半の範囲を示した。これは、ともに出土した土器の時期と整合的である。

向条谷地区性格不明遺構SX403の床面より出土した炭化材である試料No.6 (PLD-27933)は、416-539 cal AD (95.4%)となり、5世紀前半から6世紀前半の範囲を示した。

中ヶ原地区戸SL501の床面より出土した炭化材である試料No.7 (PLD-27934)は、695-700 cal AD (0.7%)、710-745 cal AD (18.5%)、764-884 cal AD (76.2%)となり、7世紀末から9世紀後半の範囲を示した。

中ヶ原地区土坑SK605の床面付近埋土中より古代の土器とともに出土した炭化材である試料No.2 (PLD-27929)は、769-886 cal AD (95.4%)となり、8世紀後半から9世紀後半の範囲を示した。同じくSK605の埋土上層より古代の土器とともに出土した炭化材である試料No.10 (PLD-27937)は、721-740 cal AD (7.3%) および766-885 cal AD (88.1%)となり、8世紀前半から9世紀後半の範囲を示した。これらは、ともに出土した土器の時期と整合的である。

中ヶ原地区土坑SK514の埋土中層より出土した炭化材である試料No.8 (PLD-27935)は、85-225 cal AD (95.4%)となり、1世紀後半から3世紀前半の範囲を示した。

中ヶ原地区堅穴建物SI601の埋土中より5世紀前半の土器とともに出土した炭化材である試料No.9 (PLD-27936)は、76-215 cal AD (95.4%)となり、1世紀後半から3世紀前半の範囲を示した。これは、ともに出土した土器の時期よりも約100年以上古い。古木効果あるいは再堆積による可能性が考えられる。

中ヶ原地区性格不明遺構SX703の煙道埋土中より出土した炭化したマツの葉である試料No.11 (PLD-27938)は、893-990 cal AD (95.4%)となり、9世紀末から10世紀末の範囲を示した。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20. 日本第四紀学会.
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

2 下津令遺跡出土鉱滓の分析調査

日鉄住金テクノロジー(株)八幡事業所・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

(1) 調査の経緯

下津令遺跡は山口県防府市に所在する。調査区では明確な鍛冶関連遺構等は検出されていないが、3地区(西尾崎2地区、3地区、向条谷地区)から、鉱滓が出土している。そこで当地域での金属生産関連の様相を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

(2) 調査方法

(2)-1 供試材 第14表に示す。出土鉱滓5点の調査を行った。

(2)-2 調査項目

1) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

2) 顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μmと1μmで鏡面研磨した。観察には金属反射顕微鏡を用い写真撮影を行った。

3) EPMA(Electron Probe Micro Analyzer)調査

日本電子㈱製JXA-8800RL(波長分散型5チャンネル)にて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流 2.0×10^{-8} アンペア、ビーム径3μm、補正法はZAFに従った。反射電子像(COMP)は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これをを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

4) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO)：容量法。炭素(C)、硫黄(S)：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、五酸化磷(P₂O₅)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO₂)、砒素(As)：ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

(3) 調査結果

(3)-1 西尾崎2地区

SMT-1：鉱滓(遺物番号74)

1) 肉眼観察：やや小形で完形の鉱滓(87.0g)である。上面中央には細かい木炭痕による凹凸の著

しい突出部がある。この部分には小形の白色礫の囁み込みもみられる。また上面外周部は緩やかな流動状であるが、下面も細かい木炭痕による凹凸が著しい。津の地の色調は黒灰色で着磁性はほとんどみられない。

2)顕微鏡組織：津中には白色粒状結晶ウスタイト(Wustite : FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト(Fayalite : 2FeO·SiO₂)が素地の暗黒ガラス質津中に晶出する。また津中には微細な金属(およびスピネル：人工的な砒素化合物)粒が僅かに点在する。①②の明白白色粒は鉄(Fe)主体で銅(Cu)を含むスピネル(砒鉛)、③の橙色粒は銅(Cu)主体で鉄(Fe)を含む金属粒である。これらの組成に関してはEPMA調査の項で詳述する。

3) EPMA調査：津中の白色樹枝状結晶の定量分析値は97.9%FeO - 1.1%Al₂O₃ (分析点1)であった。ウスタイト(Wustite : FeO)で、微量アルミナ(Al₂O₃)を固溶する。淡灰色柱状結晶の定量分析値は56.2%FeO - 8.2%CaO - 31.7%SiO₂ (分析点2)であった。灰鉄かんらん石(Kirschsteinite : 2(Fe,Ca)O·SiO₂)に同定される。素地部分の定量分析値は41.2%SiO₂ - 20.7%Al₂O₃ - 14.3%CaO - 5.2%K₂O - 1.2%Na₂O - 17.9%FeO (分析点3)であった。非晶質硅酸塩である。また津中の微細明色粒は、反射電子像をみると内外で色調が異なる。特性X線像では外周部と対応して砒素(As)に強い反応がみられる。定量分析値は外側が60.7%Fe - 4.4%Cu - 31.9%As (分析点4)、内側が87.8%Fe - 1.2%Cu - 10.6%As (分析点5)であった。ともに鉄(Fe)主体で銅(Cu)を含むスピネルである。さらにもう1箇所、津中の微細な橙色粒(Photo. 1 ③)の調査を実施した。特性X線像では銅(Cu)に強い反応がある。定量分析値は99.8%Cu - 4.4%Fe (分析点6)であった。銅(Cu)主体で鉄(Fe)を含む金属粒である。

4) 化学組成分析：全鉄分(Total Fe)は53.34%と高い割合を占める。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.05%、酸化第一鉄(FeO)が59.35%、酸化第二鉄(Fe₂O₃)10.24%の割合であった。造津成分(SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)は27.21%で、塩基性成分(CaO + MgO)の割合は5.13%と高めであった。また二酸化チタン(TiO₂)は0.14%、バナジウム(V)0.01%、酸化マンガン(MnO)が0.17%といずれも低値であった。銅(Cu)は0.01%である。当鉱津中には銅(Cu)主体で鉄(Fe)を含む金属粒と、鉄主体のスピネル(砒鉛)が確認されたことから、銅津の可能性が高いと考えられる。

SMT-2 : 楠形鍛冶津(遺物番号72)

1)肉眼観察：平面不整楕円状で、ほぼ完形の楢形鍛冶津(110.7g)である。上面端部には羽口先端の小破片とその溶融物(黒色ガラス質津)が付着する。羽口胎土中には真砂(花崗岩の風化砂)が混和されており、熱影響を受けた石英・長石類などが多数混在する。下面には細かい木炭痕による凹凸が残る。津の地の色調は暗灰色で、着磁性がある。表面には微細な気孔が点在するが、重量感のある津である。

2)顕微鏡組織：津中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色盤状結晶ファヤライトが晶出する。また不定形明灰色部は錆化鉄である。②は錆化鉄部の拡大で、微かに亜共析組織(C<0.77%)の痕跡が残存する。

3) EPMA調査：白色粒状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、酸素(O)に強い反応がみられる。定量分析値は100.2%FeO (分析点8)であった。ウスタイト(Wustite : FeO)に同定される。暗色多角

形結晶は特性X線像では鉄(Fe)、アルミニウム(Al)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は50.3%FeO-51.3%Al₂O₃(分析点9)であった。ヘルシナイト(Hercynite: FeO·Al₂O₃)に同定される。淡灰色盤状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、珪素(Si)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は69.7%FeO-30.8%SiO₂(分析点10)であった。ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)に同定される。また津中の微細な明白色粒は特性X線像では鉄(Fe)にのみ強い反応がある。定量分析値は104.5%Fe(分析点3)で、金属鉄(Metallic Fe)である。

4) 化学組成分析: 全鉄分(Total Fe) 49.97%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.08%、酸化第一鉄(FeO) 45.63%、酸化第二鉄(Fe₂O₃) 20.62%の割合であった。造済成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 29.96%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は0.86%と低値であった。主に製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.12%、バナジウム(V) 0.01%、酸化マンガン(MnO)が0.06%と低値であった。また銅(Cu)も<0.01%と低値である。当鉱津は内部に微細な金属鉄(またはその鉄化物)が確認されること、また鉱津(SMT-1)とは異なり、ライム(CaO)の割合が非常に低いことから鉄津と判断される。さらに砂鉄起源の脈石成分(TiO₂、V)も低減傾向が顕著であり、鍛錬鍛冶津に分類される。

(3)-2 西尾崎3地区

SMT-3: 錫冶津(遺物番号73)

1) 肉眼観察: やや小形で不定形の鍛冶津(70.8g)である。上面は比較的平坦で、下面是木炭痕による凹凸が著しい。津の地の色調は暗灰色で、着磁性がある。

2) 顕微鏡組織: 津中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。不定形明白色部は鉄化鉄である。②は鉄化鉄部の拡大で、過共析組織(C>0.77%)の痕跡が残存する。

3) EPMA調査: 白色粒状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は98.6%FeO(分析点11)で、ウスタイト(Wustite: FeO)に同定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、珪素(Si)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は68.6%FeO-1.7%MgO-1.0%CaO-30.9%SiO₂(分析点12)であった。ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)で、微量ライム(CaO)、マグネシア(MgO)を固溶する。素地部分の定量分析値は42.0%SiO₂-17.9%Al₂O₃-9.3%CaO-7.3%K₂O-2.3%Na₂O-24.9%FeO(分析点13)であった。非晶質硅酸塩である。また津中の微細な明白色粒は特性X線像では鉄(Fe)にのみ強い反応がある。定量分析値は104.5%Fe(分析点4)であった。金属鉄(Metallic Fe)である。

4) 化学組成分析: 全鉄分(Total Fe)は55.06%と高値である。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.05%、酸化第一鉄(FeO)が30.76%、酸化第二鉄(Fe₂O₃) 44.45%の割合であった。造済成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)が17.23%とやや低めで、塩基性成分(CaO+MgO)の割合も0.96%と低い。主に製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)も0.08%、バナジウム(V)が0.01%と低値であった。また酸化マンガン(MnO)は0.18%、銅(Cu)<0.01%と低値である。当鉱津は内部に微細な金属鉄、および過共析組織痕跡の残る比較的まとまった鉄化鉄部が確認されることから鉄津と判断される。鉄酸化物主体で砂鉄起源の脈石成分(TiO₂、V)は低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶津に分類される。高炭素鋼の鍛打加工に伴う反応副生物と推測される。

(3)-3 向条谷地区

SMT-4 : 梶形鍛冶津(遺物番号229)

1)肉眼観察：やや大形で完形の楕形鍛冶津(404.7g)である。上側2箇所(短軸両端)は鍛冶炉の炉壁片と推測される。強い熱影響を受けており、内面は黒色ガラス質化している。外面側も中小の気孔が多数散在する。また炉壁胎土中には真砂(花崗岩の風化砂)が多量に混和されている。津部の地の色調は灰褐色で、着磁性がある。表面はやや風化気味である。また表面の気孔は少なく、重量感のある津である。

2)顕微鏡組織：右上は炉壁内面の黒色ガラス質津の拡大である。強い熱影響を受けて素地の粘土鉱物は完全に非晶質化している。またガラス質津中には石英・長石類などの砂粒が多数混在するが、これは炉材粘土中に混和されたものと推定される。一方、左下の明色部は鍛冶津である。灰褐色多角形結晶マグнетай特(Magnetite : FeO · Fe₂O₃)、灰色針状結晶イスコライ特(Iscoelite : 5FeO · Fe₂O₃ · SiO₁₀)、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

3) EPMA 調査：微細な暗灰色結晶の定量分析値は21.2%CaO - 8.9%MgO - 12.1%FeO - 49.0%SiO₂(分析点14)であった。オージャイド(Augite : (Ca,Mg,Fe) 2Si₂O₆)と推定される。素地部分の定量分析値は53.9%SiO₂ - 13.3%Al₂O₃ - 9.6%CaO - 5.1%K₂O - 13.5%FeO(分析点15)であった。非晶質硅酸塩である。反射電子像右下の暗色粒の定量分析値は99.0%SiO₂(分析点16)で、石英(Quartz : SiO₂)に同定される。炉材粘土中に混和された砂粒と推察される。また左上の微細な明白色粒の定量分析値は98.1%Fe(分析点5)であった。金属鉄(Metallic Fe)である。さらにもう1箇所津部の調査を実施した。反射電子像(COMP)をPhoto.4⑤に示す。明灰色多角形結晶の定量分析値は82.7%FeO - 10.3%Al₂O₃(分析点17)であった。マグネットай特(Magnetite : FeO · Fe₂O₃)とヘルシナイト(Hercynite : FeO · Al₂O₃)を主な端成分とする固溶体と推定される。白色粒状結晶の定量分析値は97.4%FeO - 1.1%Al₂O₃(分析点18)であった。ウスタイト(Wustite : FeO)で、微量アルミニウム(Al₂O₃)を固溶する。また灰色針状結晶の定量分析値は87.1%FeO - 9.3%SiO₂ - 3.0%Al₂O₃(分析点19)であった。イスコライ特(Iscoelite : 5FeO · Fe₂O₃ · SiO₁₀)と推定される。淡灰色柱状結晶の定量分析値は69.4%FeO - 1.6%MgO - 30.7%SiO₂(分析点20)であった。ファヤライト(Feyalite : 2FeO · SiO₂)で、微量マグネシア(MgO)を固溶する。さらに素地部分の定量分析値は47.8%SiO₂ - 18.7%Al₂O₃ - 9.3%CaO - 8.0%K₂O - 3.1%Na₂O - 15.8%FeO(分析点21)であった。非晶質硅酸塩である。

4) 化学組成分析：全鉄分(Total Fe)45.60%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.06%、酸化第一鉄(FeO) 48.27%、酸化第二鉄(Fe₂O₃)11.48%の割合であった。造津成分(SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)35.01%と高めであるが、塩基性成分(CaO + MgO)の割合は18.4%と低い。主に製鉄原料砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.15%、バナジウム(V)が0.01%と低値であった。また酸化マンガン(MnO)も0.11%と低値で、銅(Cu)は0.01%であった。当鉄津中にても微細な金属鉄粒が確認されることから、鉄津と判断される。砂鉄起源の脈石成分(TiO₂, V)は低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶津に分類される。鉄分はやや低めで、炉材粘土溶融物(ガラス質津)の影響が大きい津であった。

SMT-5：楕形鍛冶滓(含鉄)

1)肉眼観察：平面不整円形で完形の楕形鍛冶滓(247.0g)である。表面は広い範囲で茶褐色の土砂や鉄錆化物が付着する。特殊金属探知器のH(○)で反応があるため、内部にごく微細な金属鉄が残存する可能性がある。上面は比較的平坦で下面はやや深めの楕形を呈する。下面には最大長さ7mm程の小形の木炭が少量付着する。滓の地の色調は黒灰色で着磁性がある。表面の気孔は少なく緻密で重量感のある滓である。

2)顕微鏡組織：滓中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中にはごく微細な金属鉄が多数散在する。3%ナイトルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト(Ferrite: α鉄)単相の組織のもの(②左下)から、亜共析組織のもの(③左下)まで確認された。

3) EPMA調査：介在物の定量分析値は56.7%FeO-33.7%SiO₂-6.1%Al₂O₃-2.0%CaO-3.0%K₂O(分析点22)、54.9%FeO-34.0%SiO₂-6.0%Al₂O₃-2.1%CaO-3.3%K₂O(分析点23)であった。鉄分の高い非晶質硅酸塩系の介在物と推定される。さらに1箇所滓部の調査を実施した。白色粒状結晶の定量分析値は99.5%FeO(分析点24)であった。ウスタイト(Wustite: FeO)に同定される。淡灰色柱状結晶の定量分析値は68.1%FeO-2.4%CaO-30.2%SiO₂(分析点25)であった。ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)で、微量ライム(CaO)を固溶する。黒色結晶の定量分析値は17.1%K₂O-62.8%SiO₂-25.1%Al₂O₃-1.1%FeO(分析点26)であった。オルソクレース(Orthoclase: KAlSi₃O₈)と推定される。また素地部分の定量分析値は37.8%SiO₂-18.9%Al₂O₃-13.9%CaO-4.8%K₂O-2.2%Na₂O-1.0%P₂O₅-24.0%FeO(分析点27)であった。

4)化学組成分析：全鉄分(Total Fe)49.00%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.90%、酸化第一鉄(FeO)25.65%、酸化第二鉄(Fe₂O₃)40.27%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)15.82%と低めで、塩基性成分(CaO+MgO)の割合も1.21%と低い。主に製鉄原料砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.11%、バナジウム(V)が0.01%と低値であった。酸化マンガン(MnO)は0.56%とやや高めで、銅(Cu)は<0.01%と低値である。当鉄滓中には鍛打加工の痕跡のほとんどない微細な金属鉄(軟鉄)が多数散在する。この特徴から熱間での鍛打加工初期段階の反応副生物(鍛錬鍛冶滓)と推定される。

(4)まとめ

下津令遺跡から出土した鉱滓5点を調査した結果、次の点が明らかとなった。

(4)-1 西尾崎2地区出土遺物

1)鉱滓(SMT-1・遺物番号74)中は銅滓の可能性が高いと判断される。EPMAによる組成調査の結果、滓中には鉄(Fe)主体で銅を含むスパイス(人工的な砒素化合物：砒鉄)と、銅(Cu)主体で少量鉄(Fe)を含む金属粒が確認された。古代の鉄器遺跡で出土する銅関連遺物には、しばしば砒素(As)が高い割合で含まれることは研究史上非常に早い時期から指摘されている^(注1)。特に古代の国産銅と砒素の問題は、東大寺大仏殿西回廊隣接地の銅関連遺物の分析調査^(注2)とほぼ前後して開始された山口県長登銅山跡の発掘調査成果^(注3)により注目されている。こうした近い距離に所在する長門周辺の産銅地から、銅素材として比較的銅品の低い原料[「生銅」または「未熟銅」^(注4)]が搬入され、遺跡内

でその精製または銅(青銅)製品が製作されていた可能性がある。ただし当鉱滓は銅滓としては銅(Cu)、砒素(As)等の含有率が低く、今回の調査でも1点確認されたのみである。作業内容の詳細については慎重に判断していく必要がある。

2) 梶形鍛治滓(SMT-2・遺物番号72)は鉄素材を熱間で鍛打加工した際に生じる鍛錬鍛治滓と推定される。微細な金属鉄粒が確認され銅滓(SMT-1)のような砒素(As)、銅(Cu)の影響はみられない。

(4)-2 西尾崎3地区出土遺物

梶形鍛治滓(SMT-3・遺物番号73)は鉄酸化物主体で砂鉄起源の脈石成分(TiO₂、V)の低減傾向が著しく鍛錬鍛治滓に分類される。主に熱間での加工に伴う吹き減り(酸化に伴う損失)で生じた滓である。過共析組織痕跡の残るまとまった錆化鉄部が確認され高炭素鋼の鍛打加工に伴う反応副生物と推測される。

(4)-3 向条谷地区出土遺物

梶形鍛治滓2点はともに鍛錬鍛治滓に分類される。梶形鍛治滓(SMT-4・遺物番号229)は上側面に炉材粘土溶融物(石英等の砂粒を含むガラス質滓)が付着しており、炉材起源の造滓成分(SiO₂主成分)の割合の高い滓であった。また梶形鍛治滓(SMT-5)は鍛打加工の痕跡のほとんどない微細な金属鉄(軟鉄)が多数散在する。この特徴から、熱間での鍛打加工初期段階の反応副生物と推定される。

(注) (1) 甲賀宣政「古銭貨の実質の分析」「水曜会誌」第八号1911

(2) 久野雄一郎「東大寺大仏の銅原材料についての考察」「櫻原考古学研究所紀要 考古学論叢」第14冊1990

(3) 「長登銅山跡Ⅰ～Ⅲ」美東町教育委員会 1990、1993、1998

(4) 葉賀七三男「古代長門の銅生産について」「山口県地方史研究」50号 山口県地方史学会 1983

第14表 供試材の履歴と調査項目

件号	遺跡名	遺物番号	地区名	出土位置	遺物名称	計数	調査項目						参考	
							大きさ(cm)	重さ(g)	マクロ 組織	ミクロ 組織	X線回析	EPMA	化学分析	耐火度 含口率
SMT1	74	西尾駄28区K	柱SPL103	柱SPL103	複形鉛治溝	67.5×61.9×37.8	87.0	なし	○	○	○	○	○	参考
SMT2	72	西尾駄28区K	柱SPL1028	柱SPL1028	複形鉛治溝	67.5×51.9×36.5	110.7	なし	○	○	○	○	○	参考
SMT3 下津	73	西尾駄33区K	柱SPL2016	柱SPL2016	複形鉛治溝	59.5×62.3×26.8	70.8	焼化(△)	○	○	○	○	○	参考
SMT4	229	同条件海区	底S1001	底S1001	複形鉛治溝	114.1×85.3×82.8	404.7	なし	○	○	○	○	○	参考
SMT5	なし				遺物合観	79.6×70.9×43.2	217.0	H(△)	○	○	○	○	○	参考

第15表 供試材の化学組成

件号	遺跡名	地区名	遺物名称	区分	金属	Fe	Mn	Ni	Cu	Pb	Zn	As	S	調査結果			
														Fe	Al	Si	
SMT1	74	西尾駄2区	複形鉛治溝	複形鉛治溝	複形鉛治溝	53.34	0.05	1.77	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	53.34	1.77	0.01	
SMT2	72	西尾駄2区	複形鉛治溝	複形鉛治溝	複形鉛治溝	69.97	0.08	55.63	20.62	22.17	5.89	0.57	0.29	0.17	69.97	55.63	20.62
SMT3 下津	73	西尾駄3区K	複形鉛治溝	複形鉛治溝	複形鉛治溝	55.06	0.05	30.76	44.45	12.58	3.16	0.71	0.25	0.08	55.06	30.76	44.45
SMT4	229	同条件海区	複形鉛治溝	複形鉛治溝	複形鉛治溝	55.60	0.06	38.27	11.98	26.66	5.34	1.33	0.51	0.11	55.60	38.27	11.98
SMT5	なし		遺物合観	複形鉛治溝(含金)	複形鉛治溝(含金)	59.00	0.90	25.65	59.27	11.36	2.57	0.98	0.23	0.10	59.00	25.65	59.27

第16表 出土遺物の調査結果のまとめ

件号	遺跡名	地区名	出土位置	遺物名称	調査結果	調査結果						所見		
						Total	FeO	磁性鉄分	TiO ₂	V	MoO	高錠 合金		
SMT1	74	西尾駄2区K	柱SPL03	柱SPL03	複形鉛治溝	赤鉄 W+SiO ₂ 、微小金属、赤バレイス、赤玉子	53.34	10.24	5.13	0.14	0.01	0.17	27.21	0.01
SMT2	72	西尾駄2区K	柱SPL1028	柱SPL1028	複形鉛治溝	赤鉄 W+SiO ₂ 、微小金属、赤バレイス、赤玉子	69.97	20.62	0.86	0.12	0.01	0.06	29.96	<0.01
SMT3 下津	73	西尾駄3区K	柱SPL2016	柱SPL2016	複形鉛治溝	赤鉄 W+SiO ₂ 、微小金属、赤バレイス、赤玉子	55.06	44.15	0.96	0.08	0.01	0.18	17.23	<0.01
SMT4	229	同条件海区	底S1001	底S1001	複形鉛治溝	ガラス質重石英質、角閃石質、斜長石質 + Magnetite + Olivine	55.60	11.18	1.84	0.15	0.01	0.11	35.01	<0.01
SMT5	なし		遺物合観	複形鉛治溝(含金)	赤鉄 W+SiO ₂ 、微小金属、赤バレイス、赤玉子	69.00	40.27	1.21	0.11	0.01	0.36	15.82	<0.01	

W : Wustite(FeO)、M : Magnetite(FeO·Fe₂O₃)、H : Hematite(FeO·Fe₂O₃)、Or : Orthoclasie(KAlSi₃O₈)、F : Fayalite(2[Fe,Ca]O·SiO₄)、K : Kirschensteinite [2(Fe,Ca)O·SiO₄]、

VII 総括

1 はじめに

今年度の調査区の西尾崎2・3地区、向条谷地区、中ヶ原地区は、昨年度調査区の北西側に位置する。調査の結果、遺跡の北西方向への広がりを確認でき、西尾崎2・3地区は古代と中世、向条谷地区は古墳時代から中世まで、中ヶ原地区は古墳時代と中世後半をそれぞれ主体とする集落跡であることも明らかとなった。以下、昨年度の調査も踏まえ、今年度の3つの地区的特徴的な事項について述べ、調査成果の総括をしたい。

2 西尾崎2・3地区について

西尾崎2・3地区で人々が定住した痕跡が認められるのは古代に入ってからである。2地区と3地区とでは掘立柱建物の存立した時期に明確な差が見られる。標高がほぼ6～7mの2地区の建物はほぼ8世紀後半から9世紀初頭に比定されるのに対し、標高が7～7.5mの3地区の建物は中世に比定される。2地区的建物は南に隣接する昨年度調査区の西尾崎1地区の古代の建物と標高がほぼ等しく、棟方向も一致している。これらはほぼ同時期の建物と考えられ、1つの集落を形成していたと言える。西尾崎地区の北西約100mに位置する向条谷地区の古代の建物も標高6～7mに収まっており、周辺ではこの標高に当時の集落が広がっていた可能性を指摘できる。また2地区的掘立柱建物は柱穴の規模・床面積が1地区より大きいものが多いことから、2地区が古代の集落の中心付近に位置していたとみなしてよいであろう。中世になると、2地区から生活の痕跡は減少し、逆に古代の遺構がほとんど見られなかった3地区で、中世の掘立柱建物をはじめ遺構や遺物が増加する。2地区から標高の高い3地区へ居住空間が移ったものとも考えられるが、西尾崎地区的300m南東に位置する昨年度調査区の沖ノ下1地区では、中世後半の集落跡が標高5m付近で確認されていることから、中世には人口増加に伴い集落が面的に広がっていったとも捉えられる。

2地区のSK102からは、海水または鹹水を煮詰める煎熬に用いた製塩土器の可能性のある土師器(19)が何らかの祭祀行為の痕跡をとどめた形で出土した。土器の形状は、外面をタタキによる調整ではなくハケ目の後ナデを施している点を除けば、福岡市海の中道遺跡、下関市筏石遺跡、六連島遺跡などで出土している煎熬用の玄界灘式土器に類似する。またSK102近くの2つの柱穴からは六連式土器と呼ばれる製塩土器(5・6)も出土した。六連式土器は煎熬用土器で作られた粗塙を焼き固める工程で用いられるとともに、運搬用の機能も持つと考えられている。塩の消費遺跡からも出土しているが、煎熬用の可能性がある土器の出土、眼前に海が広がっていた当時の2地区的状況を考えれば、製塩用と考えるのが自然であろう。向条谷地区的SD401からは美濃ヶ浜式製塩土器の可能性がある台脚部(35)も出土している。当遺跡では早い段階から土器製塩が営まれ、それは少なくとも8世紀末から9世紀初頭まで続けられたと考えられる。

2地区では地床炉と考えられる遺構(SL101・102・103)が3基検出された。このうちSL103出土の鉛滓(74)は金属学的分析の結果、銅滓の可能性が高いという所見を得ている。鋳型や坩埚等鋳造に関わる遺物が検出されていないため、SL103は精錬炉や鍛冶炉の可能性がある。下津令遺跡の北西4kmに位置する切畠南遺跡では銅精錬工房や精錬炉と考えられる遺構が確認され、付近の金山で採錬した可能性も指摘されている。こうした産銅地から銅素材が搬入され精錬加工したとも考えられる。ただ銅の溶解温度を下げるにされ古代の銅関連遺物に含まれることが多い砒素の含有率が少なく、また今回は1点のみの出土であることから、今後の追検証が必要である。また2地区的SP1028、3地区的SP2016からは鉄の鍛錬鍛冶滓(72・73)が出土した。

痕跡の規模などから、他所から搬入した精錬素材を集落内の需要を満たす程度に加工していたものであろう。

3 向条谷地区について

向条谷地区中央に位置する方形の竪穴建物SI401は出土遺物などから古墳時代前期に比定される。昨年度の調査でも古墳時代前期の竪穴建物が確認されたが、当時、当遺跡で定住が始まっていたとする昨年度の所見を補強する結果となった。古代から中世にかけて掘立柱建物や土坑の数が増加するが、建物や柱穴は調査区北部に多く集まる。調査区の南方向山側は谷筋となっており、南部は居住地としてあまり適さなかったものと考えられる。その南部から調査区中央を北流するSD401から出土した須恵器を中心とする土器群は共伴関係をよく示し、この地域の古代前半の編年を考える上で良好な一括資料である。

また調査区南部から中央付近にかけては、出土遺物などから中世中頃に堆積したと考えられる遺物包含層が広がっていた。包含層は調査区西側の市道に並行する40mの段を覆っており、中世中頃には何らかの区画整理または改修が行われていたことがうかがわれる。包含層の遺物には、多量の須恵器や瓦質土器とともに綠釉陶器や青磁、白磁が多く含まれ、さらに古代の平瓦(198)も出土している点が注目される。このうち綠釉陶器は約15点出土し、約半数は長門産、残りは近江・京都産と考えられる。調査区の南方向には繁枝神社、西には瑞光寺が置かれたとする記録が残るが、それらとの関連は不明確である。

4 中ヶ原地区について

中ヶ原地区は標高が16~24mと他の2地区より10m以上高い丘陵上に位置し、地形的にやや様相を異にする。また土地を削平し水田の区画整理を広く行った様子がうかがえた。集落の存立が確認された時期は他地区とあまり変わらないが、調査区北部の丘陵先端で縄文時代の落とし穴と考えられる遺構が4基確認された。いずれも長軸100~150cmの隅丸長方形で床面に径が20~30cmのピットを持つ。落とし穴の配置状況や個数が少ないとことなどから積極的な追い込み獵用のものではなく、消極的な狩猟(罠猟)の目的を持つものと考えられる。当遺跡が縄文時代には狩猟の場として利用されていた可能性を指摘できる。調査区中央部から北部にかけては古墳時代前半を中心とする遺構や遺物が確認された。SI601・602はその頃の竪穴建物で、SI601の床面に近い埋土中からは布留式の甕(5・6・7)、畿内系器台(9)などが出土した。向条谷地区や沖ノ下1地区の竪穴建物もほぼ同時期のもので、当時の居住範囲は当遺跡全体に及んでいたことがわかる。

調査区南部は中世後半を主体とする集落跡で、掘立柱建物や溝が確認されたが、遺物包含層を含む谷地形が広がり、また後世の削平を受けた箇所も多く遺構密度は低かった。谷地形上段の遺物包含層からは弥生時代終末期の壺や高杯が出土しており、上流部の調査区西側には同時期の遺構が存在する可能性がある。

5 おわりに

今回の調査で3つの地区的歴史的変遷を明らかにする上で貴重な資料を得ることができた。しかしこれまでの調査対象範囲が広域に点在することもあり、遺跡全体の詳細な特徴を明らかにすることまでは至っていない。今後、下津令遺跡の他地区の調査が重ねられ、これまでの調査成果と合わせて総合的に検討することで、当該地域の過去の人々の生活がより鮮明になることを期待したい。

引用・参考文献

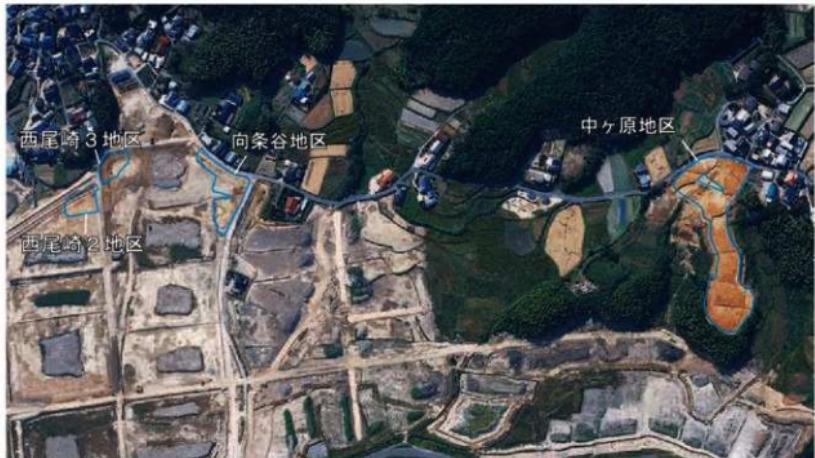
- 山口県「山口県史 資料編 考古1」2000 山口県「山口県史 資料編 考古2」2004
山口県文書館「防長風土注進案」1964 山口県埋蔵文化財センター「切畠南遺跡II」2000

西尾崎 2・3 地区図版



調査区遠景 上空より瀬戸内海を望む（北西から）

図版 1



平成 26 年度調査区全景（合成写真）

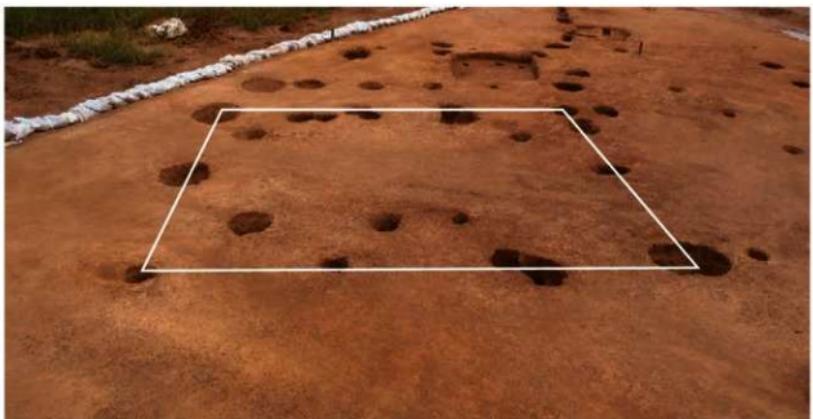


西尾崎 2・3 地区全景

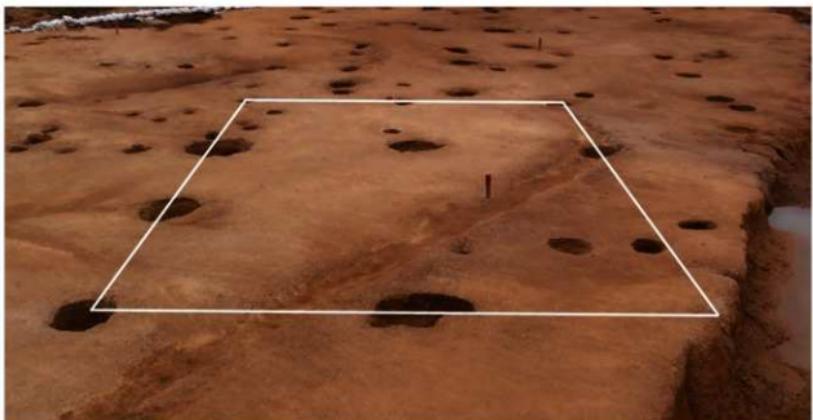
図版 2



西尾崎 3 地区東壁土層断面（西から）

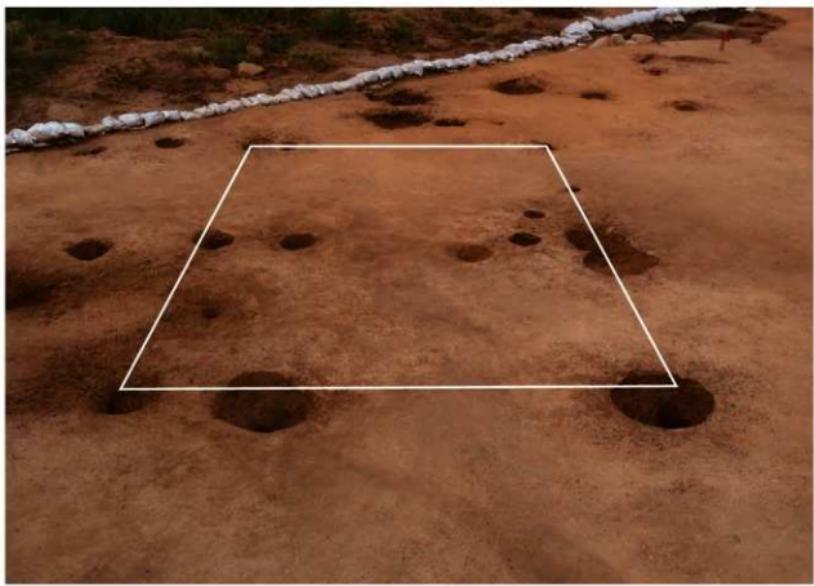


SB101 完掘状況（西から）



SB103 完掘状況（西から）

図版 3

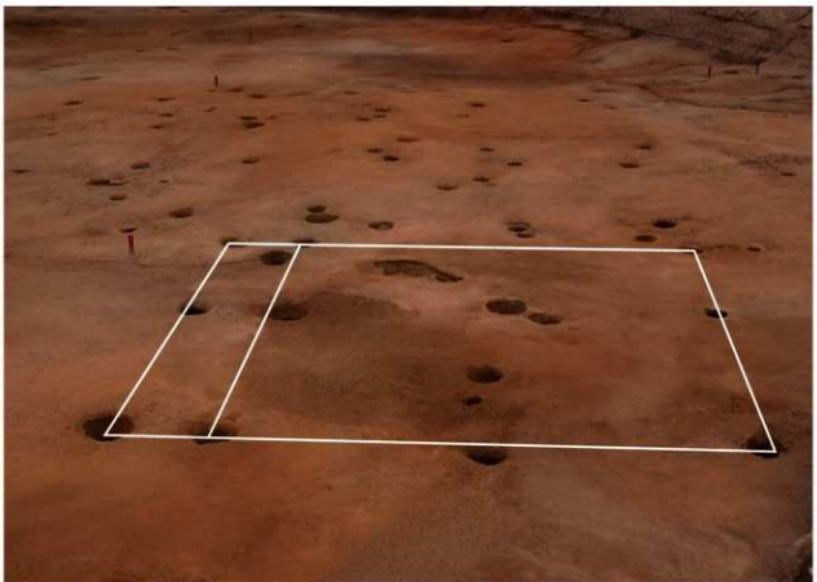


SB104 完掘状況（西から）



SB201 完掘状況（北から）

図版 4



SB203 完掘状況（西から）



SK105 遺物出土状況（北から）



SK102 遺物出土状況（南から）



SK102 完掘状況（南から）

図版 6



SL101・102・103 検出状況（西から）



SL101 土層断面（東から）



SL102 検出状況（南から）



SL103 完掘状況（南から）



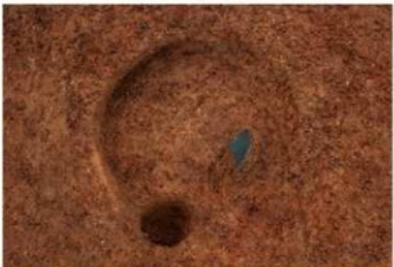
SD104 土層断面 (b-b')（西から）



SD104 土層断面 (c-c')（西から）



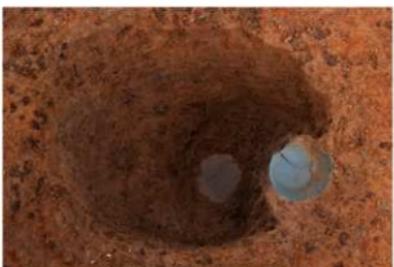
SP1001 (SB104) 遺物出土狀況



SP1007 遺物出土狀況



SP1008 遺物出土狀況



SP1009 遺物出土狀況



SP1011 遺物出土狀況



SP1016 遺物出土狀況



SP1017 遺物出土狀況



SP1026 (SB101) 遺物出土狀況

图版 8



SP1018 遺物出土狀況



SP2001 (SB201) 遺物出土狀況



SP2002 (SB201) 遺物出土狀況



SP2005 (SB201) 遺物出土狀況

図版 9



出土遺物（1）

図版 10



19



16



17



18



20



21



23



22



24

出土遺物（2）

図版 11



出土遺物（3）

図版 12



出土遺物（4）



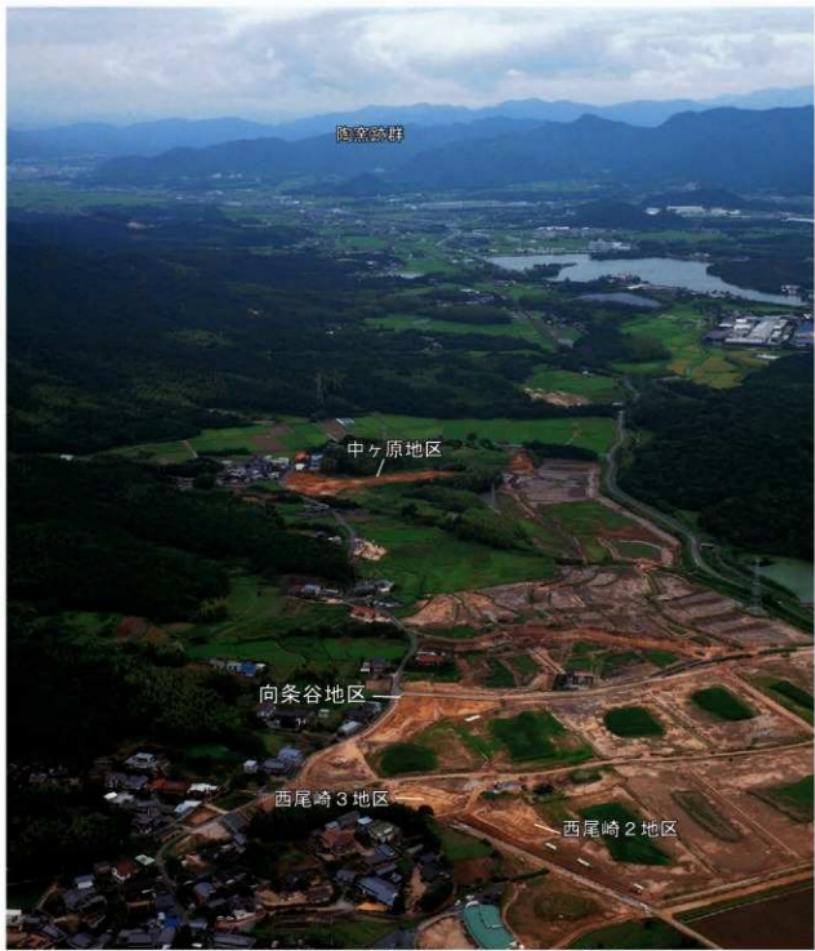
出土遺物（5）

図版 14



出土遺物（6）

向条谷地区図版



調査区遠景 上空より陶窯跡群方面を望む（南東から）



向条谷地区全景

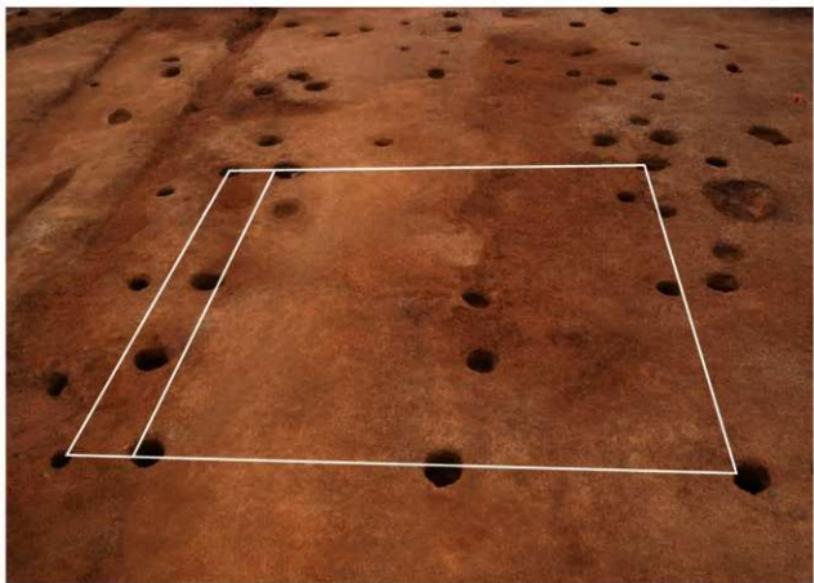
図版 16



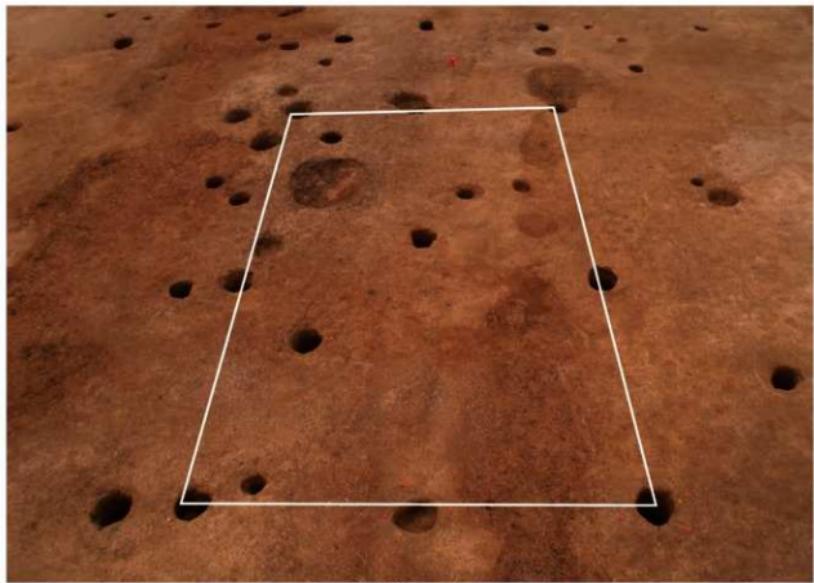
SI401 遺物出土状況（南から）



SI401 完掘状況（東から）

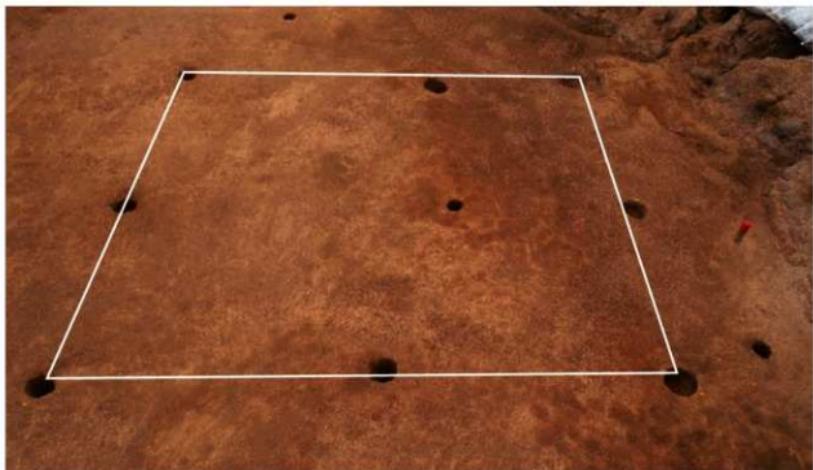


SB302 完掘状況（南から）

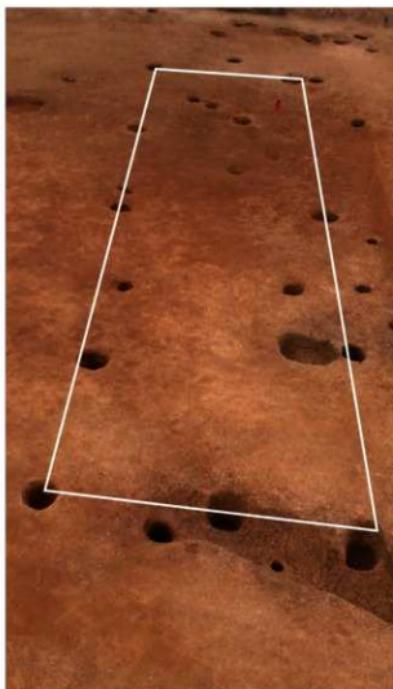


SB303 完掘状況（南から）

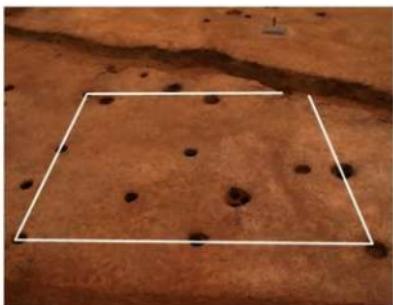
図版 18



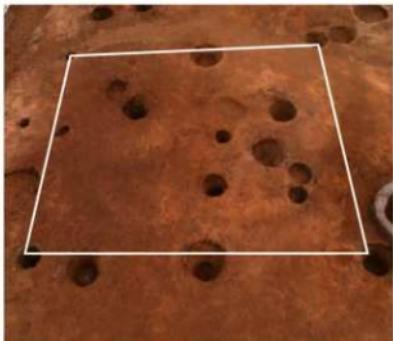
SB401 完掘状況（東から）



SB402 完掘状況（南から）



SB403 完掘状況（西から）



SB405 完掘状況（北から）



SK308 完掘状況（東から）



SK309 遺物出土状況（東から）



SL301 土層断面（西から）



SD408 遺物出土状況（北から）



SL401 土層断面（南から）

図版 20





SD401 土器 k · l 出土状況（東から）



SE401 遺物出土状況（東から）

図版 22



SP3001 (SB302) 遺物出土状況



SP3016 遺物出土状況



SP3018 遺物出土状況



SP3025 (SB303) 遺物出土状況



SP3049 遺物出土状況



SP4061 (SB402) 遺物出土状況



SP4068 (SB403) 遺物出土状況



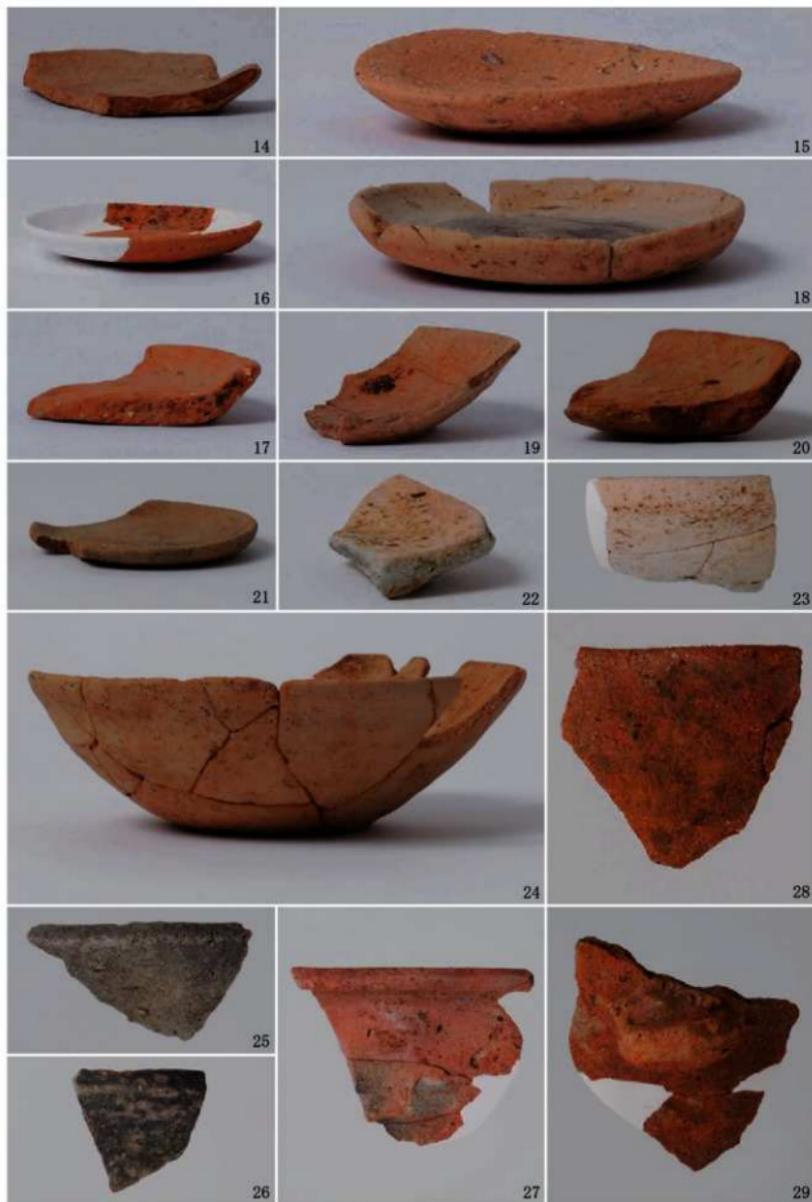
SP4083 (SB404) 遺物出土状況

図版 23



出土遺物（1）

図版 24



出土遺物（2）



出土遺物 (3)

図版 26

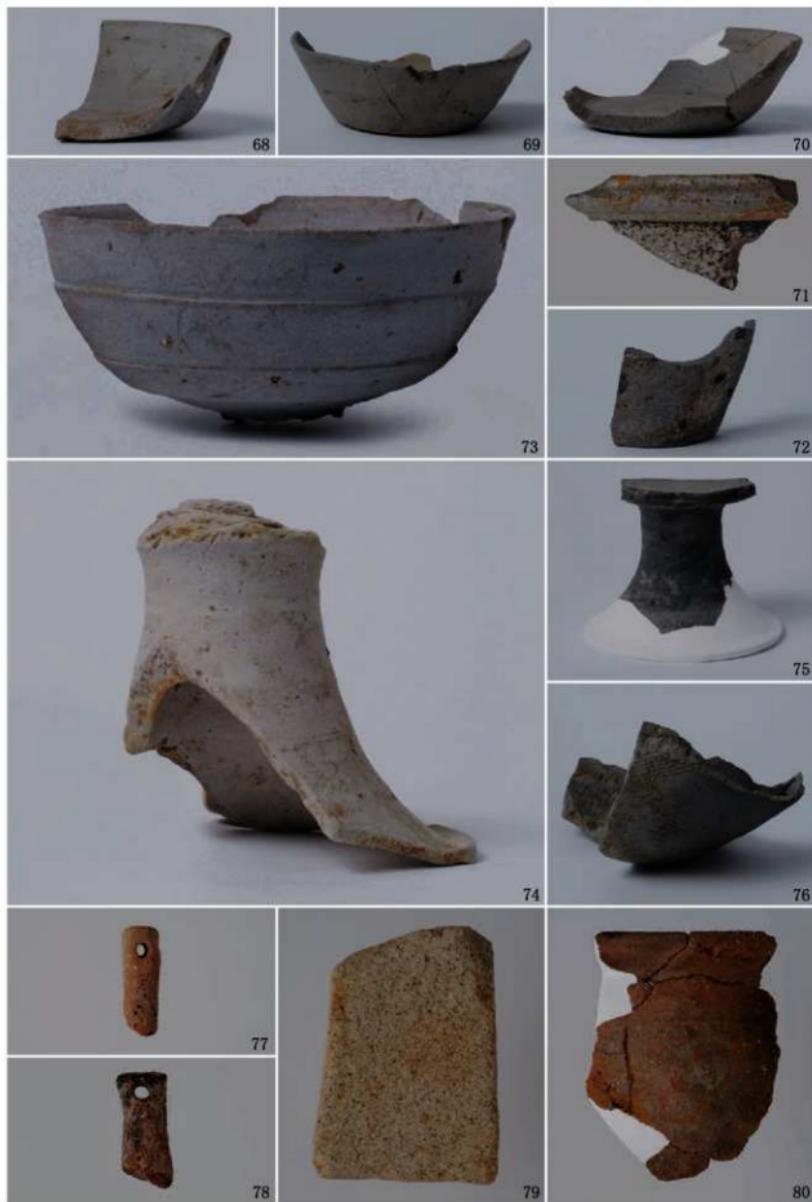


出土遺物 (4)



出土遺物（5）

図版 28



出土遺物（6）

図版 29



出土遺物（7）

図版 30



出土遺物（8）



出土遺物（9）

図版 32



出土遺物 (10)

図版 33



出土遺物（11）

図版 34



出土遺物 (12)



出土遺物 (13)

図版 36



出土遺物 (14)



出土遺物 (15)

図版 38



出土遺物 (16)



出土遺物 (17)

図版 40



出土遺物 (18)

中ヶ原地区図版



調査区遠景 上空より岩淵遺跡、周防国府跡方面を望む（南西から）



中ヶ原地区全景

図版 42



谷状地形全景（南から）



谷状地形上段近景（東から）



谷状地形下段・土層断面（東から）



谷状地形遺物包含層土器集中部（北から）

図版 44



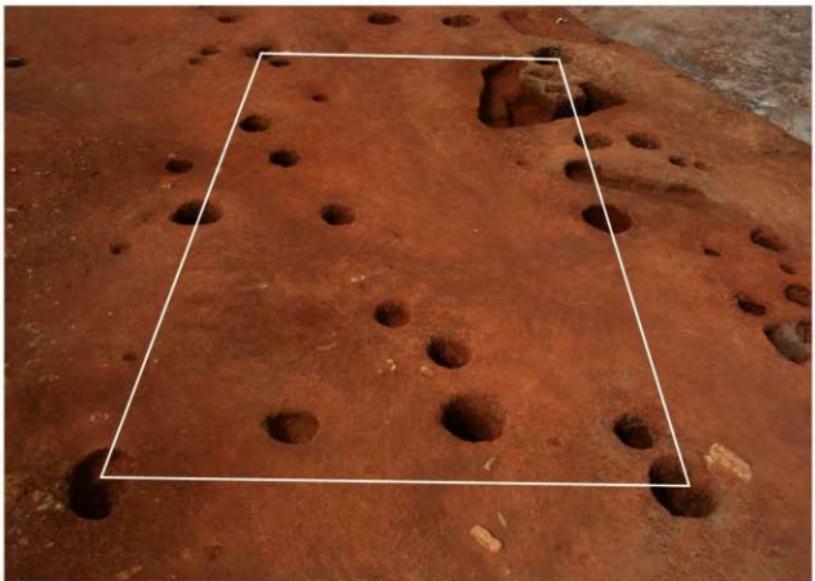
SI601 土層断面・遺物出土状況（西から）



SI601 遺物出土状況（北から）

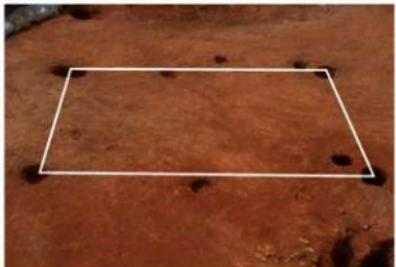


SI602・603 完掘状況（北から）

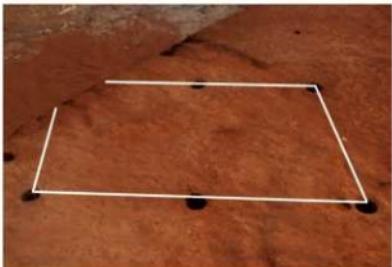


SB701 完掘状況（南から）

図版 46



SB702 完掘状況（東から）



SB703 完掘状況（北から）



SK501 遺物出土状況（北から）



SK503 遺物出土状況（南から）



SK506 土層断面（西から）



SK509 遺物出土状況（西から）



SK514 遺物出土状況（北から）

図版 48



SK510 完掘状況（北から）



SK511 完掘状況（西から）



SK701 遺物出土状況（西から）



SX703 完掘状況（東から）



SX703A 煙道断面（北から）



SX701 土層断面・遺物出土状況（北から）



SL501 炭出土状況（西から）



SD701 土層断面（北から）



SP6003 遺物出土状況



SP7001 遺物出土状況



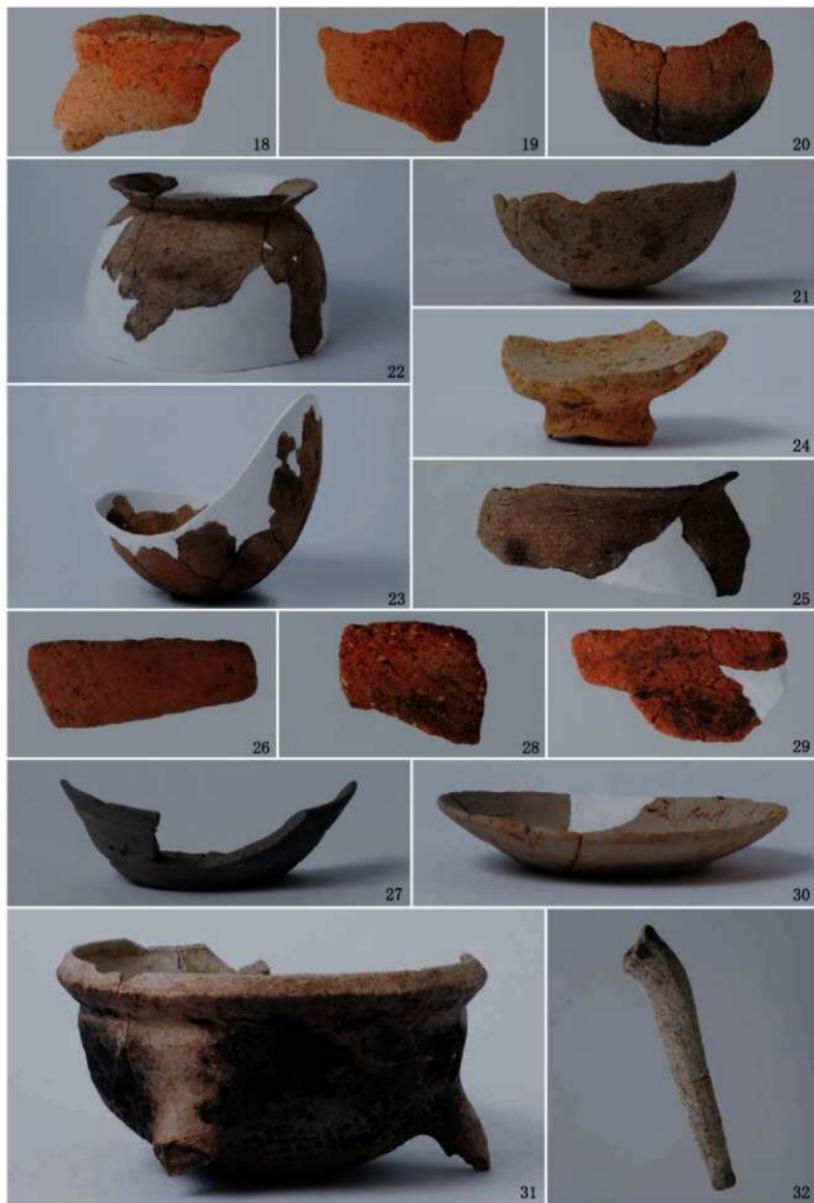
SP7035 (SB703) 遺物出土状況

図版 50



出土遺物（1）

図版 51



出土遺物（2）

図版 52



出土遺物（3）



出土遺物 (4)

図版 54



出土遺物（5）



出土遺物（6）

図版 56



出土遺物（7）

報告書抄録

ふりがな	しもつりょういせき2(にしおさき2・3ちく、むかいじょうだにちく、なかがはらちく)						
書名	下津令遺跡2(西尾崎2・3地区、向条谷地区、中ヶ原地区)						
副書名							
卷次							
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第90集						
編集著者名	光永辰男 水津亜希子 小河泰史 西尾健司 櫻昭博 山田圭子				杉原 和恵		
編集機関	山口県埋蔵文化財センター				防府市教育委員会		
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060				〒747-0808 山口県防府市桑山2丁目1番1号 TEL0835-25-2532		
発行年月日	西暦2015年3月23日(平成27年3月23日)						

所取遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下津令遺跡 (西尾崎2・3地区)	山口県 防府市 大字台道	352063		34° 3' 03"	131° 28' 34"	20140508	1,808m ²	ほ場整備
						20140904		
下津令遺跡 (向条谷地区)	山口県 防府市 大字台道	352063		34° 3' 06"	131° 28' 31"	20140507	2,160m ²	ほ場整備
						20140904		
下津令遺跡 (中ヶ原地区)	山口県 防府市 大字台道	352063		34° 3' 20"	131° 28' 17"	20140501	7,513m ²	ほ場整備
						20141023		

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下津令遺跡 (西尾崎2・3地区)	集落	古代 中世	掘立柱建物7棟、 土坑18基、炉、溝、 性格不明遺構、柱穴	須恵器、土師器、 瓦質土器、磁器、 土製品、銅錢	煎熬用と考えられる製塩 土器が土坑から出土
下津令遺跡 (向条谷地区)	集落	古墳 中世	竪穴建物1棟、 掘立柱建物10棟、 土坑19基、炉、井戸、 溝、性格不明遺構、 柱穴	須恵器、縁釉陶器、 土師器、瓦質土器、 磁器、土製品、 石製品、金属製品	古代の溝から須恵器が多 量に出土
下津令遺跡 (中ヶ原地区)	集落	古墳 中世	竪穴建物3棟、 掘立柱建物3棟、 土坑38基、炉、溝、 性格不明遺構、柱穴	弥生土器、須恵器、 土師器、瓦質土器、 磁器、金属製品、 石器	縄文時代の落とし穴を検 出
要約	下津令遺跡西尾崎2・3地区は古代および中世を主体とする集落跡である。古代の遺構としては、煎熬用と考えられる製塩土器が出土した土坑の他、炉や掘立柱建物などが確認された。				
	向条谷地区は古墳時代から中世にかけての集落跡である。古墳時代前期の竪穴建物や良好な一括資料である須恵器が多量に廃棄された古代の溝や炉、中世の掘立柱建物や井戸などが確認された。遺物包含層からは、古墳時代から中世中頃までの遺物が多量に出土した。				
	中ヶ原地区は古墳時代および中世を主体とする集落跡である。古墳時代前期の竪穴建物や中世の掘立柱建物・溝などを始め、縄文時代の落とし穴も確認された。				

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第90集

下津令遺跡2

2015年3月23日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとつくり財団

山口県埋蔵文化財センター

〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

防府市教育委員会

〒747-0808 山口県防府市桑山2丁目1番1号

印 刷 暫報社写真印刷株式会社

〒752-0927 山口県下関市長府扇町9番50号